麻生路郎主宰

# 川柳雑誌

創刊十週年記念特輯號



# 賀正

昭和八年元旦

ライオン歯磨本舗　株式會社　小林商店

# ライオン歯磨

# ライオン當用日記

趣味横溢近代色濃厚なる
**中形**（四六判）　定價　八十錢　送料　十二錢

可憐優美婦人に適せる
**小形**（菊半截）　定價　五十錢　送料　八錢

最大好評を以て彌〻實行盛なる
**普及版**（四六判）　定價五十錢　送料　十二錢



祝創刊十周年記念號

謹賀新春

帽子をお求めの方は先ず斯界のナンバーワンたる
マンリー印をお選び下さい

鳥打帽子
中折帽子
パナマ帽子
子供帽子

MANLY

大阪市東區內淡路町二丁目二十一

各種帽子
マンリー印發賣元

藤井商店

電話東㊁五八四番



# 創刊十週年記念特輯號目次




題字　麻生路郎　表紙繪　田村孝之介


## 文苑


一句を味ふ……閑生、山雨樓、町二……（四）
轉機……麻生路郎……（六）
千日前今昔史（四）……木村半文錢……（八）
僕の手帖……麻生路郎……（八）
劇寸うらなひ……川村花菱……（八）
創刊時代の人々……橋本綠雨、高橋かほる、岩崎柳路、關本雅幽……（四）
肱枕艸紙……梅本蘆山……（七）
柳觀スタディオ……寺川信……（五）
武玉川初篇研究（八）……梅本秋農屋、森東魚、蛭子省三……（二四）
柳壇春秋……福田山雨樓……（三）
番傘人月旦……「雪」の選者として……川村花菱……（七）
武玉川初篇研究是非……定九郎老人……（三）……蛭子生……（七）
日本柳壇百人撰……路郎、葭乃、新水、閑生、杏三、綠之助、珍竹林、福造、鞍馬、茶六、山雨樓、蝶五郎、溪花坊、綠雨、塊人、司郎、華水、天痴人、信子、民郎、柳路、天邪鬼、愚陀、翠夢、水府、三太郎、半文錢、小太郎、不浪人文醉、呑風、三休、宵果、雨吉白眼子、春秋、孚人、周魚、雨迷、五健、柳建寺、町二、太郎丸、叱咤郎、雞牛子、鮎美、汀柳、啞亭、葉平、柳秀、鐵洲、紫痴郎、山門、濁水、艸樂、明珠、濤明、五花村、文久、夢路、砂人、六文錢、黃子朗、紋太松窓、亂戰、三福、雅幽、東洋鬼、豆秋、杏丁、角戀坊、かほる、迷亭、紅太郎、花川洞、機見女、玉兎朗、柳兒、瀧の人、有石、夢一佛、摩耶火、久流美、杜若、紫明、二南、月下、水車、勝二、青龍刀、五萬石、默然人……（四）
川柳塔……創作……麻生路郎選……（二六）

近作柳樽……麻生路郎選……(六〇)
近作粒々集……諸家……(三一)
一路集
雪……川村花菱選……(七二)
閨……大島濤明選……(七八)
各地柳壇……光耀抄……麻生路郎選……(五二)
西之町MEMO……綠雨……(七二)
飛燕往来……(六一)
挿絵の窓……山雨樓……(一一〇)
編輯の窓……麻生馥乃選……(七三)
炭……麻生馥乃選……(七三)
失望……阿形一杉、生田翠夢共選……(七八)
……(四一)
……足立俶郎……(五七)

## 十年前の私

疣……三太郎
七二九番地……久流美
獨逸で呑む……鍋平朝臣
さらされる……樂居
道アラをしてゐた……宰二郎
荒尾譲介……雅幽
宗教哲學と天文學……杏三
通……夢裡
生活式の大轉向……晴明
若い村長……五花村
人世の機微を體驗した……好古
眼……水車
思ひ出三つ……あん馬
草津溫泉……紅春雨
謝辭……

父としての微笑……日本村
眞劍な不眞面……民郎
行路病者の死……一徹
制服と科學……華水
小倉服……愚陀
立山詣り……久水
退屈に苦しむ……端役時代
別れる……鳥平
寂しい靜太……吉高
東京へ……靜太
死なす……省二
玉突と魚釣……帥樂
「七」になつた頃……錦水
霜を崩ゆる柳……夕鐘
活字に住む……濁水
……銀波樓

三人書房……蒼太
酒と騒ぐ……圓角
知らず……町二
小英雄……八歩
天ぷらのおつさん……秀山
路傍の顔……閑二
野球狂時代……南生
百姓がアラジルか……五健
田舍の垢……天痴人
改良服と洋傘と龜……英賀夫
長髪と戸主……機見女
日記抄……山雨樓
性に目ざめる頃……梅里
秃げる……明珠

長女と川柳を生んだ歳……春秋
山へ登る……緣雨
妻きたる……新水
六年生……變人
京へのぼつた退屈男……司郎
思ひ出と地震……梧郎
幼日記……琴人
母へ歸る……翠夢
母の靈……柳秀
あの街の灯……馥乃
苦笑の値……路郎



謹賀新春
川柳雜誌社同人



勅題　ここも君　太平洋につづく海　路郎

十年前の主幹夫妻

鳩尾海岸に於ける路郎先生と逸目荘真庭
無花果の下に立てる萩乃女史春にあるは
二男アート君（一九二四・三月　黒木英亘撮影）



# 一轉機（一）

麻生路郎




## 一

私は回顧といふことを好まない。回顧は老人のすることである。

私はまだ〳〵老人の世界に足を突込んではゐない。私は相變らず、はたちの前後の意氣を持して、世の青年に一歩も讓らないつもりである。

しかしながら、我が愛子「川柳雜誌」が數へ年十歳になつたことを自他ともに欣賀するためには聊か回顧せざるを得ない。

## 二

勢ひ私は「川柳雜誌」の生れた使命について語らなければならない。

當時の柳界は洵に混沌たるもので、柳誌としても殆んど見るべきものがなかつた。假令一二の例外がありとするも、何れも同人雜誌の樂屋落雜誌であり、しかも刊廢常なく、多くは同人の懷勘定による兎糞的刊行を續けてゐたのである。同時に各誌は所謂作家即讀者の範圍に極限されてゐたために自然各誌間の勢力爭ひが激甚で我誌に據らざるものは柳人にあらずと云つた狹量さがあつた。

それがためか、あらぬか、川柳の本質向上のための、奮闘は多く忘られ勝ちで、たま〳〵これあるも、他誌協力して、これが擡頭を妨げ、思ひを社會へ馳せるに至らなかつた。

## 三

私は私自身の川柳愛のために、又私の愛する川柳のために、曾ては川柳革新の急先鋒であり、只管詩としての川柳へ勇往邁進してゐたが、當時の柳壇の遅々として奮はないのと、各柳人の作句態度の舊態を脫せず、同人雜誌に甘んじてゐるのに、不滿を感じ、川柳を弘く社會に浸潤せしめなければ川柳詩の存在が認識せられる時代は永久に來ないことを痛感した。

茲に於て私は私の急進的態度を捨て私自身の川柳に桎梏せられることなく社會進出運動の第一彈として社會的雜誌に亙すべき方針の柳誌刊行を企て、外に向つては弘く各地の識者に檄を飛ばし、選者及び寄稿家にしても全國有數の人々を網羅するにつとめて、大正十三年一月十九日午後五時これが創立句會を大阪南堀江の書林倶樂部に於て開催し、その二月十五日に始めて創刊號の刊行を見るに至つたのである。(カットの寫眞は創刊號、表紙は柴谷壽伯)

## 四

その當時、同人の意氣の如何に旺盛であつたかは、第二號に發表された本社創立川柳大會の前書をお目にかければ、うなづいて頂けやう。

西横堀に面した何となく氣持のいゝ書林倶樂部の大廣間で本社創立句會を開催した。定刻前から同好者が、ぞし〳〵つめかけて來た。その中に交じつて同人二十餘名の顏が路郎先生を中心にしてズラリと並ぶ。誰の顏にも言ひ合はしたやうに得意と希望に滿ちた喜びの色が漂ふてゐた。

やがて出題される。暫くにして句箋が机上に山と積まれた。披講をする。活潑な共鳴の聲がおこる。階下で開ひてゐる本屋さんの競賣の聲と合して興味津々たるものがあつた。誰かゞこつちは趣味の聲、あつちは生活の叫びだと洒落れて一座を哄笑せしめた。盛會裡に十一時過ぎ散會、當夜の出席者は左の諸氏であつた。(蘆穗記)

路郎、水府、溪花坊、茂男、白露、一聲(今の朝陽)、零骨(死亡)蛸天、柳骨、蕭石、剛山、廣奴、松雨(死亡)凡平、梅風、花城、千代二(死亡)松郎、文久麥郎、歌津美、雅幽、波郎、小太郎、竹人、光太樓、かほる、夢路、百石、天海、順三、蹄二、蝶二、子行、駒人、囚蝶、大頭、葛葉、助六、徹底郎(死亡)紋太、史風、彩峰、六角、右平(死亡)飛水、幸堂、猪太郎、光郎、舟人、輝翠、不盡、二柳子(今の綠雨)古城山啞人、芦穗。

數に於ては僅に五十六名しか集つてゐないが、當時の句會としては稀に見る盛會であつたことは喋々を要しないしかも川柳史上、覺醒的な一轉機ともいふべき川柳の社會化を標榜して立つた川柳雜誌社の創立句會であつたことを牢記したい。

## 五

二月十五日に刊行された創刊號の第一頁を見るに、卷頭言として左の五十九文字が鏤刻されてゐる。

現代人の思想にぴつたりと觸れた詩と云へば川柳の外にはない。我等は此の川柳によつて人生を的確に批評して行きたいと思つてゐる。

と、次で

## 誤れる川柳觀を排す

▲現代人は刺戟に生きる
▲白紙になつて研究せよ

の社論が數頁に亙つて揭載されてゐる何れも無記名であるが私の執筆したものであることは言ふまでもない。當時の柳誌では、斯かる無記名の社論ともいふべきものを揭げなかつたが、(今日でもさうではあるが)私は普く社會大衆に呼びかける一形式としてこの手段を採つた。しかも割見出しまで附して世の耳目に訴へたのである。

### 六

その頃の「近作」のうちより、拙吟二三を揭げて當時を追想することにせう

ひるひなか蠅とる用があるばかり
豚の子に續く豚の子ばかりなり
時計にまでうつる神經衰弱症

そして、我社では選者の共選組を作つて選者の一段階とした。選者濫作の弊をこのシステムによつて矯にかけたしかし共選組の制度は他誌にもあつたが、他誌の共選組は共選々者の共同責任による選句發表であつた。我社では選者二名が同一課題吟を別個に選したために、共選選者の選句標準の相違が歴然として誌上に躍動した。從つて共選選者も競つて選句に腐心した。これは確に本誌の一特色であつた。

更に私は創刊號の十二頁に、

## 末廣博士の「暴政は人を皮肉ならしむ」を讀む

を書いた。これは元旦の大阪毎日に揭げられた末廣巖太郎博士の新聞觀であつたが、所論中、博士が川柳にまで說き及ぼしてゐられたので、その梗概を紹介し併せてこれが短評を試みたものであつた。

この記事を讀まれた反響として、末廣博士の感想が本誌第二號を飾るに至つたのである。

創刊號發表の課題吟は井上劍花坊、岸本水府の兩氏を、第二號に於ては淺井五葉、本田溪花坊の兩氏を煩はしてゐる。

斯くして全國著名選者を網羅して行つた。各號の雜吟は「近作柳樽」の名によつて勿論私が選句した。共選選者としては既に名をなしてゐた吉川唖人、竹田蘆穗の兩君を煩はしてゐるのを見ても如何に眞摯な態度を採つてゐたかが知れやう。

同人雜詠は「川柳塔」の名によつて發表した。これ又私の選句である。

「川柳塔」の人々のその一句宛を揭げてこれ又回顧の一端とする。

團体が鷲張りで鳴らすこと　唖人
宿引の平手は掬ひ入れるやう　蘆穗
Sカーヴ大蛇の樣な列で行き　輝翠
ちとぬけた男が獨樂をよくまわし　松雨
藤棚へ春がきてから暗くなり　二柳子
よつほど儲かれなドラッグの灯　光太樓
タイピスト新米らしい音を立て　柳路
小包の結びは母がしたらしい　零骨
止むを得ず隣へ鍋借りにゆき　一聲
已れから隱居決めて寢て暮し　佳扇
いゝ年でさらばと言へば連れだなり　一洲
歸鄕して母も盃くれと言ひ　飛水

兎も角も來往繁へ乘つて居る彩霞
居候コーヒさました譯でなし助六
だんまで只見る雪の屋根續き夜調
御無沙汰は筆のまわるがまた詫び雅幽
棧橋へ疲れたやうに船が着き風人
こけましたと産婆呼びにやり耕鹽
薄情な親類もゐる枕元露太樓
フト嫁のよすぎる噂聞ひて來る古城山

以上の同人の外に、創刊號の川柳塔に出句してゐない同人としては山口の柳川洲馬が加盟してゐる。

## 七

同人の半ばは嵯人の率ひてゐた川柳以交吟社の人々であつた。川柳以交吟社は柳誌「みをつくし」を刊行してゐたが、その三週年にあたつて、その當時の「みをつくし」に懲らず當時同社の顧問であつた私の許へ、これが主盟となつて大改革をして貰ひたいといふ相談があつた。そのためには當時の「みをつくし」を廢刊してもいゝときへ云つた。そして直ちに廢刊が斷行され、次いで「川柳雜誌社」が私の手によつて生れた。

當時、以交吟社では私の急進的な句風に懲爲たる人々もゐたので、折角發展の途にある吟社の崩壞を危惧して躊躇した者もゐたが、私は句風については「諸君の句風を壓迫するやうなことはしない」といふことを宣言した。そして私の句風についても出來るだけ考慮しようと云つた。しかし私の良心がどうしても容さないで、グン〳〵諸君の句風と背馳する方向へ進展する時には、私は潔く、諸君の意を汲んで退社するであらう。その時、私の後へ來るべき人の斡旋を諸君が希望せられるならそれもするであらうことを約束したその代り私が主盟である以上、私は私の愛する川柳の社會化といふ一つの運動をこの柳誌によつて實現したいと思ふ。從つて「川柳雜誌社」は川柳の社會化と初心者の指導及研究の發表といふ三つの使命を持つて機關誌「川柳雜誌」を刊行することになつたのである。斯くして我社がその機關誌を「川柳雜誌」と稱し、全川柳を代表する誌名を選んだのも故なきことではない。（つゞく）

榮光に輝く昭和八年の新春を迎へ茲に
謹みて各位の多幸多福を祈り併せて十
周年記念事業への御後援御鞭韃を深謝
し奉る

——麻生路郎——

# 私の十年前

本誌創刊十週年を記念するため、社關係の人々に「私の十年前」を募つた。皆とりどりにその人が顯つてゐる。好箇の隨筆集となつたことを、讀者諸君と共に喜びたい（編序不同）

## 疣

川上三太郎

「十年前の僕は何うだつたらうな」と女房に聞いたら女房は「貴郎のヱボはその時分右についてゐましたよ」と言つた。僕は愕然とした。といふのは現在の僕の疣は左の耳についてゐるからである「何日左へ移つたらう」と又訊いてみたら今度は「そんな馬鹿々々しい事は知りませんね」と刎ねつけられた。僕はスゴスゴ書齋へ戻つて頬杖をついたが、果してこれは馬鹿々々しい事かしらん、と考へた。さうしてフト階下へ怒鳴つた事である「オイ子供の足袋が屋根へ落ちてるぞ――」十年後の今日こんな日本語を使はうとは僕は思はなかつた。十年前の僕であつた。

## 七二九番地

安川久流美

生れて初めて東京に新年を迎へたのは十年前に一度、それも景氣のいゝのならよいが苦しまぎれに暮の三十日金澤を脫走。夜遲く池袋驛に吐き出されて知人をたづねたが不在。嚢中僅かを握つて、まゝよ安宿へでも落ち着かう？……と雜司ケ谷の方へぶら〳〵夜店のしまひかけた所でフト思ひ出したのは七二九番地。それは金澤出身の佐野平六榮君の宅――その邊で訊いたら直ぐに知れた壽司屋の横裏、時＝夜の十一時半――

「佐野さん、久流美です」

「ヤーようこそ、今、母と金澤の噂をしてゐた所です」

その夜、同君宅に御厄介かけた事はいふまでもなく、地獄に佛といふのは斯うした偶然だと、今も寒い大晦日の夜を偲び、三十二才だつた若い日を顧る。（十二月十三日）

## 獨逸で呑む

大道鍋平朝臣

十年昔の大正十一年（一九二二年）は私にとつて一生記念すべき年でした。何となれば私がはじめて洋行した年ですから。卽ちその年の秋十月二十九日に神戸出航、印度洋を通つて十二月十日に佛國マルセーユに上陸、はじめてヨーロツパに足を印したわけですが、誰もがするやうに巴里にも立よらず、日本人としては殆んど大戰後はじめて東部戰線跡を經て、ストラスブルヒから獨領へ入り、三度も四度も乘換へをしながら十二日の夕にやつと寒い伯林に着いたのでした。恰度十年前の今日十二日の拂曉私ははじめて獨領へ足を入れたわけですが夜半ライン河畔のマインツ驛で乘換への時、同驛の食堂ではじめてドイツの食事―パンとハムと鰊詰と酢胡瓜にビール―をした時の光景を今に忘れる事は出來ませぬ。當時街の酒場は十二時に閉ぢることになつてゐるので、未だ飮み足らぬ豪傑連は驛の食堂に陣取り、朦々たる葉卷の煙の裡にビールの大杯を擧げ、卓をたゝいて激論するさまは物凄いばかりでした。燕尾服姿物々しい老給仕の堂々たるサービスの間を縫うて大犬が入つて來るのも珍らしかつたが、坊主頭のその酒豪連がその席へ入つて來た私を發見けるなり珍らしい元敵國人とでも思つたのか皮肉にも私のために杯を擧げて乾杯してくれたのも氣味が惡くおそろしい心地がしました。やがて電光で汽車の發車を報らせて來たので寒い拂曉四時か五時頃やつとその塲をのがれる心地で乘車長いラインの鐵橋を渡つた時

ははじめてやれ〳〵と思ひました

（一九三二年十二月十二日大阪にて）

## さらされる

池澤　樂居

道頓堀の日本橋南詰東角にワンダス館といふ寫眞屋が今もあります。その店頭に私の長髪の髭蓬々と伸びた寫眞の引伸ばしたのが、看板になつて出てゐるのを見て來た人から知らせて來た。そいつはひどいと早速行つて見るともう引込めたらしく見當らない。主人に談判したが絶對にそんな事は致した覺えはありませんといつてとう〳〵見せなかつた。

## 道ブラをしてゐた

柴谷宰二郎

芝居や映畫の「此の間十年經過」なんて字幕の前後がハツキリして居ると面白いのですが小生等ベン〳〵グラ〳〵暮して居る者にはトリタテ、これと云ふ變つた想出もありませんが、そのころの毎晩道頓堀附近をブラついて居た自分の姿を想ひ出せんでも有りません

## 荒尾譲介

關本　雅幽

東京、神戸、大阪と何處でも商人志願を見事に落第して商人は僕に不適だと悟れたものゝ學歴はあるでなし、今更鍬を手にする氣にもなれず、結局勞働を賣るの外はなく、下宿屋に陣取つて憧れの荒尾譲介を氣取つて居たものだが當時勞働者にも身入のよい時代で此の荒尾は懐工合がよくなると、紅燈をくゞつては「懐を氣にしながらも膝枕」膝枕じつとこらえて腹を見せ」なんて駄句つて居つたものだ貫一に當るKは意氣地がなくて竹の皮包みを提げては二三日位い居候に來る、お宮のY子は反對に非常に強くて此の荒尾は常に神戸まで呼び出されては相生座を驕らされるのが例であつた。ところが紅葉山人が結末を完成して置かなかつたが爲めに、此の金色夜叉のY子は幾ばくもなく此の世を去り、貫一のKも病みて歸國してしまつたので、荒尾も世の佗びしさに耐へず現代の妻と結婚生活に入り川柳も本格的に本誌創刊同人の一人として加はる事になつたのである。

## 宗教哲學と天文學

安西　杏三

年末になると私は必ず來年こそは屹度一年中つけると云ふ固い決心の下に常用日記を求める。そして來年の主に勉強すべき科目を元日の頁に記入するのが十數年來の習慣である。

併し悲しい事には理想と現實とは必ず若干の食い違ひのあるもので一年中つけると決心する日記も大抵は一月中位で後は全部ブランクに終るのが恒例である。甚しくなると三ケ日位しかつけない事もある。

併し私は今年も不屈の精神を以つてライオン當用日記を一冊求めた。そして八年の主に研究すべき科目を第一頁に記入したの。

（一）宗教哲學（二）天文學

處が昨晩ナイフが見當ぬ儘に方々をさがして居ります内に偶然にも大正十三年の日記を手にしたのであります。そして其の第一頁には

（一）宗教哲學（二）天文學

と記入してあるのを見て茫然自失したのであります。蛇足ではありますが此の二科目に對しては十年前も十年後の今日も全々盲目である事を自白致します。

## 通ふ

村松　夢裡

物を言ふのもよう言へず何か問はれてもすぐ眞赤になつて恰度處女の様な。然し男々しくも希望に輝きつゝ大阪の地へ始めて足跡を印した。これが私の十年前だ。今でもハニカミヤのウブ助でもオヤマで

も買はせれば二人前は勤め様と云ふ代物。顧みればあの頃の事を考へると確かに時代は變つた。南海食堂（難波驛構内）のハヤシライスに舌皷を打つてたまに一合の正宗瓶でも抱へれば、一かどの飲み助の様な顔をしたものだ。それに毎朝難波からあの色街を抜けて新戎橋へ出てせつせと會社へ通つた事を思へば「轉々憶舊の情に」なんて古い文句も出てくる。今では青バス銀バス歩るくより得だと云ふ時代。今に於て我れ十年若かりせばなんて強氣をいつても何時になつても凡物は凡物！私と川柳、これもどうも心許ない然し駑馬に鞭打つてやりますよヤリマスヨ。

## 生活方式の大轉向

大島　濤明

今から十年前即ち大正十二年は私に取つて最も思ひ出多い、意義深い年である。日本としても關東大地震があり一國の盛衰をさへ懸念されたが私は十有七年の官塲生活を打ち切り、柄にもない實業界へと志したのであつた。有りもせぬ智慧と、出來もせぬ事業計畫、殊に財界の事情にうとい私が何で物にならう。或る事業は不成功に終り、株は下り銀は大損と來て遂に吊る首を永らへて再び月給生活、もう此頃ではそんな大それた野心はサラリとやめて、只今日を只現在を樂しみ現在に滿足する、といふ主義に改め、只川柳によつて自己を慰し、生活を興味づけてゐる譯である。それが人間として最上の幸福と思つてゐる。

只今日を笑つて生きる
幸ちを持ち

## 若い村長さん

大谷五花村

私の十年前は關東大震災の明くる年で、馬齢重なりて三十三の時だ。三月には田舍町のチツポケな銀行の專務に擧げられて金勘定となつて、それ迄やつて居た村長サンの公職を九月には辭めた。或る風の日、飛行機が突如村の川原へ不時着した折、醫者を伴つて現塲へ駈けつけた處迄、甚だ敏速であり若い？村長に珍らしいとあつて初夏、所澤飛行學校で賞められて御馳走になつた事がある、又軍艦に乘せて貰つて横須賀から鳥羽へ行つた事があつたが、其時私の中學時代の同級生だつた久米正雄にトテモよく似た艦長の大佐が、つい先達て何とか司令長官になつた高橋三吉大將だつた。十年といふと大佐から大將になれる。私共の十年の川柳界が何を生んだ？

村から町への通勤が厄介なのでケチなバラック建を立てゝ住み初めたのが卽ち今の私の住居であり、大正四年からの白河川柳能因會も當然其處へ移り、やがて昭和元年には東北川柳會が其處から生れたのであつた。

## 人世の機微を體驗

藤里　好古

一九二四年は、過去に於ける最も思ひ出多き歳でした。その前秋、マキノキネマの今井專務達と、民衆娯樂研究社を創立、その總務に就任、二月から巡回映寫班長を兼ね、十月迄、技師、解說者、樂士オール十三名の一隊を引き具して、和歌浦より三重縣長嶋港迄、鯨汐吹く熊野灘を毎月往復したものです。此間持病發作に禍されたり、土地の遊人と出入りがあつたりして悲雨慘風の苦を舐めた事は一再ではなかつたのです。盆興行には臨時雇の技師に、開演間際に逃げられ、ハンドルを廻したこともあり、尾鷲では懐中僅に十三錢、感附かれぬやう朗らかに苦境退出に腐心する折りも折、番頭のSと土地の遊び人Tとの間に「のせ歩」の事から出入が生じ、私を拉致しやうとするに及んだので高飛車に出て機先を制し、此一件は解消したのですが、熊野地方には追込みと稱する食詰酌婦が居り、其裡でも札

附の不良であつた「ピストルお政」と「ハルビンお君」の二人が其際の私の意氣が氣に入つたと云ひ、附け廻はされ、果てはお政が和歌山の私の宿へ脫出して來たのには面喰ひ、新地の岩城のお女將や靜葉と一芝居打つて漸く追拂つたと云ふエピソードのかづ〳〵があります。要するにオンチであつた私が、始めて人世の機微を體驗した記念すべき歲でした。―三二、二、五稿―

## 眼

吉田　水車

私の十年前と言へば徵兵適齡で、本籍地の京都上京區役所へ出頭した譯で、男子の誰でもが味ふこの感激も不幸合格の條件に合はなかつたのは殘念と言ふよりも恥かしい次第であつた。其不合格の點の一つに眼疾があつたが、我々の前日にも檢査があつて、其中の一人が徵兵忌避の目的で故意に近視を裝うてゐたとの事で大分ひどい目にあはされ何でも眼球摘出檢査の上、とう〳〵戸板に乘せられて、大學病院へ送られたとか、碌でもない噂がとんで、暗室（眼質檢査室）行を宣告され、午飯にアンパンをかぢり乍ら區役所の庭で其時間まで待たされた。我々同病者約十人は何だか妙な不安に襲はれたものであつた。勿論伏仰天地に恥ぢない我々のことなので無事に終了したものゝ、固くなつてへまなことも言つたりしたが、誤解と言ふものは恐ろしいものだから、ヒヨツトして眼の球をでんぐり返へされてゐたならと今思ふても苦笑ものである。

## 思ひ出三つ

米村あん馬

現在の組の建築技師として大大阪に活躍してゐる弟が、當時東京市に或る會社の新築工事を監督中グラ〳〵と襲つて來たあの大震災、數日の間一家を擧つてその安否を氣遣つた中へ「無事」との飛電に接し天祐を感激した喜びが丁度「私の十年前」だ。

◇

「十年ぶり」のなつかしさと親しみに高調した大連の妹と姪が歸省、とつて十三歲の姪の案內役として水鄕松江を紹介したのは好いが、飾窓に光る一ケ三十幾圓の金時計を買つて呉れとせがまれ需めに應ずるには餘りに貧弱な伯父さんぶりを如實に發揮したのも「私の十年前」だつた。

◇

うどの大木徒にものにならぬにせよ「川柳禮讚生活」に入つてとも角も十五年と云ふ古色蒼然を耻づる事も無く自ら喜び又自ら唄つた感激も「私の十年前」の樂しい思ひ出でもある。

## 草津温泉

熊谷　紅

十年前の私は草津溫泉に居りました。入湯でなく溫泉旅館の共營をして。群馬縣の北海道と言はれる草津の冬の長い事。五月にやつと春が來る草津。梅桃櫻菖浦等一度に咲く美しの草津。夏のない蚤蚊の居らぬ美しの草津。八月にはもう秋の七草始め御山撫子等高山植物の咲く美しの草津。冬は一度降つた雪が解けない上へ段々雪が降り五寸一尺五尺一丈と一望只白皚々の美しの草津。落葉松の森林に包まれし美しの草津。湧口三百餘箇所もある溫泉鄕草津。草津音頭は湯に這る前に板切れにて湯を混ぜる時に唄ふ（俗に湯もみ唄と言ふ）背の子がどこで覺えた草津節

## 謝辭

篠原　春雨

光榮ある此の記念物の紙上に於て初代川柳翁、恩師阪井久良岐氏、全國先輩柳友及び甲府川柳團員、縣下同好者各位に對し謹で感謝の意を表す

右は滿十年前大正辛酉歲水無月二十七日私の四十二歲の厄年を記念すべく、山梨縣下の柳友の手によつて發行せら

れた「續川柳春雨傘」の巻末の一文であります。

## 父としての微笑

岩垣日本村

指を折る迄も暦を繰る迄も無く、私共夫婦が父となり母となつた劃期的な十年前。

默々としてゐた私の神經は自分の子供を見た時急に落付きを失ひ、私として取るべき總ての事を忘れて仕舞つた。

暫くすると何所やらから湧き上る嬉しさを私の體に感じたと思うと、元氣を出して子供の頭許へ座り直した。そして父としての最初の微笑をこの愛すべき私の子供に與へた。

今此稿を書いてゐる午後九時私の傍には其時生れた子供が十一歳になつて弟と仲良く眠つてゐる。

私は微笑した……この微笑は十年前私が父として與へた初めての微笑と全く同一である。子に與へる父の微笑は制限も無く地球の公轉にも何等關係が無い。

十年前の私は子供が生れた喜びを知つた。けれども〳〵この愛すべき子供が私の精神上生活上に與へる慰安信頼が今程で有らう事を想像もしなかつた。

机を離れるに際し父としての微笑をも一度子供等へ投げて筆を擱く。

## 眞劍な不眞面目

石曾根民郎

人生といふことばを、ものごゝろにも銘せられたのは、小學校六年生のとき、私達を受持つた代用教員Y先生から人生問題に關する自分の思ひ出を語られた。睦月いくばくも過ぎない或る小春日和の授業時間の際であつた。

先生は中學卒業試驗の歴史課目の答案用紙に、いま、なやんでゐる人生について、容赦もなく長々と書き綴つたのである。歴史問題に何等の答案すらしない不眞面目が、落第點を取るかどうかの懸念は毛頭なかつた。たゞ一途に人生に對する深奥な疑惑が、かくも先生をして大膽に、しかもうそぶかせたのである。

一體、自分がどうして、こゝに在るのか。自分のたましひが、死後どうなつてしまふのか、そしてからだが、といふ疑を、其後幼い私のこゝろのなかで次第に芽生えさせて行つた所以のもは、この若き先生の述懐談にいさゝか負ふところがあつたといつてもよい。

純眞でありすぎた當時のことどもを考へると、今の自分でしかない、或るさりげなさに腹立たしくもなる。

## 行路病者の死

長谷川一徹

寒風の吹きまくる塲末の療養所―そのガランとした重症室に唯一人四十男の患者が寢かされて居た。行路病者である。彼には附添ふ者などあらう筈がなかつた。

張り切れるやうな元氣を純白な診察衣に包んだ若い醫學士は誰か會ひたい人があるなら呼んであげよう金は僕が出してあげると云つたが患者の答は誰も呼んで要らないと云ふのであつた。

次の廻診日に醫學士は急いでその室に這入つて行つたが患者はもう病床の上に冷たくなつて居た。

「然し良い覺悟だつたね」と云ふと受持の看護婦は「いゝえ夜になつて誰も居らなくなると寂しい寂しいとそれはそれは恐ろしい聲を出して困りました」と答へた。

若い醫學士は打ちのめされたやうに默つた。

死體の上は夥しひ虱の群である。

## 制服と科學

日野　華水

私の十年前。それは今から十歳若かつた私である。中學校の制服を着けた私。その制服の様な私である。地球の自轉だの公轉だの。カリームとナトリームとの相異だの。十字

軍の行軍の跡だの、等々の私だつた。世の化學者が涼し過ぎる夏、暖か過ぎる冬が來ると驚いた様に、不思議がつて驚いた私なのだ。そして二に二を加へると四になつた私だつた。

しかし今は二に二を加へると或ひは五になるかも知れない私の境地がある。寒い夏、暑い冬が來てもかまはない私。太陽の黒點が異つてもかまはない私。けれども十年前の事を忘れたのでもなく、頭の裡にへばりついてゐる私なのである。

太陽の黒點が變つても、詩の境地には變りがない、化學者から云へば不變のものは無いだらう。十年前の私は信じてゐた。しかし今不變の詩の境地がある事を私に知らしめたものがある即ち川柳である

私の十年前は科學の人であり、今の私は詩境の人である

## 小倉服

伊藤　愚陀

「春風に小倉の紺を匂はせて」

十年前の私の姿―それから數年後川柳をものし初めた私が描きだした、懐しい姿、淡い姿。

―なに、ちよつとしたバラマウントだねー

## 立山詣り

越田　久水

山登りに憧憬の時代ノ年は十九才血氣盛んな者、我地方では一立山へ參詣してこない者は男ではない」とまで言はれ、昔より隨分難儀して登つたものである。約束の友人が一人止め二人止め最後は、松本君と二人。初めての立山危險を感じながら、案内人も連れず、だか、千垣、藤橋、ブナ坂にて東京、大阪の人々にて十人組と稱へる連れが出來元氣にて雄山神社頂上を極めて下山、途中立山溫泉にて最高料金の旅館部に宿泊、十人組の惜別の宴を張つた。今以つて文通を致す、十年前の登山友人である。雄大なる立山後立山の連峰、明方の頂上、頂上よりの富士、淺間、鬼嶽大連華の眺望、大瀑布の壯觀五色原の植物、山の鳥類辛苦を忘れの山の神秘、その後立山登を忘るゝ事出來ず今年まで四回登山、今は川柳登山と稱してゐる十年前よりの立山には未だ未だ憧憬れてゐる。

## 退屈に苦しむ

吉岡　鳥平

世の中が退屈で退屈で、全く身も魂も氷化するやうな退屈に襲はれて悶え苦しんだ―何が故に又どんなに退屈だつたかはコノ葉書では書切れぬ―

土地を變へて見たら或はコノ退屈を征服出來るかも知れんと考へると矢も楯もならず果して仕事が有るんだか何んだか解らぬ大阪へ無鐵砲にも飛込んで行つたのが丁度十年前大正十二年の三月だ―そして大阪で、果して退屈は征服出來たか、それも此所には行數不足で書けぬのが殘念―

## 別れる

長野　吉高

今の通りの貧乏暮しでなにぶんまだ若かつたので劇文學者か、何處かの大學の教授さんかまたは禪寺の坊さまにでもなつたものかと迷つて勉强中でした。

父が私のことを心配しながら死んだ頃で非常なショックを受けたものです。それと、私の好きだつたある病弱な娘さんと不意に別れた頃で、これは色々の意味に於て私にはいゝ試練でした。この人はたぶんもう亡くなつたでせう。お正月早々不景氣なお話ですが事實だから至方ありません

## 寂しい靜太

石森　靜太

靜太の句はみんな寂しいぞ！僕の柳友たちは言ひます。十年前、其の時分の靜太は―兩親や兄達の進めるまゝ、たゞ人形の様に何等自らの志望や又、何等の準備もなしに尋

常小校學からは無理だと言はれてゐた當時、梅田驛の裏手にあつたウシマル工業（現在の都島工業學校）への入學試驗を受けた。算術や國語はパスしたんだらう。大嫌ひだつた理科の試驗。何でも六つか七つの問題の內に半分書いたのがたつた一つ。確實に零點だつた。發表日、指定の場所に自分の名前が見ても見ても見つからなかつたからつて、一寸も悲しい事もなかつた。むしろ、僕自身よりも常日頃子供達にとつて非常に嚴格であつた。父が落膽して、其の氣持ちを幼い僕に見せまいとして居られた事が寂しかつた父は何遍も〳〵「一ぺん位スべつたつてかまへん又來年があるからな！」と繰返して居られた。二人が寂しく無言で校門を後にして、梅田驛の近くまで來かかつた時、上りか下りかの汽車の汽笛が物悲しげに魂に喰入る樣に響いて來た。始めて自分は何だか悲しくなつて父を見上げると父の瞳に泪が光つてゐた　其の時自分も思はず涙した事を今でもはつきり覺えてゐる——。ね、その時分から靜太は寂しき男だつたんですね。

## 東京へ

蛭子　省二

研究は相互扶助による方が便宜であり又刺戟さるゝ處が多い、私は川柳詩にもう一層研究熱を加ふべく一家を擧げて東京生活に進出したのであつた‖川柳雜誌創刊號は東京で讀むだ‖無論一方に新事業を興し生活の安定は充分計つたのであるが、あの大震災に全く出鼻を叩きつけられ、まあ命を拾つたのがもつけの幸であつた。地震雷火事、どうも東京が老母のお氣に入らなくなつてしまつた（夫れに寺詣の電車通りなど老人に對する同情的待遇が都會人には足らぬ）私も玆に省る處があつて一切の慾念を棄て高齡の母に仕へようと此地に居を卜してもう一ト昔だ。今では一身に叶ふ程の川柳研究に倦むを知らず沒交涉とは斷つて貧しくも讀書三昧の日常だ。十年前も愉快だつた。今日も亦愉快である。十年後の頃は溫泉地に療養しつゝ快心の川柳でも詠むでゐたい。

## 死なす

西田　岬樂

十年後と云ふ言葉がある爲めに喘ぎながらもいきついて了はず人生を引づつて行きつゝあるものゝ、十年前の事は只苦いものばかりが記憶に殘つてゐる。十二年前の今月、私は妻を亡くした。その頃川柳を作る氣はなかつたが、妻の葬式には多くの川柳家達が集まつて下さつた事も記憶に新らしい。父當百が三人の孫を自動車にのせて葬式を送らせた事や、水府さん路郎師等が式場の受附をして下さつた事、絲天、半文錢さん達の弔客を受けた事もつい此の間の樣に思はれる。

## 玉突と魚釣

上野　錦水

私の十年前恰度二十五才で今を盛りの男振りの時代だ。大正十二年關東大震災の年頃に當る。當時N産業銀行の出納課に勤めて居た。其當時の趣味は玉突と魚釣とで未だ川柳は少しも知らなかつたが、同僚に內田北山人君と云ふのがあつて、同君が後年「浮き城」を刊行せられた。此れが當地方に於ける川柳誌の創始と云ふべく、同君を以て鼻祖とする理由だ。確か四號まで出されたものである、同君からすゝめられたが、其の當時はホンの讀むだけで作句は出來なかつた。最近何か個人的柳誌を出し度い慾望に馳られて居る。幸ひ大方諸賢の御指導と御鞭韃を得たならば或は物になるかとも思つて居る。

（一九三二、一二、一四）

## 「七」になつた頃

姬田　夕鐘

木綿から銘仙の着物、小倉の帶から博多帶、柳の下駄から桐の下駄に變り、その上に憧がれの羽織を着せて貰つて「吉」から「七」へと大きく店の間へ書立てゝ名前替の披露宴のひとくさりもすんで、手代が出來上つたのが、私の十年前の呉服屋時代の姿です。その頃いとかぼそき我々同輩三人寄つて時事新報の柳壇へ面白半分に投句を申し合した、入選したものが洋食を奢つてもらふ約束がまとまつた。さて萬良く私の一句が活字になつて洋食にありついたのを覺えてゐる。

その後川柳には興味はあつたが作句しようとも思はなかつた。五六年も後に鮎美兄と知りあうて川柳に染り、今日の川柳に樂しく生きてゐる私を心から嬉しく思ひます。

## 霜を崩ゆる柳

中澤　濁水

大正十二年の、勅題は「曉山雲」で、亥の歳、賀狀の中の「雲を拔く山も初日の光哉」「日に染まる高根の雲や明烏」に限りなく心を動かされて、自分も俳句（川柳は土佐に無いので知らず）をやつて見ようと早速高知公園三の丸に行つて、寒さに震へながら泣く〳〵作つたのが「獅子一吼雲押開けて初日哉」そして學校始業式へ出る途中浦戸灣頭の葛島橋で「おく霜や岸邊に浮ぶ舟の上」と今度は即座に出來た。兩ら實に名句であるといふ大自信のもとに、右二句を「雲を拔く」の句主破戒堂魚佛宗匠に送つた。ところが期待に反して、さん〴〵にこきおろされてしまつた。

翌年四月神戸に奉職することに成つて、九月二十三日（元祖の忌日など勿論知らず）新開地の書肆で「誹風柳樽通釋」と「川柳ふところ手」とを買つて、友人から「物好な男」と笑はれたけれども、以來神戸柳壇に投句しはじめ、屹度魚佛宗匠の鼻をひしいでやらうと決心したが、さて〳〵お恥しい次第です。

## 活字に住む

窪田銀波樓

私が從事してゐる北國新聞今こそ十三段ポイント活字十五詰の體裁だが、十年前は舊式活字の十五詰十二段で頑張つてゐた。そこで私も編輯局の一隅に頑張つてゐた。十年一日の如しとは、恪勤精勵を賞める言葉に使はれてゐるが一面からいへば平凡な、覇氣のない勤めぶりをケナす言葉とも受取れる。他社へ變つて羽振を利かしてゐる人や、縣會議員で懷手の舊同人の中に私ばかりは眞に十年一日の如く平々凡々、そこで私には十年前も十年後もない事になる半年の辛棒だと考へると、さして苦しいものではありませんでした。弟は子守ばつかりさせられるとこぼしてゐましたが、僕は樂でした。一誠堂主人の姉がお內儀さんで、隨分美人でしたが、毎日お茶の水の順天堂病院へ通つてゐました。僕はお客と書物の內容に就いて話込むことが多くて主人には不評でしたが、お內儀さんは大いに認めて呉れてゐました。第一書房主の長谷川巳之吉氏が、未だ「新演藝」の譯者時代です。一日尋ねて來て、主人が留守なので、お內儀さんと二人二階へ上つて長いこと下りて來ないのです番頭に訊いて見ると、例の春宮冊子を見せてゐるとのことでした。美男美女が春宮冊子を中にして一室にゐる情景を描くと、僕はヤキモチ不安を感じたことです。又主人達の留守中に番頭と二人で藏ひ込んであるそれらを引くり返して、隨分いたづらをしたものです毎夜閉店後、風呂屋で弟と顏

## 三人書房

平井　蒼太

兄弟三人で古本屋を營むことになつたのです。見習ひの爲に僕と弟の二人は、神田の古本屋へ別々に奉公しました生れて始めての奉公でしたが

を合せて、そこで苦樂を語り合つてはげまし合ふ時が、一日の樂しい瞬間でした。結局三ケ月しか辛棒出來ず、鳥羽の造船所にゐた兄が上京すると同時に、二人とも店を飛出して終ひました。そして本郷團子坂上へ、三人書房といふ古本屋を開いたのです。店の全面をペンキ繪でぬりつぶした大變妙な店でした。淺草オペラ、林初子、變態マダム、「書物往來」の神代種亮氏、芝居繪など思出は盡きませんが、それらはまたの機會に讓りませう。

## 酒に騷ぐ

櫻井　角

當時東天下茶屋から通つて居た。十二月のことゝて駄目の皮とは分つて居たが、催促に寄つて、あたら口に風を引かせて、空腹をかゝえて家についた頃には身も心も冷えきつて居た。

歸つてやれ〳〵と待ち詫びて居た盃をとり上げ、例の急調子であほりつけて銚子を空にしていゝ氣持ちで小用に立つた。

用を終つた位までは分つて居るが、後は何にも覺えがない。フト氣が付いたら、醫者が居る。頭を冷してあるといふ騷ぎ、きけば便所で大きな音がしたので家内のものが驚いて來て見ると、きんかくしを前にして往生して居たといふ。自分としては痛くもなし苦しくもないから、氷嚢を外し藥も呑ます、そのまゝけろりとして十年後の今日も生きてゐる、今後いつまで生きるやら。

あの世とて相當住める所なりらざりき。

而して、我今日の禍根は、實にこの時に孕まれたりき。

生きるべく心の疵は癒やすまじ

## 知らず

松丘　町二

一つの帽子を脫いで、別の帽子をきたる年。

一つの町より、他の町へ移り住める年。

當時の我は、社會を知らず人間を知らず、川柳を知らず女を知らず、己自らをさへ知らざりき。

## 小英雄

大西　八歩

「エイツ！」氣合諸共指先に持つた一寸大の安全ピンを左の耳たぶへぐさつと突き立てゝそれへ直徑二寸もあらうと云ふ超舊型の銀製懷中時計をだらりとぶらさげて昂然と嘯いたものだ――「諸君！かくの通りであります、精神一到何事か成らざらん、いやしくも男子と生れて針やピンを身体へ突き立てる位屁の河童であります。我々の責任は重大であり前途には幾多の難關が横たはつてゐるのでありますが然し乍ら……」譯の分つた樣な分らぬ樣なことを、それでゐて自身は燃え立つ樣な熱氣に兩頰を眞赤に染め乍ら壇下の學友をへいげいして一かどの小英雄を氣取るのだつた。

――縣立鳥取商業學校の秋季辯論大會で、當時三年生だつた私。

## 天ぷらやのおつさん

奥野　禿山

私の十年前は非常に窮迫時代で、失職の果て當萩の茶屋で、市場の端で軒店を借り、東京天ぷらを賣りました。四五日目に鍋を辷らせまして、油が火に這入り其處に吊つてあつた活動の廣告ビラへ燃え上り、アツと云ふ間に軒の天幕を燒き、今や大火事になるのでしたが、附近一帶の人々大勢にて鍋へ菜つ葉を投げ込み、道路へ運び天幕はバケツの水で大騷ぎの中に幸に大事にならず無事鎭火いたしました。

私は其際顏一面と手に大火傷をいたしましたので、早速最寄の醫師で手當をして貰ひ御近所へ御詫に行つたりして二三日店を休みました。

其後又も道具を揃へて商賣いたしましたところ、火事で顏燒いた天ぷらやのおつさんで一時は非常に繁昌いたしました。

カホヤクの天ぷらやのおつさんと名が通つたのも水火の中で働いたからでしようか。これが私の十年前のおはなし

## 端役時代

楊井　二南

中學の三年生だつた私。

その頃は華水君も亂耶君も私も未だ川柳家ではなかつた私の劍道も未だ黃喙時代で生傷の絶間がなかつた。運動塲では亂耶君が未來の選手を目指してテニスの練習に餘念がなかつた。

その時分から華水君は芝居が上手だつた。よく小學校の講堂等で私も共演したものである。華水君の三枚目振りはその頃既に非凡であつた。彼の一擧一喋に皆腹の痛くなるまで笑はせられたものだ。上演したのは大抵落語を勝手に脚色したものであつた。私は大抵の塲合端役だつた。それが不平だつたのか或時一人で劍劇をやらして貰つた。家から秘かに正眞の日本刀を持ち出して劍舞やら何やらわからぬものをやつた。見物がヒヤ〳〵して呉れるので調子に乘つて振り廻してゐると目釘が拔けて中身が飛び出して了つた。今度は私がヒヤリとした

誰が怪我をしたのかもう忘れて了つた。

## 路傍の顏

阿部　閑生

屈へて十年前は震災で東京を逃げ出した年である、突如として常心を失つた人類は鳥獸よりも遙かに胴慾で無節操で不潔なものだといふ事をまのあたり見せつけられた自分が、燒け失せた店と住居を見もかへらず、妻子と四人着のまゝで大阪へ着いた折に、郊外の閑靜な邸宅から謠の聲が洩れて、植木屋が松の葉刈をしてゐる光景に目をそむけたものであつた。その後勞と資の狗となつて幾度か東海道を走つた。ある夕べ、亡ぶものは亡び、殘るものは殘つた銀座の路傍で、見知顏の乞食に遇つて、失ふものを持たぬ者と失ひ盡せぬ者とは共に安全であると思つた事である。

人に死し狗に生れてこの世を見

## 野球狂時代

前田　五健

「コリヤ何んだろ」「待て〳〵毀さない樣に」其れから當市の史談會で研究して貰つたら、石斧、彌生式土器其他先住民の遺物……之れは今から十年前の初春道後グラウンド新設工事最中の話で、私は野球と川柳に夢中の時代でした。推されて實業野球團の理事となり、一軍を連れて連戰連勝のスバラシイ鼻息、寒風何んぞ吹雪の中の初試合と頑張つた、オソロシイボール狂川柳は而笑子門で頭を叩かれつゝ面白くてならぬ表皮時代

媛柳が石の上にも三年の根と芽を出しかけた時、亦た野球は松山商業に中村（明大）森本（法政）森（早大）の活躍し高松中學の水原（早大）の一軍を向ふに四國の球界を唸らした狂噪時代、私の勤め先も世間の潮流で緩漫の大目に見る時、總てが意氣とこん氣で、晝は野球、夜は川柳でな工合で面白かつた十年前、よく云ふ老人の言葉、昔は……の憲法文句に入りかけた今の私……十年前は一茶の句の通り、こんなオヤヂでなかつたにであります。

## 百姓か　ブラジルか

廣江天痴人

縣立農林を退いて二年目、百姓の見習生として無我夢中で働いてをりました。朝は五時頃に親父に起されて眠い目をこすり乍ら松江に出かけ、「しよんべエ、しよんべ〳〵〳〵」と呼び乍ら下肥を買ひ歩きました。この頃の私の耻「孝雄われ百姓なれば朝の町

を肥買ひ歩く高ごゑによびて」この頃は下肥一荷が人尿五錢位、人糞十錢位でした。飲食店の便所と官吏や軍人の便所を汲み取るのが最も嫌でした。飲食店の便所からは變な紙やゴム製品が必ず出て來ました。官吏や軍人の宅では細君がツンとしてをるのが嫌でした。一軒美しい未亡人と娘さんと二人生活の宅がありました。大變親切でした。娘さんの美しさに肥桶をかつぐ悲哀をつく〳〵味つたものです。

そしてブラジルへ行きたい希望を實現しやうとあせり出したのがこの年の暮でした。長男でしたので家族や親類から彈劾を受けて堪えたものです。この頃から私の家も沒落階級の必然の徴候を現はしはじめました。私の貯金を全部ひき出して大阪へ出る途中を押へられて、しこたま叱られたのがこの翌年で私の二十歳の時です。拙い話で濟ません

## 田舍の垢

荒井英賀夫

十年前の父、十年前の母共に若さの變化のみだが十年前の私大阪へ出て（光路師の居られる店）三年目田舍の垢が大分落ちた頃です。でも煙草の味、酒の味、カフエーの味は勿論、川柳の味も知らなかつた十年前で十年後の一九三三年は？？？

## 改良服と洋傘と龜

竹内機見女

來年の春は女學校に入るべくその準備に取りかゝつてゐたその頃十二歳の夏。

田舍では改良服と云ふのが流行し始めたのである。白地に綠の格子の入つた縮の洋服を仲のよい友達とこさへて貰つた。ところが袖附のところは丁度看護婦の肩の樣に一吋も高い山があつて、これが最も得意とする處だつた。靴は小學生にしては贅澤な編上げ。そんな格好で鹿爪らしく記念撮影と洒落こんでゐる。しつかと摑つた洋傘は自分の身丈の三分の二はある代物だ。

今見るとモダーンを氣取つたすまし顏がとても面白い。

親友の三木さんの家は三丁程離れてゐたが、よく花を持つて遊びに來た。潮が滿ちて來ると池の水が增して、小さな鮒が澤山入つて來る。時には龜も入つて來た。母にねだつて酒を呑ましては近くの大川へ放しに行つた。彼女が急に大阪へ轉校したのは小學校卒業のほんの眞際であつたが其後青森へ、更に東京へ行つたといふ事を聞いてゐる。あの紅い頰、大きな美しい目、愛らしい唇！大阪行きの汽船のデツキの上で徐々に遠ざかつて行つた彼女の姿が、マザ〳〵と浮ぶ。

爾來十年、何が私を川柳にゆかしめたのか。

## 長髮と戶主

福田山雨樓

二十七でした。その頃は毎日克明に日記を書いてゐたので、今靜かに繙いて見ると九月四日「初めて髮を分ける」とある。二十七になつてやつと髮を分けた僕、しかもその理由がちと變つてゐた。少くとも見榮や體裁ではなかつた長髮は人の勢力を强める、と云ふ文獻に氣付き一も二もなくそれを信じて早速長髮に取懸つたものである。このいゝと信じたことに速時着手する純眞さと勇敢さは僕のマスコツトとしたい。

次に僕はこの年戶主となつた。春養父が肝臟癌で亡くなつたので老祖父母、妻子の四人を抱かへて戶籍の卷頭を切ることゝなつた。遺產は？ちよつぴりあつた。と同時に債務も其儘繼承された。商業學校を卒業してゐる僕はこの邊から拜金宗のカチ〳〵に向ふ筈なのだが、根が文學の好きな僕はハンドルを橫に切つて翌年から川柳に手を染め、とう〳〵病みつきになつてしまつた。しかしこうなつたことを少しも悔ひてゐない。

謠曲もこの年から身を入れて稽古を續けた。

# 日記抄

白井　梅里

六月廿七日　變裝百種寫眞として神官と使丁の姿に早替して一枚に撮影する。

六月廿八日　一年計劃で伸した髪が一尺近くなつたが、いよ〳〵切る事にする。床屋は鋏を持つてからも何度も念押する。刈つた後は坊主頭がいさゝか淋しい。

寫眞帳童貞とあり二十七髪刈つて何發心とからかはれ

## 性に目ざめる頃

尼　綠之助

その頃の私は中學の三年生だつた。何んといつてもなつかしい想ひ出の渦の中にある性の目覺めと病弱を交へた青白き惱みは、その頃の私をして言はしむれば實にやるせなき時代であつた。「秀才文壇」といふ雜誌にプロレタリア文藝を讀んで、忘れ得ぬ感銘を持つたのもこの頃「文章倶樂部」を讀み初め、小說家になつてやらうかと考へ初めたのもこの頃、初戀のやうなものに手紙を幾度か書いたこともこの頃、石見の山中の一小溫泉に初めて着たもとのある着物であほいなやみを描いてゐたこともこの頃の事です

## 禿げる

西村　明珠

母とゐて夫婦かと思はるる僕ポマードの必要を認めない僕若い身で課長か重役に見られ得る僕等々それはみんな僕の頭が禿げてゐるからなんです。そしてその禿げかゝつたのが忘れもしません丁度十年前の長男が出來た年からなんです。

## 碁と發句

喜多　春秋

十年前といへば一九二三年であり、卽ち大正十二年である。日記帳を引つぱり出してみた。その頃は日記を書いてゐたんである。碁を打つてゐる。ヘボ碁を。ホ句をつくつてゐる。ヘタな俳句を「オイえらいこつちや。これを見ろ」ヤツ、今の號外か。ほんとかい。こりやアえらいこつちや」大八車が吹き飛ばされたといふ被服廠あとの慘！それ東京震災の年であり、春秋の獨身時代でもあり。川柳は作つてゐたか作つてゐなかつたか日記には書いてないが、大阪時事柳壇へ盛んに投句をしてゐた田中凡骨時代ではある

金魚賣客の指圖で追ひ廻し

その頃の句

十年の道へ今日眼つて見

（今日の句）

## 長女と川柳を生んだ歲

橋本　綠雨

（一）大正十二年二月から舊同人の芦穗君にすゝめられて「二柳子」と號して川柳に手を染め、早々から謄寫版刷の柳誌「みをつくし」の刊行に努力したものである。

「みをつくし」が日に月に盛大になるにつけ、餘り雜誌が貧弱なので十一月下旬芦穗、啞人、徹郎、輝翠の諸君と私とで「みをつくし」の顧問であつた路郎先生に雜誌を社會的にする事に相談をして二十七號まで續いたのを廢刊し路郎先生を主幹として「川柳雜誌」を月刊で出すことに定め翌十三年二月創刊號出すはこびになつた。

（二）長女靜が七月十一日鄉里で出產、石川縣金石町港町（當時の私の住所は大阪市港區八條通二丁目十一、市電公舍）

（三）關東大震災（九月一日午前十一時五十八分）當日和歌山縣加太町へ川柳吟行に螺哉、大頭、葛葉と私とが加太輕便鐵道に便乘中であつたのでどの位の振度であつたか知らず尙六時頃大阪着まで何も知らなかつた。

## 山へ登る

朝田　新水

裕福でない私は、泣き虫弱虫と他人から笑はれた。これは意志が弱かつた事と思ひ又身體も弱かつたのである。一人子として育つた爲め周圍のものが大事にしすぎて神經質にしたのであらふ。これでは生存競爭のこの社會に立つて行けないことに氣づき、意志を強める身體の鍛鍊として、登山を始めたのが十年前だつた。西國三十三ケ所を巡れば關西方面の名所舊跡は殆んど廻れると思ひ參謀本部の地圖を手に出かけたものである。以來自分に與へられた使命及び仕事に對して全力を注ぐ可く豫測しがたい逆境失意不遇に臨んでも、青息吐息をつくやうな事なく倘奮鬪心が起るやうになつた。これも登山のお蔭と思ふ。殘念ながら業務に暇のない昨今登山もおこたり勝ちであるが我が一生を通じて忘れられぬはその趣味は山で喰ひ握り飯である。

## 妻きたる

妹尾　變人

腹の虫は好い加減の事をぬかして仕方のない奴だ。「とても眞面目で正直で親切で、金を殘す事より外に知らない人」と言ふ口上に漸く我輩の號に遠路輿入りされた奥樣だそうな…。見た事もきいた事もない私の處へ…。ほんとに勇氣のあるお方で…。

それから、つゞけさまに、產む、產む、產むと言ふ素晴らしい事實を少しでも豫想して居た私でしたら。

あの頃！

一室に四五人宛の寄宿時代の樣な無茶苦茶な遊びはしなかつただらう。夜の彼女の嘘八百には見向きもしないし、壹圓も投げる莫大のチップも五十錢に値切つて居たゞらうそして彼も惡友彼も惡友と逃廻つて居た事は勿論であらうお蜜柑を二つも貰つた嬉しさに眼を見張つたり

橡先を次から〳〵這つて來る蟻を一一茲へ來ては踏れると言ふので一一終日小さい唇を尖らせながらつまんでは下へおろしてやつて居たり

「お鼻演が出てゐますよ」と聞けばわが事の樣に見事ツツと吸ひ込めてしまつたり

「お前は直ぐに泣くね、氣が弱い」と言はれ殘念のあまり又泣い見たり

ある日先生から「大きくなれば何になりますか」と問はれて「先生の樣な先生になります」とすました時

先生に言うた希望はえ、まれたりしたのは今を去る十年前茶目氣たつぷりにして心素直な少年SHIROBONのなつかしい六年生時代である。

## 六年生

平岩　司郎

## 京へのぼつた退屈男

水谷　鮎美

ひとむかしまへといへば二十四歲です。京都の竹馬の友からはなにはともあれ、いちどこちらへこいといふあつい手紙がきてゐる。成功心でいつぱいの僕だ。

わが身に籠を出しめなし鳥

古巢にかへるみちもしらでかこの氣もちを短冊に書きのこして身をたてるべくちゝはゝのもとをはしつだ。

手紙をくれた竹馬の友のお姉さまの家に泊めて貰つてゐるおいつちやんとよぶおとなしい妹がある。はじめての夜語りあかしたきりで忙しい友はそれからは顏をみせない所在なさの妾宅の二三夜がつゞいた。成功心にもゆる僕は善き友の寬大さが恨めしかつためざむれば香のにほひてなまめかしく、なにとはなく夢あまき、すいな行燈にともしびの消へて、さむきもまたはかなしちゝの姿のはゝのかほのあまりにも、くつきりとうかびいづるにぞ胸さわぐ。

じつとしてゐられぬ。こんなはづではなかつたに運命の岐路ともみゆる。考へなければならぬ。

かくして京へのぼつた退屈男のあこがれも、春宵の一夢にやぶれかぶれのおほさかへちゝはゝのもとへふたたびもどり煙のなかに退屈しきつてゐた。

## 思ひ出と地震

北山　悟郎

其の頃「みほつくし」句會が千舟橋市電教習所、托兒所等で毎月催されて居り、其の頃の思出の人々が彩峰、鷹穂、かほる、蛙聲（後徹底郎）柳路松雨、史風、凡柳、夢路、子行、幽香、溪花坊、春坊（後波郎　梅風の諸氏及び松郎、馬行、水府、路郎の諸氏が時折出席されて居つた事、鷹穂彩峰の兩氏が何時も世話をして居られた事等が浮んで來ます。

或時相撲吟、算筒で◎福引の算筒當てる氣で出掛け「豊來れば御内儀算筒を拭いて居り」の句で路郎松郎兩氏が論議せられた事や彩峰が何時もかほるさんにしなだれ掛かつて居た事等懐かしい想出です

又或る時松郎氏と私宅で談話中家がメキ〳〵と鳴り天井から何か物が落ち、ふと窓外を見れば電柱が大きく搖れてゐる「良く搖れる地震だなあ」と云つて面白がつて外へ出て搖れるのを見てゐた物です。之が號外を讀み始めて東京大震災だつたと知りました。

其の後但馬の震災の時は彩秋君と矢張り私宅で談話中でした。此の時は皆我先にと外へ逃げ出し彩秋君は次男喜一を抱いて逃げて呉れました。後に聽けば路郎師も病後の體で私宅へお出で下さる途中、（鳴尾時代）出入橋より矢張り震災で引返されたとの事でした。

## 幻日記

松盛　翠人

私の十年前と云はれると一と昔前が頻りに戀しくなる。勇氣がありました。大和アルプスと云はれる大峰山へ先達でもない私が辨慶のやうな兜巾鈴かけ姿で金剛杖をシヤに構へ、幸四郎もどきで登山したんです。此辨慶甚だ弱く、中途で梅干を舐め〳〵辿りつき、西覗きで膽玉を冷やし蟻の戸渡りで蒼くなつたり、お鉢岩で冷たくなりかけた記憶が甦へるのです。今の妻が二十二で私の處へ嫁入つて來た素人が高砂やを謠つて媒酌人林畵伯夫妻が肩荷の下りた樣な顏して、私が花嫁をそつとカメラに納めて嬉しがつたり（但し此寫眞例の通りソフトホーカスだつた）

甦る柳の枝に水溫み
春のほめき枯木も芽吹く
蕙まる、木ぞ幾度か返り花

こんな句も手帳の端にある。今の飛田遊廓が未だ草茫々と生茂つて靑樓は仲之町通だけといふ時代、大正藝者なんてものが新世界へ流行かけてゐた此時分今池一帶の色街でローマンスが夥だしくあつた。これは妻に讀まれると旦那樣たる權威が薄らぐらしいから書かぬ。

幻しを追へば春春日向ぼこ

## 母へ歸る

生田　翠夢

大正十二年十二月卅一日夜の汽車に勤務先のH市を後に歸阪の身をのせた。可成窮乏のとき懷中には母に渡すべき金が入つてゐる。豫定では十時過ぎ大阪着であるが舞子あたりから時々列車が停る。何事が起つたかと聞くが明瞭ではない。兵庫についた時は十一時だ。同車の客は種々と論議してゐる。こちらは正月の金を――殊に母が待つてゐる金をもつてゐるので氣が氣ではない難波驛に着いた時は正に十二時、もう十三年の正月元日だ。原因は大阪、吹田間で列車の故障脫線との事で何時大阪へ着くか分らないと云ふ。成程もう自分達の前には列車が二つも三つも止つてゐる。さあ自分と同じ思ひの人達は騒ぎ出した兎に角賃金の拂戻しはすると云ふ。幸に阪神電車が終夜

運轉と聞いて安堵の胸を撫で何丁かの道を阪神迄ぞろ〳〵と皆と歩いた、漸くの思ひで歸宅したのが午前二時、母が支拂ひは出來ないし、又私の身を心配して隨分苦しんだらしい。そうして元日の朝下駄を買ひに行つた事を覺えてゐる。これが私の苦しい十年前の正月最初の出來事だつた。

## 母の靈

柳秀　長崎仙太郎

時は大正貳年極月末つかたの一日、「ハイデルベルヒ」大學藥理學教室入口の「ベル」がけたたましい音を立てた。仕事最中の私は誰れが來たのか別段氣にもとめず研究にいそしんで居た、ところが傍で私と共に働いで居る背の高い「ローデー」助教授が立ち上つて入口へ往き、「ドア」をあけて二言三言何か云ふて居る。

蟲が知らすか聞くともなしに耳を傾けて居ると、なつかしい日本語それも女の聲で私しは仙太郎の母ですが仙太郎は今日教室に來て居りますか、どうか母が尋ねて來たと傳えて頂きたい」と、思わず知らず自分は研究室から斜め後の方を振り返つて見ると、訪ふ人は誰れあらう母そつくりの立ち姿―それにしても一體母は何しに態々「ハイデル」まで來たのだろう獨逸語の「ご」の字も習はず、海路幾千里隔てた此の遠い所までよくも一人で、しかも生來船は嫌い洋食は絶對すかぬのに、どうしてこれたのかーなと思ひつゝ半信半疑で耳をすまして居ると「ローデー」助教授の云ふには

「ドクトル」長崎なら、ソラこゝから見えるでしよ、あすこの室で研究して居る、一寸お待ち、すぐに呼んで來るから」とどうやら自分の居る部屋へやつて來るらしい。

餘りの不思議に、じつと、入口に立つて居る母の姿を見詰めると、腰から下はぼんやりして居るが、それでも紛れも無いなつかしい母、しかも自分が日本を立つた日の母そつくりである。

びつくりはしたものゝ飛び立つ思ひ、傍へ行かうとあせつたその瞬間、夢は破れた。枕頭にある夜光時計を見ると夜中の二時過ぎであつた。

嗚呼いやな夢をみたものだなと思ふと、急に頭はがん〳〵なる胸の動悸はなか〳〵をさまらぬ、母は豫てから不治の難病に罹り半年以上も重い床に伏し、親切な治療、溫い看護を受けて居るとは内地からの便りで知つて居る　又自分も絶えず、力の續く限り努力もし、出來る丈け早く研究を了へて内地へ歸り母を慰めたいと思ふて居つたやさき

さては心の迷ひか……否や〳〵朝みる夢は正夢と聞く…馬鹿なまさか…だが待てよ…コリヤひよつとすると…そうだ…或は此の世のなごりに母が態々獨逸三界まで來て呉れたのでは無からうか…ともだえ〳〵つ遂にその夜はまんじりともせず、男ながらも一夜親の篤き心に泣きました。

夜は全く明けはなたれた四方の眺めはまつ白く街には雪がしん〳〵降つてゐる、頓て近くの寺から十二月二十五日「クリスマス」の朝らしい鐘がひゞいて來た、下宿（クスマウル町五番地）のおかみさんは、そのお寺へ自分を誘ふて呉れたので留學中の思ひ出の一つにもなることゝ氣を引き立てゝお寺詣りに出かけたがどうして平靜な心になれましよ。

斯くして丁度ひる前お寺から戻つて來て自分の部屋へ這入らうとすると十四才になる下宿の娘がいきなり、日本からの電報を見せました、取る手もどかしく讀み下せば「ハヽノ、イノチ、一トツキカ」（母の命一ト月か）

あわてゝ「ローデー」助教授の私宅を訪ひ、事の次第をあらまし話して、此の際成る丈け早く歸朝の出來るやう急に仕事を纏めて呉れ又「ゴツトリーブ」先生にも宜敷賴んで貰ひたいことを繰り返し、その足で日本へ向け

「一ガツナカバタツ」（一月なかば立つ）と返電したが越えて三日目更に留守宅から「ヒトヒモハヤク」（一ト日も早く）

との矢の催促、固より「シベリヤ」通過の積りであつたから早速乘車切符購入手續やなんかの用は幸ひベルリンに居つた友達に依頼し、自分はひたすら業績の整理や「ハイデルベルヒ」引き揚げ萬端の準備を急いで居つたが

明けて…大正三年一月二日附で

「ハ、シス」母死す）

の悲報…ア、夢はやつ張正夢だつたか…母は遙々逢ひに來て呉れたのだ…實きに父を失ひ今又母の訃に接す、思ひは唯祖國へはせるばかり…留守居の歎きもさることながら引き續く不幸には一方ならず困つて居やう…とは云へ兄や弟や妻は最後の孝養まで出來て居る…だが自分は遂に一生涯不孝者だ…

茲に自分は恩師佐多前前學長の好意により當時濁逸「ハイデルベルヒ」大學に遊び「ゴツトリーブ」教授先生の下で藥理學を專攻して居つたことを附記し、かつゝ拙吟（舊作）三句を添えて此の悲しい涙湧く思ひ出の稿を結びます

## あの街の灯

麻生　尚乃

鳴尾の遲日莊へよく足を運んだ松郎氏は、

遲日莊留守で三十九錢損

と云ふ句を吐いた。阪神沿線は電車賃が高かつたので、消費經濟の擔當者である私は、自然と大阪へ足を延す事が億劫であつた。

アブサンや、ジンの梯子について廻つたあの街の灯も、この街の灯も忘れてはゐなかつた。時々御厄介になつた新聞電車までがなつかしい思ひ出の一つであつた。郊外電車の灯は五分間ごとに走つた。暗さから、暗さへ消えて行く灯の色にさへ私はどうする事も出來ない魅惑を感じてゐた。翌くる日も、翌くる日も、遲日莊の繁茂した柳の枝は悽慘な影をひいて黃昏れた。

淋しい冬が暮れて、薪のやうな無花果の枝へ豆粒大の青さが見えて來た。六甲山麓の雜木の梢が鶸色に變つて來て矢を射るやうな目高の群にも日毎に深み行く圓天井の碧さにも春の絢爛さがほどけかゝつて居た。いつの程にか、苗床へ如露の水を注ぐのが私の日課となつてゐた。

裏庭の日當りには、まゝごとの莚が擴げられてゐた。木のはつぱや、草の根を盛つた御馳走を子供達から分配され「まるで、狐に化されてるやうやな」

と朗らかに笑ふ私となつて居た。デオゲネスの喜びを語る相棒に黑木莢豆氏が居た。スヰートピー移植法傳授役に駒井みの作氏が居た。

「なるほど、虞美人草も、フリージヤも美事だが、これはお前の腕前ぢやない。たゞ〳〵自然の恩惠によるものだ」

と私の手腕を否定する係に愛する麻生路郎氏の居た事は、再び南海沿線に歸つた今となつて、忘れ難い追懷の十年昔である。

## 苦笑

麻生　路郎

十年前の私は元氣ハツラツたるものがあつた。

淡路海峽で沈んだ驅逐艇七十號の人名救助の目的で、友人革郎と共に疾走してゐる自轉車に双手を擧げ、身を挺して停止せしめ、これに制限外の快速力で疾驅することを命じた。三十五尋の潛水夫が千舟橋以西にゐることを仄聞したからである。若い血は躍つた。遮二無二走らした。走らした。

その時、私の全財産であつたタツタ一枚しかない五圓札が彼等の手に渡つた。

誰に賴まれた譯でもなかつたが、助けたい一心がさうさせたのだ。

引き續いて起つた關東震災も又私の血は煮えくりかへつた。革郎は飛行機で一番乘をやつた。私は革郎の骨を拾ふ約束を彼の妻君に誓つたがその必要がなかつた。號外の第一報が私を狂喜させたと云へば足りるであらう。

私は再び財布を逆さにしてあり金全部を提供した。そしてその日から家族八人の生活費の借金をした。

帝都全滅を豫想してゐた私は上京した際、堂々たる邸宅が豪奢を極めてゐるのを目擊して反感よりも先づ私の若さに對して苦笑した。



# 川柳塔

―路郎選―

てれくさく父の妾の子を葬り　高橋かほる

自動車の助手ハモニカを吹いてくれ

なわとびへはたちのめいがたはむれて

軒店の鰹をかくに皿を退け

仕立物勝ち氣な顏で持つて行き

疊屋の帶のほ解けたのに氣づき　橋本綠雨

緣先で見る山茶花の寒いこと

首あげてまだ元日は暗いなり

元日のおみきに輕い笑ひなり

年玉におてゝつないだ姉妹

パラソルに男が少してれるなり

動物をいたわる水が流れてゐ　關本雅幽

いたづらな神なり頰を凹ませり

生活戰線愈々四通アスフワルト

十二月風と歩いたことになり

銘仙で貧富の外に生きんとす

夫婦共馬鹿正直と言われて居

十週年を迎へて

嬉しいが涙のもろい人となり　朝田新水

又しても肥でしやくらる小間使

この次の逢ふ日を鷗までが知り

信仰の心へ叛く椿落ち

官邸の常盤樹ばかり見て暮らし

寒い木が並び袂へ風の入る

發展は寢ても電話のかゝるなり　住田亂耿

横で見てゐるとをかしくなる師走

インフレ景氣のうるほうた飯がふき

義姉結婚

婚禮の屠場へ曳かれゆく姿

妥協して盃をとり箸を取り

## 結婚解消

爆彈を秘めし女性を迎へける　西田紳樂

健康な人等は窓を開けたがり氣に入らぬ絲談としてもやつし出し　土木救濟事業

監督の前でも乳は哺ませるトラツクの運賃も出ぬ蕪を積み儉約ぢや德利の露を掌にうける喰ひ込みへ家でもお人好にされ　吉田水車

初日の圖拋り上げられたかたちなり飲みつ振り見せに歩くも三ケ日足下で鷄を聞いてる初詣鷄は合點の行かぬ風で來る口紅はおろか女給の喰ひたまひ　松丘町二

冬のさ中の靜けき姿母坐る肉塊に酒を注ぎて待てりけり鏡いまをんなの怒さゝえたり日のひかり澄み髪油匂ふ緣畦で哺ます聖なる乳房日燒けして

## 三三年初頭に歌ふ

鬪ひ生きていよ〳〵困苦初日の出　阿部閑生

打たんとせしに頭のない釘であり禮裝の淋しさ知らぬ顏揃ひからびし眼とある金屬性に吸はれ　世相（二句）

瓦斯自殺せめて瓦斯でも出るうちに古足袋が尿瓶に乘れる遺留品　松盛琴人

朝の海を艦聲たしかにこぎ戻る　勅題

笹鳴へ溫泉宿の下駄をはいて出る巾着に紅裏つけて九十三齒醫者又來る齒を知つて愛想よし　山本丹路

女みたいな手をば知られまいとする醉へば女等眼鏡をうばひ嗤ひこく　初戀

娘さんの頃をみつけたまつげまつげお互の腰のかるさを嗤ひ合ひ

楊井二南

つや〳〵の林檎治つた手でむかれ

ポンチ繪の様な男で職があり

少女募集へつゞいて這入る母と娘と

處女一列をなぶるさむかぜ

中島鐵洲

お役所はどう儲けてか賞與が出

特許權握つたまゝの歳の暮

裏日本の海にも嬉し初日の出

安西杏三

書置きが無慘巡査の手で切られ

神經を目鏡に集め女事務

姫田夕鐘

あやつりの形で手ほどき踊らされ

香料を合すへ肥屋ぢやまに來る

身巾あはずともオーバに逢ひなし

荷車がびつたり曳けて淋しがり

金椽のすましきつてる卷狐

花嫁はダンスの出來ぬ身拵へ

水谷鮎美

奇蹟的人と神とのあひにあり

手にとまる蠅も埃のかほしてる

年寄によりそふこゝろ餅を燒き

このごろの妻

子を抱いて湯呑にのこる母の呼吸

定紋の大きく小さきお元日

敬神のふかみに生きる三十四

岩垣日本村

滿二歳父に威嚴も何もなし

俺に似るお前に似てる子をあやし

明るみへ出せぬ奥様下女をつれ

子を見る目酒を呑む目に候はず

八時です九時だと別な聲をきく

パヽの子だマヽの子だとて抱かれてゐ

廣江天痴人

農繁期ざつくばらんな返事書く

出口王仁三郎

グロテスクな頭髪愛善面白や

愛善を稱へ搾取の上にたつ

アメリカよブルの王座がうれしいか

安來節ばかりでないぞ鄉土色

再會の八步氏—十一月二十四日

うれしさに野良着のまゝを見てもらふ

大西八步

復讐が叶はず眠る墓もあり

時計の音人の仕事と思はれず

近道に少し裏口のぞかれる

秋草へ來て捨犬の氣がまぎれ

辻地藏旅の心に親しまれ

妹尾變人

好く釣れた夢女房に笑はれる

無事な顏見れば呑みたくなつて來て

退院の見込みもつかず十二月

冗談にならばやります里子にも

日野華水

肩かけをはずすと女ふけて居る

看板は研究所です書棚あり

だまされて見てもこの世の出來事だ

インキ壺浮世の影に座つてる

割前を皆んな貰つて飲み直し

熊谷紅

瞼提げてゴルフリンクを覗いてた

いぢらしい無口の母へ借りが殖え

二階借昔儲けた事があり

宿直の背中が痛い洗面所

西村明珠

言ひ譯もすらすらいへぬ十二月

享樂のちまたにさへも算盤ぢや

よい返事今出たビルを見上げたり

長男BKより放送して

はつきりと時報の道具見て歸へり

連れそうてゐてみにくさになれてくる

須崎豆秋

腕時計見い〳〵佛說阿彌陀經

米の値は堂島委せ稻を刈り

勤め人暗い野原の驛へ降り

大阪の繪葉書水とコンクリート

尼絲之助

恩給があるに淨土へ迎へられ

生命の不思議見舞も病む人も

女の不服そのまゝ春となり

甲高いばかり非常時の國難の

市塲沒食子

歳は爭そへず小皺になやまされ

朝海

國難の春を日本は朝風よ

包紙勝手な想像して貰ひ

石森靜太

ひとみそらしてぼくはきみがすき

靴磨きビルの閉るを眺めてゐ

淋しさはおろし林檎の舌ざはり

欠伸して此の相談はまとまらず

喜多春秋

禁酒破れて堤が切れたやう

子持になつて羽織の襟が折れてない

田舎の子演をすゝつて返事せず

兩隣コトリともせぬ十二月

生田翠夢

かくしてゐますと女は承知せず

何んとでも云はして男別れる氣

あけさせぬ襖へ女眼をはらし

石曾根民郎

手のなかの時雨つめたき日を想ひ

東京の病める姉へ

風吹く日力になろと伸びあがり

目に見えぬ手を感じたる屋根の下

松下小柳子

交叉點母眼ばかりをあはてさせ

日向ぼこ雀になつてみたくなり

燒芋がうまい女給へ窓の雨

越田久水

足音を待てばやつぱり夜のもの

純情を守りて痩せた腕つ首

春元紀太

河豚食はす女中命の保證する

濱寺潺水浴塲冬の景

冬の濱風の姿の松が居り

平井蒼太

蒼ざめし書翰箋かな生活苦

日に一度笑つてみたい淋しさよ
江戸みつる

諦めた心は飲んでゐるばかり
媾曳と巡査も知つてゐるのなり
荒井英賀夫

妹が來たで話題をちと變り
にんにくも肝油もいかぬからだです
奥野禿山

醫者注射藥と我れは渦の中
嚴めしい門が三面賑はかせ

# 粒々集

—路郎選—

御影長崎柳秀

思ひ出を追ふ目女房の目と出會ひ
常識をはずれしこたま金をため
戀人を仲居妹にしてしまひ
戀人と眞向きになつて言ひつまり
諦めよと云うて吳れるは他人なり
金じやない起死回生は眞心だ
松山前田五健

十二月床屋の歸り梅を買ひ
首卷を直し自轉車風へ向け
襟足を見せて炬燵へいゝ舞妓
水上機水鳥胡麻の如く散り
勅題 朝の海

大船に飼ふ鷄が啼く朝の海
東京富士野鞍馬

耳を堀りながら誤植を見付出し
誰樣の紹介といふ呑みたをし
肩を揉む二號に老けた頬を見る
借金は借金として樂に生き
大衆へ向かず聖人にもなれず
大阪長谷川一徹

妻君に依れば一歩を進めて居
表札がずらりと並ぶ中なる巢
負けてすむ事と知れども血は若し
お正月尚資本主義續くなり

# 柳壇春秋

福田山雨樓

一

「川柳雜誌社」が大正十三年創設以來孜々營々、獨立獨歩克く戰ひ高く持して、今日の隆盛にまで猛進して來たことは、寄稿並に愛讀柳友諸君の多年に亘る絶大なる聲援、助勢の賜であることは勿論であるが、社中同人社友諸兄の獻身的努力に負ふところ亦尠くない。就中本社の事務所を引受けてゐる綠雨氏の努力と奔走とは、全く十年一日として怠らなかつた血涙の奮鬪錄である。

しかしそれにも增して最大の犧牲と最高の努力を傾倒し、それこそ血と肉とを削つてひた押しに戰つて來られた路郎主幹の意氣と熱こそは、大正並に昭和川柳史を飾る不朽の功績であらねばならぬ。

今叙上の尊い奮鬪史を振返つて熱き感謝の念を捧げつゝ、靜かに柳壇へ若干の考察をめぐらして見たい。

二

「川柳雜誌社」がそのスローガンとして最も大きな旗幟を揭げて來た、川柳の社會進出！は着々その功果を收めると共に、柳壇へ異常なる波紋を投げた今日數多の柳誌が努めて月刊を出すやうになり、次第に菊版に改めるやうになつたことは、畢竟本社の企てに影響を受け刺激された結果であると云つても敢て過言ではあるまい。柳誌の內容體裁に各社が最大級の努力を拂ひ、延ひて社會進出の共同戰線に立つやうになつたことも慶賀すべき現象である。

斯くして川柳の社會進出は、わが社の貴重なる試練を經て、確固たる柳壇是として基礎を固め、茲に第一期的成果を收めて來たものと見ることが出來やう。

この運動は今後と雖も益々その方法と機會とを選擇して、不斷繼續されねばならぬことは勿論だが、本社が多年孅たる戰跡をのこしたこの專賣特許が正に法定の期間を了せんとするに當り柳壇の趨向が澎湃として之れに和しつゝあることは甚だ欣幸に堪えない次第である。

只この運動を內部から妨げ或ひは中和するものがあることを戒心しなければならぬ。それは文學的價値の極めて少ない川柳を以て、物を得顏に宣傳する類だ。

三

柳壇に「月評」なるものが出現したのは本社がその端を開いたのであつて、數年間に亘つて繼續されつゝある。其間或は「卓を圍んで」と稱し「作家展望」

となつて表はれたが、終始句に對する懇切なる批評と、示唆に富んだ指導的文字は非常なる好評を博し、各吟社も競つてこの擧に出で、殷盛なる句評時代を現出せしめた觀がある。

句の鑑賞批評の必要なるは今更呶々を要せぬところ、實に句は批評と云ふ空氣と光に惠まれてのびるのだ。川柳が文學の一分野として今後大いに躍足を延ばすべき狀勢にある今日、この喜ぶべき現象を更に助長せしむることは川柳家の責務である。

けれども今後の批評界にあつては、他誌に往々見るやうな好惡の尺度から幾何も出ない主觀的見方は努めて避け句主との親疎、年齡環境等懸隔の如何に拘はらず、常に嚴正なる客觀的論評のメスを提げて迫ることを、批評の第一義として希求されねばならぬ。又川柳家は一般にこうした句評にのみ期待をつなぐべきである。

## 四

川柳を遊戲視し、戲作的態度を脫し得ない分子がまだある。これは恐らく後を絶たないことであらう。何故ならば彼等には反省もなければ自負もない忠言にも馬耳東風であるからである。しかし彼等の川柳に文學的價値を求めその將來に望みをつなぐものは、少くとも詩に盲目な取り殘されたもの以外にはない筈だ。

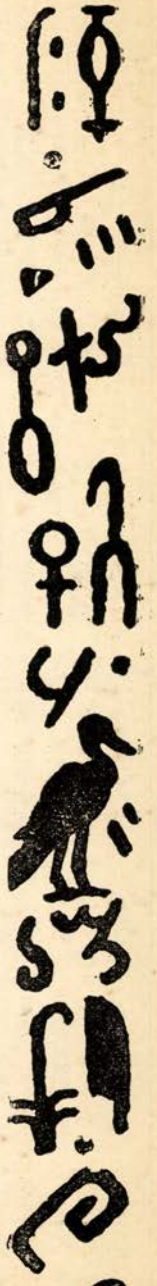
ところが川柳の藝術的制作の上には目覺めてゐる身分であり乍ら、感激が少いのか、創作の意志が消耗したのか永びいた怠惰か、兎に角柳壇生活から影を沒して、いつかな出て來ない始末の悪い連中が尠くない。是等の人々には一縷の望みを囑してゐるだけに、熱のある川柳家の腦裡には絶えずその姿が去來するのである。われ等の同志から一人でも姿を消すものゝあることは淋しい。柳壇を去るべからずして去つた惜しむべき川柳家を何とかして呼び戻したい。これは此際お互ひの心懸くべきことだと思ふ。

## 五

川柳家には一つの大きな共同責任と云ふものがある。それは川柳を文壇的に確立させることである。文壇と云ふものゝ存在を否定するものもあるが、これは社會的に認識されてゐる尺度では確かにある。又雀郎氏のやうに文壇進出運動を非とし、川柳家は此際自分自身とその周圍をさへ培つて、堀下げてゐれば驅て文壇の方から呼びに來ると云ふ論者もある。しかし自分の思ふ事はさう云ふ手段にあるのではない手段は自己の信じて是なりとする道を選擇すればいゝのだが、川柳家はその誰の頭にも、川柳をどうかして俳句や短歌よりもより以上に文壇の地歩を獲得せしめたい、と云ふ熱望が藏されてゐたい。從つてその目的の爲めに最善を盡すことの責任觀を要求したいと云ふのである。そんなものは誰にでもあるよ、と白ばくれるかも知れぬがそれは恐らく本音ではあるまい。正直ではなからう。多くの川柳家にこの熱望、この意氣が果してあるのか？自分は疑ひなきを得ない。少くともこの共同目的の爲だけには堅く〳〵手を握り合つて進むべきだと思ふ。決してこの目的を達成せしめる限りに於ては離反したり排擠してはいけない。この目的を機軸とする川柳家の共同責任に不服であるものは、その可然所信を承りたい。然らずば共に〳〵より強き力を捧げ合つて頂きたい。

# 武玉川初篇研究（八）

梅本秋農屋
森東魚
姪子省二



## (185) 緋おとしに惚れて戻りし白拍子

**省二**＝平安朝時代の舞姫（兼肉の女）「白拍子言葉に花の女哉」（列張）。磯禪師を始とし島の千歳、祇王祇女、佛、靜等古句に多く詠まる。緋おどしに惚れる者、豈に白拍子のみならむやだ。

**東魚**＝緋おどしの若武者に、岡惚したのであらう。

**秋農屋**＝敢て人物を治定する必要もないが、靜對義經としては如何であらう。

## (186) 捨物にして遣る文に花か唉

**省二**＝(113)「捨ものにして抱ついてみる」の解の時、此句も引用して置いた。

**東魚**＝前出の方がすばぬけてゐて面白い。下手な銃砲も數打ちや當るイキであらう。

**秋農屋**＝短刀直入に抱きついて見るが、捨物にして文をやるよりも、遙かに優つて居ると思ふ。

## (187) 乳母か在所の赤蛙來る

**省二**＝赤蛙は疳の藥、赤蛙賣も來た。これは乳母の心盡し―銀座に安全食堂といふ舖があつて蛇、食養蛙、蛞蝓スツポン等を食はせた。一式試食すべく妻外二青年とテーブルについた處、「赤ちやん三ちよう」といふ。赤蛙を持出したのであつた。蛇と蛞蝓を食つたのでは、三スクミになつて營養食にならぬかも知れぬ。「赤蛙ひる柳虫を賣る、小菅等に納れ、風呂敷裏にて負來る、京阪の赤蛙は枯たるを賣る…江戸は…皆活るを賣り、買人あれば忽ちに裂て殺てうる…皆藥餌に食す也」（守貞漫稿）

**東魚**＝此句も面白い、全くさういふ場合は何處でもあつたらう。私の兄は幼時赤蛙を喰はされたそうだが、戸棚をあけた途端に、紙袋に入れてあつた赤蛙が、ピョン〳〵飛出したのですつかり驚いて以來、蛙を非常に怖がるやうになつた。今でも

畵をみてもいやがつてゐる。

**秋農屋**＝明治初年迄赤蛙賣がきたが、「柳の虫や赤蛙」と呼むで來た。此外に箱根山々椒魚賣、奥州さい川孫太郎虫賣がきた併しこれは江戸の商人で、彼の地方より來るのではない。現今では縞蛇、蝮賣が來る

## (188) か降ても武士の衣〳〵

**省**　二＝どうしても、晴雨に係らず、鑓が降つても火がふつてもと云ふ。私の國では、鑓が降つても棒がふつてもなどいふ「鑓が降らないで素一分しめたもの」(二十二)などもある。

**東　魚**＝武士は門限や勤めがやかましいから、どうでも居續は出來ぬ。そこは町人の氣樂さは、雪をみかけて歸れるが一一面反抗的に町人が武士を嘲笑した心持がひそんでゐる。

**秋農屋**＝武士であるから「鑓が降つても」と咏むだものだなどと、狂句式に解釋してはならぬ。

## (189) 小松曳あふない所で手を握り

**省**　二＝小松曳は初子の日の遊び、「初子の日かぎざきをする御遊なり」。野に出て小松を曳き詩歌を和したもの、元は高貴な方の御遊であつた。「手を添へて引かせまゐらす小松かな」(几董)—あぶないは單純にも複雜にも解し得られそうだ。

**東　魚**＝「あぶない所」は場所の謂ではなく、引損じて或は引抜いたはづみをくつて、よろける場合を云つたのであらう。

**秋農屋**＝志賀寺の朝觀といふ名僧が、京極御息所を見初めて慕戀の情止む時無く、御息所の鞠の坪に二日半夜佇すむで居たを、御息所が看て哀れと思ひ、御簾の内より御手を出したらば朝觀は其手を取つて「初春の初子の今日の玉箒、手にとるからにゆらぐ玉の緒」といふ古歌を咏じた。といふ故事の意が、大いに含ませてある句だと思ふ。

## (190) かふろへ親の通ふ疱瘡

**省**　二＝親が通ふといふ處が、多少句の山なのではあるが、素直に解してよい。

**東　魚**＝佳い句だと思ふ。「通ふ」に就ては前說に同感。

**秋農屋**＝子が禿であるだけに、親の心が一層哀れである。

## (191) 螢は空に闇は麓に

**省**　二＝螢は逃げていつた。そして四邊は闇—螢は闇夜に捕へるを興がられたもの、也有の百虫譜に「螢はたゞふべきものもなく、景物の最上なるべし、水に飛びかひ草にすだく、五月の闇はただこのものの爲にやと迄そ覺ゆる」

**東　魚**＝麓の字の意味合ひが、大き過ぎるやうに感ぜられる堤下かなぞの意味であらうけれど。

**秋農屋**＝麓がよく据はらない、「水に」といひたいのだが、夫れでは字が足らぬ。

## (192) 紫蘇漬にして戻す引臼

**省**　二＝紫蘇の葉を臼でひく、臼に色のついた形容—「石臼も色身でまはる淺草寺」は五倍子の色である。

**東　魚**＝紫蘇の色が臼にしみたのであらう。

**秋農屋**＝紫蘇醬を造るのであるが、面白からぬ句だと思ふ。

## (193) 下戸獨戀の證據に賴れる

**省**　二＝斯ふいふ事は下戸の役割だ。お人好しらしい下戸でもある。證據など面白し。

**東　魚**＝酒席で戲談半分に夫婦約束でもしたのだろう。貴君と聞てゐて下さい。酒呑は當にならないから、なといふ場合とみたい。

秋農屋＝賛成。

### (194) 氣違を見に物干か込む

省　二＝三十六計で、物干へ逃げ上つてから、怖いもの見度し。

東　魚＝安全地帯からの見物、且見下した方が遮るものなく良く見える。

秋農屋＝現今ならば、ビルヂングの屋上といふ所である。

### (195) 山伏も木の端ならす梳あふら

省　二＝「木の端のように品川いはぬとこ」。木の端とは枕の草紙に用ひてある詞、徒然草にも、法師ばかり羨しからぬものはあらじ、人には木の端のやうに思はるるより清少納言が書けるも、げにさる事ぞかし、とある。梳油は髪すく時用ゆる香油山伏だつて……

東　魚＝「ならす」は勿論ナラズの意。

秋農屋　安珍なども、伽羅の油を持つてゐたかも知れぬ。

### (196) 牛一ツ花野々中の沖の石

省　二＝花野へ牛一匹の點景、閑かさである。

東　魚＝原本にも「野々」となつてゐるが、假字で「野の中の」のつもりであらう。沖の石は一つぽかりと掛け離れてみえるまで、恐らく牛はつくばつてゐるのだらう。

秋農屋＝一幅の畫圖、西洋畫によく有る。

### (197) 醤油にも氣儘はさせす杉の口

東　魚＝酒は勿論だよと云ふ爲めに、醤油と奇抜に云ひ出したのであらう。杉の口は所謂飲み口の栓の意。

秋農屋＝江戸時代の心太賣は、屋臺の上に醤油と酢とを入れた、二つの德利を置き、其口に杉の青葉を挿し、醤油でも酢でも客が意のままに、心太に懸けて喰はせた。それは杉の葉を口に挿した儘で、注ぎ懸るのであるが、斯くすると一時に多く出ないのである。

省　二＝私には自ら確心のある意見をもたぬ。

### (198) 吉田を乘つた聲にくり言

東　魚＝東海道の吉田宿を通ると、女達に呼ばれた。聲といふ身てなけりやなア、といふのであらう。

秋農屋＝くり言を云ふのは、聲の同行者で、汝が聲でなかつたならば、今夜は此處で遊興しやうものをと云ふので、二階から招く鹿の子の振袖を、餘所に看て通る、旅客の意中が察しられる。

省　二＝「に」の用ひ方は、前二說何れにも解し得れる場合がある。

### (199) 歸りには疝氣の發るくすり堀

東　魚＝藥草をとりに行つて疝氣が發つたと云ふ所に皮肉な可笑味がある。藥艸などは霧の深い處などに得て求めなければならないから、事實の可笑しさがある。

秋農屋＝藥堀といふと、白髯の生へてゐる老人を想像されるが、疝氣の發るのは、如何にも自然で面白い句である

省　二＝「歸りに」は說明のやうでもあるが、そんなに苦にしない方がよい。「疝氣をは發す合點の藥堀」(木の葉かき)

### (200) 入齒のくはひかみしめて見る

東　魚＝たゞそれ丈けが、うがちの味が面白い。

秋農屋＝自分にもその經驗がある。

省　二＝此句意を体驗する迄は、到底生きれそうにない私だ

## (201) 連歌師の江戸へ下れは花の春

**東** 魚＝御連歌と稱して、正月十一日が德川將軍家で催す連歌の式がある。それに京の宗匠が召されるのであらう「花の春」は新年の意は勿論である。

**秋農屋**＝何となく泰平の氣象が顯はれてゐる。

**省** 二＝「花の春」俳諧用語。「花の春連歌心や古はかま」（文隣）

## (202) 色茶屋はつふれて寒き廣小路

**東** 魚＝寒きは色彩のなき、淋しきといふ程の感である。上野廣小路であらう。寛政享和の頃、けころが取拂はれたといふから、其時を詠むだ句だらう。武玉川出版が一寸あとであるから、年代も丁度出合ふ。けころは又間もなく復活した。

**秋農屋**＝明治二十一年に、根津の遊廓が洲崎に移轉した。其跡の光景は慘憺たるものであつたが、けころ茶屋が取拂はれた廣小路邊の光景も、大方推察されるのである。

**省** 二＝遊廓移轉の跡程、異樣な寂莫はないものだ。私はナゴヤ大須觀音裏を見て感じた事があつた。

## (203) 助太刀は念者と中のよい男

**東** 魚＝男色の戀の爭から、其勝利者が暗殺されたのだらうそこで念者の爲めに敵をうたふとする、其助太刀には、念者であつた人の親友が出て來るのである。

**秋農屋**＝西鶴の好色本には、斯る事が題材にされてゐる。

**省** 二＝念者は男色關係者ーその兄分たる者。

## (204) 金剛杖に立並ふうそ

**東** 魚＝山伏が靈山を廻つたについて、色々の出鱈目をいふのだらう。全く法螺を吹くといふのがこれだらう。

**秋農屋**＝辨慶、大塔宮など其例である。

**省** 二＝嘘でも多少は有難味があらう。

## (205) 行平の寢所替る月二夜

**東** 魚＝松風と村雨、十五夜と十三夜なのだらう。

**秋農屋**＝前說の如くであらうが、十三夜とも稽へられる。

**省** 二＝行平は、つまらぬ事が餘りにも、後世に傳つたワイと、大に苦笑してゐる事であらう。

## (206) 寢て出る智惠に世も捨り行

**東** 魚＝世の中が惡くなつたといふ方でなく、自分の人世が癪れる。自分が社會の敗者になつてしまつたといふ心持ちであらう。

**秋農屋**＝社會の敗者が、自分を癪れ者にするのではなく、自己の智惠を用ゐる人がないのを、窃に憤るといふのではない歟

**省** 二＝世間はわからぬものだ、世も末だといふことろ

## (207) 後生氣か出て極のつく女形

**東** 魚＝後生氣の出る程の年輩になつて、極の字のつく立派な一流の女形のにやつとなれるー女形など皺のない若いうちの方がよさそうなものだが、藝事は中々さう行かぬといふ皮肉な味、極は極上吉など評判記の等級の意。

**秋農屋**＝昔の俳優評判記に、極の字の附くのは、大極上々吉至極上々吉であるが、孰れも座頭格の者で、明治時代に大極上吉を附けられたのは、團菊の兩優のみである。

**省** 二＝吉の字關係の古川柳は澤山あるが、極の方は餘りにも少ない。



寸劇

# うらなひ

川村花菱

舞臺はある電車の車庫に近い少しばかりの往來の暗がり。そこに大道占ひが五人思ひ〳〵の提灯をつけ店を出して居る。毛を長くした天文學者のやうなもの、法官服のやうないでたちのもの、神主のやうな白衣にいかゞはしい紋つきを着て居るもの、十徳風のもの、その中に大學の角帽をかぶつて旗を持つた男も交つて居る夜店を散歩して居る人々が右と左とから行き交ふ。

**旗の男**。さあ集り玉へ！すつと側へより玉へ……あゝそんなに側へ來ては困る、此の筋までよつてくれ玉へ！（見物はそのまはりに集まる　さて諸君、聞き玉へ、これから僕が諸君の將來の運勢について、九星の上から科學的判斷を以つてピタリと的確に當てゝ見せる。いゝかね、まあゆつくり聞いて行き玉へ、人間はだ、大凡人間には、一生の中に必らず三度だけは誰れにでも幸運が見舞つて來る。いゝかね、三度だ三度丈は幸運が來る。が、その三度を取り逃がしたらもう一生運は向いて來ないぞ、二度取り逃がした人は、此度こそ三度目の運をしつかりにぎらなければ駄目だ！さて怎してそれを握るかについては、此所に卽ちその事を詳しく書いた本がある。彼のアメリカのロツクフエラーは一體怎云ふ星の下に生れた人間か、日本の岩崎は怎云ふ九星の人間であるか、人間は凡て自分の星を研究して出發しなければ大切な一生を棒に振つて仕舞ふぞ……詳しい事は此の本を見れば直ちに分る一部はたつた五十錢だ……

と本を賣りはじめると、見物は申し合はしたやうに皆去つて仕舞ふ。

**占者甲**。おい〳〵君、そこでそんな大きな聲を出されちやあ困るよ

**占者乙**。さうだ、君はもつと明るい所へ行つてやり玉へ

**占者丙**。本當だ、吾々は此の暗い所をさがすのにどれ程苦勞してるか分らないんだ。人通りの多い所で、その近所のうす暗い所つて云へば、近頃は此の車庫のそばより他に無いんだから

**旗の男**。まあいゝぢやないか、お互に商賣だ

**占者丁**。商賣だから困るんだよ、第一ゝの場所は高島君の出る所なんだ、今日は疝氣で出れないからいゝやうなもんの、いつもなら君の來られる所ぢや無いんだ

**旗の男**。今日はかんべんしてくれ玉へ！僕も此間までは、

證文の書き方つて法律の本を賣つてたんだがね、此度此の九星の本を賣る事にしたんだ

**占者戊**。ハヽヽ占の本なんぞ買ふものは無いよ

**旗の男**。所があるんだよ、僕は辯舌で賣るんだから

**占者甲**。ハヽヽ占は見なきや分らない。一つ拜見してあげやうかね

**旗の男**。ハヽヽ同志打ちは困るよ

　又人通りがある。

**占者乙**。さあ默つて手をお出しなさい、職業緣談、失物、方角、何でもピタリと當てゝあげますよ

　人が一軒一軒のぞいて行く。占者は順々にすゝめる。

**占者丙**。さあ、研究の爲、一つ手の筋を拜見しやうか（と見物の手を握る）成程……そこであなたの運勢だが、今までは何をしても、とかく面白いと云ふ風に行かなかつたと云ふ形がある。が怎だね？……ウム成程、そこでその將來、これから先と云ふ點について云へば、これから先は段々と運が開けて來やうと云ふ形、丁度朝日が雲を離れて昇らうと云ふ形がある……でこれをその、正式の易の表から判斷すれば、まだ〳〵細かい事が何でも分る、怎です、正式に見ますか、見料は五十錢……一ツ自分の一生を研究して見ないかね

　客は立ち去る。

**占者丙**。どうも此頃はひやかしが多い

**占者丁**。君は握つた手をすぐ離しちまふから商買にならないんだよ。押へた以上は何と云つても離さないのが此の商買の秘訣さ

　一人の客が來る。

A。おい、一ツ見てもらはうかね

**占者戊**。入らつしやい、（と手を見て）なるほど、……イヤ君はすばらしい手相の人だ、大變にしつかりした氣性の人だがつまりその、君は怎も此の自分の生れた家を出て他の家を起すと云ふ形がある。つまりそのあと取りでない、卽ちその次男三男と云ふ形で、君は長男でない生れだ！どうだビツタリ當つたらう

A。冗談ぢや無い、已らあ立派な後取りだよ、家へかへれば若旦那だ……占なんて駄目だなア、おい已れは長男だよ

**占者戊**。（狼狽して）イヤ〳〵、所がその、それは分らないつまりその子供は俗に云ふ流れる、流産と云ふ事がある、君のお母さんが、君を生む前に流産をしたと云ふ、つまりその形が……

A。ハヽヽ何がその形だい

　と行つて仕舞ふ。

**旗の男**。君、苦しい所があるね

**占者戊**。あゝ云ふひやかしは、碌な者にや成りやしないさ

　又客が來る。

B。どうだらう、明日の相場だが、高いか安いか、一ツ見て貰はうか

**占者甲**。成程、人相の上から拜見しやう、……分つた、相場は買いの一點ですぞ！何處まで行つても賣りの目はない

B。ありがたう、いくらだね？

**占者甲**。金は入らない、當つたら明日禮に入らつしやい

　客は禮を云つて去る。又次の客が來る。

C。一ツ株を見てもらい度いが、上るか下るかね

**占者甲**。左樣、お賣りなさい、賣りの一手だ！相場は明日はきつと下げます！當つたら禮を貰ふが今は一文も入りませんよ

客去る。

又他の客が來る。

D。さあ、見徳だ、一言でいゝんだ、株は上か下か

**占者甲。** 上です！

D。分つた！いくらだね

**占者甲。** 大道に出て居るのも人助けだ、當つたら禮を貰ふが當らなかつたら一文も入らない

客D禮を云つて去る。

客Eが來る。

**占者甲。** 君は相場の事で考へてるね、明日は何でもお賣りなさい……當つたら禮に來なさい

Eが去るとFが來る。

F。一つたのむ……株は怎だらう？

**占者甲。** お買いなさい、相場は天井知らずに上りますよ

F。見料は？

**占者一。** 見料などゝ貰ふ易者と易者がちがふ、毎晩此所に人助けの爲に出て居る、當つたら禮に來なさい

Fよろこんで去る。

**旗の男。**（感心して見て居たが）ねー君、みんな只で見て怎するんだね、一人には上る、一人には下る、一體君の考へはどうなんだね

**占者甲。** 己れにも分らない……けれど、互ひちがいに賣りと買いをすゝめとけばどつちか當る、明日の晩は半分丈は禮が來るのさ

**旗の男。** 成程、君は頭がいゝ……そのイキで、一ツ僕を見てもらはうかね、僕は一體怎したら生活の安定が得られるかね

**占者甲。** 同業は困るが、まあ見て上げやう（と天眼鏡を遠くからかざして）成程君は此のまゝ家へかへつて寢た方がいゝと云ふ形だね

**旗の男。** さうかね（とまじめになる）

**占者甲。** あゝ、果報は寢てまてと云ふ形だね

旗の男、からかはれるとも知らずにかへる。

**占者戊。** ハゝゝ、とう〳〵旗を卷いたね

**占者丙。** あいつもヅブ素人だね

**占者乙。** 今夜は馬鹿にシケだね

ところへ、頬に手をあてた若い女中風の女が、いかにも物を案じ煩らうやうに歩いて來る。

**占者丁。** 姐さん、姐さん、大變に御心配の樣子だが、何もくよ〳〵たさる事は無い、さあ一ツ見て進ぜやう、易はそも〳〵天下の正道にして、森羅萬象悉く分らぬと云ふ事は無い……姐さんは、男の人の事でなやんで居なさるな、さあ、一ツ御手の筋を拜見しやう

と女の手を取らうとすると、女はいきなり易者の手をひつぱたく

**女。** 私、心配なんぞしてるんぢや無いんだよ、齒が痛いんだよ

と齒に風を入れながら去る。易者呆然とする。所へ、下男風の男が來る。

**下男。** 一ツ見て貰ふかね

**占者乙。** 拜見致さう、先づ手相を拜見しやう、……成程、お前さんは、田舍からはる〴〵と東京へ出て、つまりその何處かへ奉公をして、すべからく青雲の志を立てやうと云ふ、

つまりその、立志傳中の一人にならうと云ふ形だ

**下男**　よく當つたね、その通りだよ、わしは丹羽の國から出て來たゞ

**占者乙。**　さうだらう、此の筋が三本に分れて居る所は竹に緣がある、卽ちその笹山と云ふ形がある

**下男。**　はア驚くだね私その笹山の生れだよ

**占男乙。**　それもちやんと此の筋で分つて居る笹と云へば蝮の形で、お前さんは卽ち虎だ

**下男。**　イヤ、私申の年だよ

**占者乙。**　イヤその、虎と云へば、死して皮を殘すと云ふ形だ

**下男。**　さうかね、所で聞くが、わしは東京へ出て來てからどうかして、了見のかてい主人の所へ奉公してやるべいと思つただが、どうも主人の心持が定まらねー主人に末の見込みがつかねーでは、居やてつても合はねーだで、三四軒歩いたゞが此度の主人ばかりは、まことにいゝ了見の男で、これなら全く末の見込もつく、えらく辛抱強い男だから、いろ〳〵とためして見る中に、なか〳〵主人には出來ね—辛抱もするだで、此所こそは、いゝ主人を持ち合はした、そこで安心して居てやれるから、胴卷の金もあづけて見て、もう一度了見をためしていと思ふが、どんなもんだね

**占者乙。**　いや感心なお方だ、奉公人から主人を見定めるなんて事は、なか〳〵出來ない事だ、お前さんは、そこで運をおつかみなさい……成程爭はれないものだ、お前さんの頭の上から光りがさして居る

**下男。**　ハヽヽ、からかふでねーよ、わしは年は若いが、生れつき頭は禿げてるだよ

と帽子を取ると、丸やかんである。

**占者乙。**　ハヽヽこりあ、まぐれ當りだ

**下男。**　ありがたう

と行きかける

**占者乙。**　おい〳〵、見料を五十錢

**下男。**　馬鹿にするでねー、私の決心通りのはなしきかして金取るちう法があるか、お前の考へもわしの考へも同じ事でねーか

と行つて仕舞ふ。

**占者丙。**　おゝ、今夜は何てわるい晩だ！

**占者乙。**　あゝ、今夜は何てわるい晩だ！

**占者丙。**　おい〳〵少し空模樣が可笑しくなつて來たぜ！降つて來やしないかな

**占者丁。**　なアに大丈夫だ

**占者戊。**　いやあぶないぞ

**占者甲。**　降るか降らないか當つこしやうか

と云ふ時、ラヂヲの放送が聞こえて來る。

JOAK。天氣豫報を申上げます。今夜は、西南の風、後に東北の風となり、お天氣ですが、時々曇り勝ちとなり、あるひは雨になるかも知れません。又降らないかも知れません

**占者甲。**　成程、あれなら、ちつとも外れつこなしだ

**占者丙。**　明日つからあのイキで行くんだな

**占者乙。**　當るも八卦當らぬも八卦、成功するかも知れませんが、又しないかも知れませんか……

**占者甲。**　そんな事云つて、誰れが見料を拂ふ奴があるもんか

一同ほがらかに笑ふ。

（幕）

# 日本柳壇百人撰

## 1932年の收獲、自選三句集（ABC順）

大阪　麻生路郎

吹込みのあれも仕事かさびしき世
勘定高い人に輕蔑されてゐる
二男アート倉庫
汝の父はロツク氏液をさゝげ立つ

大阪　麻生霞乃

夜ふかしも朝寢も父にまけじとす
改札を出るも先驅者たらむとす
風鈴の正體ガラスとは淋し

大阪　朝田新水

痴話喧嘩それも嬉しい日となりぬ
善人でありたい事の云ひそびれ
たゞ憎くい男に酒を呑まされる

大阪　阿部閑生

隣りから飯櫃借りてかけ戻り
夕日影荷揚げに消えて馬尿り
懷ろ手して手の遣りどころ

大阪　安西杏三

四十キロを春の埃にまみれさせ
五月ともなればポプラに風わきて
しろ〳〵と道一筋のお骨あげ

島根　尼絲之助

煙突が無風流なるぞ春の月
無雜作な父と何も言はずお茶
雪降る―出雲製織株式會社

靜岡　榎田珍竹林

五六本おんなじ影の冬木立
碁會所を歸れば圍き子の寢顏
馬鹿といふ言葉亭主へ使ひよし

京都　藤本福造

先生に逢へば叱つた子をたづね
〃　駈落ち日は傾いて錢があり
〃　ようやつと女最後の紐になり

東京　富士野鞍馬

天照す樂土は六百八十里
家政婦の今日は子供を思ひ出し
思ひ出に遊び始めの唄となり

東京　藤島茶六

ひとり焚く落葉火の音火の匂ひ
火種から秋を深めた共稼ぎ
ふるさとの雪も消えたり假名だより

大阪　福田山雨樓

ちよこなんと花火工場のある田圃
國國
赤松のみどりが僕を生んだ村
五十過ぎた豆腐屋の眷女めき

青森　後藤蝶五郎

日本刀犬は冗談よせと云ふ
淋しさは子の天分を攫み得ず
凶作へ火の用心の行きとゞき

大阪　本田溪花坊

國難の秋に寢息のなごやかさ
生と死の線へ踏み出た足の裏
俗人へ元祿花見踊の譜

大阪　橋本綠雨

窮屈な思ひをしても金のこと
折鞄靴のかゞとがありません

兵兒帶で働く女ものすごし

大阪　堀口塊人

相場欄わが月給をかへりみる
冬の夜は更けて鯖すし海の色
宿替がすむとやたらに人戀し

京都　平岩司郎

バスよろめきてビルデイング風景
つゝつぼの袖にちゞかむ電車賃
燕が來た素直な私になつてしまう

神戸　日野華水

敏感をさとられまいと煙草吸ふ
止めるだけ止めて嵐へ傘を貸し
恥かしくない馬の顏、馬子の顏

松江　廣江天痴人

父と共に野良へ行きたいしやくり泣き

三井家三百萬圓寄附

三百年搾つて貯めたチップ哭れ

農村自力更生を呼ぶ人々に

彈壓の斧ふりがざし何をいふ

東京　井上信子

壓迫の夏を透きぬ水の底
青空へすつきり立つて無神論

否定なき會話に盡きて味氣なし

松本　石曾根民郎

木の肌の片つぽ濡れてゐるこゝろ
こんな夢で畢つてしまふ手腰抱く
あゝこゝに住む身の塵を拂へかし

奉天　岩崎柳路

降る雪にいろはの二階客があり
眼を洗う綠に小鳥が鳴いて居る
如露の水九官鳥は何か言ひ

横濱　磯部天邪鬼

唇ふれたさくらんぼあゝ夏の日
むらさきの雲泣いた日もなつかしや
よごれずにあれと少女をみまもりぬ

大阪　伊藤愚陀

霧の如くに女の息吹窓によす
顎なでゝ女の腰のゆら〳〵と
嫁ぐ話か風がころ〳〵

大阪　生田犂夢

借金に座蒲團さへも遠慮して
金あつて短氣世間に通つてる
情慾が熱計表に亂舞する

大阪　岸本水府

日本中みんな寢てゐるなと思ひ
泣いてゐるうしろ通ればあけてくれ
ねてる子の睫毛が起きてゐさうな

東京　川上三太郎

これやこのわが子の重味この重味
博覽會をあとに風船青空へ
長男もそろそろ顎の髯を拔き

大阪　木村半文錢

よしんば胡麻にしてもお百姓樣樣
後光をとればただの人間
大根は大根にして貴とけれ

大阪　木村小太郎

キヤムプ樂し父の背幅が賴母しく
夕飯をほめもくさしもせぬ夫
朗らかに生きよと朝の海の音

青森　小林不浪人

原稿で喰ふ氣で書けば捗らず
月給日午後四時未だ二心
およそよき機嫌となつて雨をほめ

愛知　加藤文醉

全快の眼にまだ殘る藥瓶
良心に聞けばお前はそれで良し

借金を返す兩手の金指環

上田　金子呑風

花吹雪城を包むで靜なり
救護班拍手を遠く忙しがり
衛兵所面會の髪匂ふて來

渡島　神尾三休

さんらんと地上の亂舞見そなはし
默々と踏まれる土の心かも
百姓の誇ゆたかに陽を仰ぎ

東京　河本宵果

暴壓に潰れんとする血の袋
張り切つた線をきりきり横に織る
火を探す風ひつそりと地を歩む

東京　河柳雨吉

妹を嫁がせてから寒い朝
一つ〳〵つ灯がある雪の軒ならび
夜の深さ衣桁を落ちてそれつきり

渡島　北村白眼子

子の好きな玩具が判る妻の留守
妻の客歸ると妻の急がしさ

（函館を去る）

山へ還る己れへ冷たい街の顏

神戸　喜多春秋

白晝の恐怖誰にも會はぬ山

（その夜）

シグナルの光に雨が見へてゐた
バカバカと大人にいふて腹が癒え

大阪　松盛琴人

五十三言ひ勝つ事の無駄を知り

（春の艦手）

ククと啼く蛙いつぴきにひきの夜
お氣に召さずば僕は僕でゆこ

東京　村田周魚

三世相母の手垢も笑はれず
ある時は子供のニュース悲しさう
ウインドにスキーの寫眞よい男

大阪　山本雨迷

山茶花へ冷めたいこゝろ解くば
夜具ぬぐ兒等の大きなばねだと着せる
門閉ぢてひとり留守居に人も來す

松山　前田五健

（畫賛）

思ひ邪なし椽へ座布團
考へを直せばフツト出る笑ひ

離騒の世でありますが花吹雪

京城　正木柳建寺

さらな丹前亭主をゐにして着せる
火の始末たしなめられるも女の子
水つぽい味噌汁笑つて詫びられる

大阪　松丘町二

月夜の壁に我が魂を展げける
木の葉ひそかに寢返れり池の底
明るい皮膚と暗い心に住む私

東京　三浦太郎丸

悲しげに夢の中なる子の嚔毛
ふと孫が抱きたくなつたおぢいさん
冬の夜の御機嫌さんな影法師

岡山　三村叱咤郎

ひとり居る夜の幻影が壁を出る
亡き母の聲の籠つた壁へ向く
我れ昔涙を溶きし乳を吸ひ

大阪　森雞牛子

子が死んで盤若心經ちと覺え
夜の虫妻の指環が光りたり
しのびよる秋の中なる百選會

大阪　水谷鮎美

眼鏡くもれるまるき心になり給へ
幻は消へて欄間の佛達
抱きあふた奇縁に鼻のまがりたり

大阪　增位汀柳

褌のおろしたてなる緊張ぞ
騙りをしつかと抱いてやるこゝろ
大臣にだれがならうと冬の風

宮津　宮城啞亭

ボイラーのぬく味だん〳〵明け離れ
衿の刺繍顎に觸つた物思ひ
端麗にして文數をいひ澁り

大阪　道田葉平

識の區に泛くはつめた、墓標
妻よ不二は三つになつたよ三つに

千年の緑にむせて高野を下る
人間の匂ひは哀し人間なれば

貧しき月分の肌をみつめる
瓢然と人を去り行く夢の吾が影

御影　長崎柳秀

年の瀬をどう越したのか風呂で逢ひ
家出より金を案じる雇主
上燭屋うだ〳〵云ふて金になり

鳥取　中島鐵洲

迂濶だと言ふな善人なればなり
父親に襷をかける用が出來
栗の實の枝に居るさえ許されず

長野　中島紫痴郎

孫の目と違ひ注連吹く風ばかり
木枯の男らしさにスツト立つ
一チ理ある子のたしなめに只默す

東京　中村山門

妻も子も無口しーんと寒い晩
秋雨は見詰めるものとなつて降り
しげ〳〵と冬を見てゐる雀の仔

高知　中澤濁水

よく降るなどうも降り方を知れたこと
贈物腑に落ちぬまゝ服を脫ぎ
立話す娘と友友は末亡人

大阪　西田艸樂

推定は峠と下りのない稅務
物思ひ小石を一つ拾ひ上げ
マダム等の常識がとゞかぬ遊び場所

神戸　西村明珠

養ひの來る方角へ飛ぶ雀
すり切れた疊へ子供皆達者
爪に垢何んぼ働いても足らず

大連　大島濤明

片言で人形が眠る子守唄
一粒となつて米飯さげすまれ
人間を明けつ放して爪を剪り

福島　大谷五花村

凡人の目へ無雜作に花は咲き
初老などチヤンチヤラおかし四十二
御來光今、日本の旗になり

大阪　大石文久

うつむいて戀しい人にされる春
飲めばすぐ歩きたい氣のする若さ
人樣の疲れをひろふ喫茶店

大阪　小田夢路

先生に融通のきく女弟子
泣けば馬鹿笑つてゐれば疑はれ
孝行のはしくれ筆の便りする

大阪　近江砂人

暖流がひた〳〵サクラ咲きそめる
卷紙に限る手紙もたまに書き
黑髮の長さは胸をそつてみせ

東京　落合六文錢

伸びきつた雜草にゐる裸馬

元旦試作

元朝の天下を思ふ世界地圖

大東京市制成る

栗拾ひに來たまへこゝも東京市

京都　大島黃子朗

いつからかバスは柳の下へ着け

指をもる砂さら〳〵と片戀の

雜巾の雫をひいて國のこと

神戸　椙元紋太

如露の水今飛び出さう〳〵

憤る顏に可愛さまだ殘り

籐椅子へ獨占をした足を置き

京都　齋藤松窓

秋の陽に髮なが〳〵とわが娘居る

縫ふて居る袷を前に本を伏せ春

白いものちら〳〵軒に嫁の足袋

灘　住田亂耽

上海の戰火の底のでかめろん

戀の瞼毛の乾く特急

父の死

ペンを持つ手が算盤をはじきゐる

大連　佐々木三福

彼等にもひし〳〵迫るものが見え

深夜業俺は世界の底に居る

ひもじさもしばし忘れてデモの列

大阪　關本雅幽

賣りものの悲しい汗が滴する

笑へども腮が動かぬ生活苦

頤髭も貧しき時の氣安めよ

神戸　三條東洋鬼

ひとすじの春は障子の破れから

種蒔いて五日六日の如露の水

兄弟が揃ひ止させぬ父の酒

大阪　須崎豆秋

手を振つて見ても手ブラは淋しさう

薄情を聖天樣へ告げにゆく

紀念品もろてきれいな首になり

大阪　鹽路吉丁

更生に靴を磨いて家を出る

寢轉べば秋の更けゆく足の冷

忙しさ忘れてならぬ事ばかり

東京　高木角戀坊

朝の渚靜かに明ける砂を踏み

板木の音池にぽつかり鯉の鼻

ひつそりと眼は裁判長の咳に行き

大阪　高橋かほる

うめすぎた風呂へ春雨きこへてき

一と組の繪葉書蚊帳の中で見る

餘技といふ人形火鉢の上で見る

東京　塚越迷亭

道樂の外はやつぱり世間見ず

奥樣のイツトが怖い紺絣

へつらつておもねつてまだ平社員

東京　寺井紅太郎

色街の梅雨とり〴〵の傘の色

庭石の重さは牛の草鞋穿き

ビンセツト置く靜かさも疾む齲齒

東京　竹田花川洞

机拭いて自分の機嫌とり直し

雪一つ戴せて賣れたり燒豆腐

三味線を持つと男が小さくなり

大阪　竹內機見女

溫室の蜜柑すつぱし夜の机

噛みすてゝチウインガムはそれでも

身ひとつで歩るいて見たい子守の春

東京　高島玉兎朗

祭の子袴が一つかゝらない

齒を痛んだ頃の日記の華さ

降り出して小使一人傘があり

長野　高峰柳兒

褒められる素行の男として淋し

戀人に自炊の覇氣をさげすまれ

ウインドで女に心さぐられる

横濱　田沼瀧の人

子の頬へ眞珠の如く春が過ぎ

紅皿に細かき秋の藥指

貧しさを見せまじとする月の加護

青森　田澤有石

恥てゐる心手先をぢつと見る

自嘲した影が冷え切る夜の底

赤ン坊にやる舌先の圓い味

東京　海野夢一佛

寒がりも寒さ忘れて春三日

渡し場の秋乘りもせぬ男ゐる

葉書など片附けて秋小半日

東京　綿谷摩耶火

秋霖雨人が寢てからいゝ月夜

美談あり褌襤の下の人通り

農村苦議會は揉めただけの事

金澤　安川久流美

君もバット僕もバット部屋の渦

ロボツト乍ら絶えず米のめし

みかんの山の下に不具の子

東京　八十島杜若

菜を洗ふ手は水鳥の足の色

足袋の穴世の成行に任せきり

坂町の思案なかばへ果太皷

京都　山川紫明

子を連れて何うぞ父と云ふ氣組み

空地廣々と滿洲國々旗

嘘ついて此處で重ねる猪口があり

大阪　楊井二南

勝算がありけんたいに金を借り

ブルの子よチューインガムは棄てなさい

遲刻して煤降る街に氣が咎あ

大阪　山上月下

着ぶくれた父の煙管の音もよし

青春を抱けば狹い丘の上

秋雨のしと〳〵手紙書終り

大阪　吉田水車

版こでも栖鳳の富士掛けて春

蛙鳴け鳴け其處も貸家を建てる

犬もたまには形式に吠へ

大阪　横山勝二

小指短く不倖せも母に似し

梳いてやる姉うつかりと涙ぐみ

面白い顏に生れた父なし子

新京　石原青龍刀

螳螂の斧の威勢は護符をのみ

支那服に利權が臭ふ皮の靴

土匪軍へ赤は餘計な色をつけ

横濱　柴田五萬石

惡友の親しさに居る松の內

春の灯の雨にぼやけて誘ひかけ

闇を縫ふ二人へ蚊遣香匂ひ

天津　和田默然人

孵化器うよ〳〵產む獨兒の群

暗礁の怒りに觸れた船の底

腮の割になんとかぼそい肢じやない

◇

我が柳壇の戰跡を一目瞭然たしむるため再び一九三二年の作家一百人を選んで三句集を編んだ。三二年の本欄にあらはれた作家でも同年中に餘り奮はなかつたものは其影を沒し、數に於て約二割六分の新陳代謝を見た。今回は大家と稱せらるゝものであつても、創作に見るべきものなきは大英斷を以て削つた。來るべき三三年には一段の活躍を期待する。

玉吟未着の數氏に對して今回は社選を行なはなかつたことを不惡御諒承願ひたい。

# 創刊時代の人々

## 三句

橋本綠雨

十年目ふり返るには淋しすぎ
長女を思ひて
川柳の父は淋しいものにされ
コースを變へて春を迎えん

## 創刊當時の思ひ出

關本雅幽

西之宮の或さんが笑つて居つたとて大して感動する人が居ないのは苦難の伴はない笑ひであるからである。色々の笑ひの中で苦難を通しての笑ひほど人々の腦裡深く働きかける笑ひはない。苦闘の跡の笑ひは立派な藝術となつて人々の心に浸潤し如何なる困苦をも闘ひ得らるゝ力を示めす崇高な笑ひである。

九卷十二號の主幹の「さぼは笑ふ」はおそらくそれではないかと思はれる。今本誌が十周年を迎へてその喜びにある私ではあるが一體私は本誌の爲めに如何なる役割を背負ふて來たか、あまりにも客觀的なすぎを持つた私であることを思はされる。路郎主幹始め綠雨兄其の後に來たる同人諸君の苦業の十年を語る資格を持たぬ私であることを思はされる。唯感謝しつゝ歷史を遡ぼりつゝある私はやつと創刊號を手にして居たのである。當時大いに活躍されて居た薦穗君が「今に此の創刊號も値うちの出る時がくるぜ」と言われた此の表紙は黒の中に白抜きで葉の無い柳で五六本の小さな枝を流れに垂れてゐる。心なしか今殘つて居る當時同人の數と此の枝の數とを較べて見て如何にも淋しい感じがする。柳と云へば此の創刊號が發刊された鳴尾の寺の後の主幹の舊住宅の前に、大きな柳があつて其れを



最近の橋本綠雨君

目標に師の寝込みを襲ひ或は閘に垂れた此の柳と共に師に見送られて阪神の終電車に乗つたものだ。

其の頃の或る夜主幹の羽織と下駄とを拝借して明日は就職の目見得と言ふので伴れ立つて此の家を辭した徹底郎君の青白い顔が今も、あの柳の下に殘つて居るやうに思はれてならない。

同人の中でも嵯人、芦穂、二柳子（今の綠雨）松雨、莢豆、徹底郎の諸君と私なぞが特に此の家を騒がした熱病者であつたであらう。主幹も此の熱病を案じてか既に二十四名の同人をもつて新造された船が今や進水式も終へて晴れの三十年計畫の征路に就いてゐるので、帆柱は帆柱舵は舵の役目があり板一枚たりとも此の船にとつて不必要な部分がないのであるから如何なる嵐も怒濤も乘り切つて行かねばならないと口喧ましく諭されたものだが此れ等の舟板も次第に一枚二枚と或は朽ち或は波に離脫し去り私の板も一時は押し流されたが再び舷の端に拾われて居る。一枚の舟板も懐しの船體の一部分であるが此の船は進むべき所へ進まねばならぬ偉業の航海である事を今にして口にする私は感慨無量の涙を新にするのである。だが遠慮勝ちであつた、かほる氏今以つて溫厚な綠雨兩氏共に今日の此の喜びの十年へと金線を引ひて此の船を裝飾して呉れて居る事は嬉しい。

懐しの鳴尾から千本通りへ、其れから玉出へと居を移された路郎主幹も霞乃奥様も變られた。當時お腹にある中から君に遣る約束をするよと仰言られたリリーちやんがもう川柳を作つて居られるさうである。雅幽さん、會話しませうかと「's it a (at ?」とやられて僕が面喰らつたロンドン君が亡くなられて今年は確か七年忌に當ると思ふ。斯うして總べてが行くべき所へ行きつゝあるのである。故郷無くして有り得ない私ではあるが半年に一度のお訪ねも怠り勝ちになるこの私も少しは變つたのであらうか。否大いに變らねばならない、彗十年の過去の洞窟に蝙蝠が巢を造らうてゐようが其れ等はみな過去と言ふ私の下染めに過ぎない。私は今未來と言ふ上染めに向ふべく此の十週年の歡びの上に立つて居る男なのである。

## 舞臺模型を作つた私

高橋かほる

今では今里で遊びもしますし、二南氏や華水氏にダンスも見せて貰ひますし、愚陀氏には國志無双で嬉しがらせて貰ひましたし、よしやソレが空想に終るとしても鮎美氏の勘平に私のおかる、親分里十九氏の伴內で落人を演ろ？との話が出て中々味氣ある浮世ぢやなアーと思ひますが……私の趣味の理解を持つてくれてた姉に死なれ續いて父にも別れた十年前は淋しいて〳〵しようが無く、其氣分を轉換さすべく舞臺模型を作つたり、風呂の中で端唄や聲色をやつては母に「これ風呂の中で何云うてんね、面白い子やなア」と云はれてゐました。それから日本橋筋三丁目の毘沙門さんへ毎朝詣つて居ました時、新町の曳子や二階廻りのおばはんに「彼の方雨が降つても毎朝長町の毘沙門さんへ參りはんねん……若いのんにほんまにえらいお方やで」とほめられてました。曳子や二階廻りのおばはんに

ほめられるなんてまーわてぐらいのもんだつしやろ。



最近の高橋かほる君（下）女裝せるは二十二歳の頃のかほる君（上）

## 創刊拾週年を祝して

岩崎柳路

十年前「川柳雜誌」創刊一ヶ月前、川柳以交吟社の「みをつくし」例會の夜築港から路郎師と故松雨君と私の三人が市電に同車、主幹は鳴尾へ、私は玉川町へ松雨君は浦江にと歸る道すがら主幹から川柳の社會進出として大衆向きの雜誌を發刊せられる計畫があること、柳誌の型も菊版で誌名も一般大衆の誰にも解り易い樣「川柳雜誌」とするといふことから其他出版の趣旨について委しくお聞きした。

私は野田阪神迄乘り越して驛前某旅亭で松雨君と共に具體的のお話を聞き感激の祝杯をあげ終電前にお別れをした。其時私の提出した言葉は未だに忘れて居ない。「私は熱し易く冷め易い人は大嫌いであるからこの際難かしい言葉は拔きにして生ある限り永久に本社の爲めに盡す事をお契した。

そして間もなく出た！〳〵創刊號が。其當時私は宣傳部員として相當活躍したが遺憾ながら其の後、間もなく上京したので東京支部を受持つことになり、故千代二君と後に上京した駒人君とで、よく會して支部の面目を發揮してゐたが數年後家庭の事情で止む無く渡滿して現在に及んでゐるので本誌のために充分盡すことの出來ないのは、いつも本社に對してすまぬと思つてゐる。從つて緣雨兄一人が（同人の中で）今に至る迄十年の永い間多大の努力犧牲を續けてゐられるのを見て感謝の念に堪えない　同君はいさゝかも野心や賣名心を持つてゐない十年一日如く終始一貫せる人格者であり、主幹の句の「牛と私たゞ默々と默々と」といふのである。其の點は私がいふばかりでなく東京時代に路郎主幹上京された節師と共に高圓寺の柳樽寺へお邪魔した時、劍花坊氏も賞讃して居られた。又省二氏上京の節も感謝して居られたなど今更私から申す迄もないが創刊號の思出を記すと共に先づ緣雨兄に感謝せねばならぬ。

創刊當時私の嬉しかつた思出は竹馬の友の故零骨と朝陽君の三人が每夜の樣にあの南海食堂で、よく語り且つ呑み、すごい位の氣焰を揚げたことである。

鳴呼私は零骨を惜しむ。しかし君は名句を殘して去つたのであるから本望だらふ。「ほろ〳〵として小兒科の扉を開け」なんかは生涯忘れ得ない句だ。かほるさんの「渡し場に船見當らぬ大井川」等も嬉しい句だ。又舊同人芦穗君の「魂の抜けてる様に駱駝立ち」など何んと懐しい句であらふ。創刊當時の啞人、芦穗、輝翠史風、飛水、風人其他各氏御健在なりや其の當時からの同人で雅幽氏のお顔丈け今忘れて居る事は心慨に堪えない。今年三十八歳の私、路郎師の三十年計畫の二十週年紀念號が出る時は四十八歳になるが私にも其れ迄には計畫があるが未だ發表するには早い。



最近の岩崎柳路君

創刊拾週年紀念を祝すると共に同人社友其他柳人の御健闘と益々川柳詩に御精進あらん事を極寒の滿洲より遙に祈る。

附　言

渡滿後未だ所々放浪中の私ではあるが何れは適當な地に永住する積りである。其の節は滿洲支部を開設したい。實現の上は大いに諸兄の御後援を前以て御願して置く。

（大同元年十二月十二日記於奉天）

## 創刊時代の鳴尾

東洋隨一の甲子園グラウンドも、本誌の創刊時代には鳴尾の停留場から約七丁ほどの南にあつた。こゝが競馬の鳴尾であり、飛行場の鳴尾であり、野球のグラウンドであり「川柳」の鳴尾であつた。川柳雜誌社は停留場のすぐ東南にあつた。

野球場は發展して鳴尾村甲子園に移つた。川柳雜誌社は發展して大大阪市へ進出した。



創刊時代の川柳稻荷會

前列向つて右より繰圍（當時二柳子）、靈彩（死）、古城山、雨松（死）、路郎、麗童、穗圍（死）、風史、かほる

後列向つて右より喜乃、輝翠、龜主の圍主、村、一洲、不盡（大正十三年四月四日五日撮影）



# 番傘人月旦

## 定九郎老人

早いのに御苦勞なこつちや。番傘人の月旦といふ注文ぢやな。よからう。老人久しぶりの氣焰ぢやて。

### 岸本水府

先づ水府ぢや　流石に光つちよる。若いにもう頭が禿げちよるといふわけぢやない。時々よい句を發表するといふ意味ぢや。誰やらが云ふちよつた。「苦勞してきた人間の句は表面どんなに甘たれた句でも、底には強い苦さを藏してゐる」とな。大衆受のすることぢやあ何といつても關西一ぢや。東京にだつてありやあせん。技巧もうまいし、選も上手ぢやし、酒を呑ませて遊ばせて臭れるし、と番傘の同人連隨喜の涙を流しちよる。確かに度量は大きいし、人間も出來ちよるらしい。まあそんな風に見える。併しありやあ臭いものに蓋主義だよ、と云ふものは云つちよる。成る程この男に議論は向かん。句會なんぞでやる講演をきいちよると、はらはらする。もつとも今までに、相當きける本質的な川柳の講演なんちうもんをやつた川柳家は、ヲヂオでさへ一人もないのぢやから、無理からぬ話ぢやが水府のはひどすぎる。あれぢやあ番傘の若い連中が、蔭へ廻つてぐずぐず云ふのも無理からぬ話ぢや。とはいふもんの勿事主義の番傘ぢや。本誌に半文錢が書いちよつた通りぢや。併しとにかく水府は偉い男ぢやよ。

### 小田夢路

夢路といふ男にも困つたものぢや。人のいゝ男なんぢやが、從つて地方なんかぢや夢路さん夢路さんちうて持てゝるんぢやが、少々頭の惡いのが瑕ぢや。句なんざあ毒にも藥にもならんていのもんぢやから、論するがものはないが時々馬鹿なことを云ひよる。「主幹が死んだらあとの續かぬやうな雜誌は出しても仕方がない」とか「句に天地人はやめて點數をつけた方がよい」とか「てにをはでがは品が惡いからのを使つたがいゝ」とか凡そ頭の惡いことを云つて味噌をつける。本人蔭で噪はれちよるとは知らんで、得意になつちよるからいゝ氣なもんだ。俺達の川柳は本格川柳で、俺達の川柳こそ新興川柳だなどゝ云ふ。ありやあ夢路が書いたんぢやないかも知れんが卷頭言で頭の惡い言葉は、みんな夢路だと一般にきめてしまつちよる。本人にや氣の毒だが仕方がない。といつて夢路も番傘の大功勞者ぢや。おろかに思つちやあいかん

### 堀口塊人

口が達者なんで、番傘のピカ一だなんて云はれちよる。新進の同人連が大分この男の傘下に集つちよる。「川柳は浪花節だ」なんて名言を吐くだけあつて、その云ふところ浪花節みたいに間口が廣くて奥行がない。宮川松安や天光軒滿月ちやなくて、日吉川秋齋か、藤川友春といつたところぢや。野生も浪花節は好きぢやが、まだ川柳を浪花節に比べるほどの見識を持合せちよらんのは遺憾ぢや。浪花節にも酒井雲なんて男が出てきちよる時節ぢや。塊人たるもの、撰りに撰つてあんな下手糞な川柳ばかり發表せんでもよかりさうなもんぢや。世間ぢやまだ此の男に期待をかけちよる。

### 其他大勢

# 光耀抄

## —葭乃選—

釜ヶ池　凡子

ルンペンに親あり子あり十二月

どうでもなれ神にまかして遊んでゐる

歸へしたし歸へしたくない君なるに

あくびしてぴかりとひかるきんばなり　大阪　みね子

半衿のにじみに淡い夢を衝く

標札の字にも嵩あり伯父の家

護符しつかりと十二月の底の冷え

寂しさを見すかす束ね髪になり　大阪　壽枝

方角と厄を氣にして動かれず

双六に母がいたわる兒が一人

猿兎の猿こち向いて負はれて居　大阪　公子

人絹が簞笥の中ではばをとり

主人たゞうなづいてゐる領收書

ウインドへ我慢してゐる母となり　堺　道子

松かざり小さく世間の端にゐる

朱を塗りて春の繪の具で竹をかく

戸橋木履の鈴も春のもの　釜ヶ池　紅蔦

待人は來ずトランプに持つうらみ

春歸る秋歸る等と冬が來る

亡き靜ちやんへ

いわしずし最後の食でありしかな　釜ヶ池　靜女

いつの間に知つたか欠伸手でおさへ

日曜日父もまじつてかくれんぼ

若い母一人の子供もてあまし　神戸　茂もよ

羽根蒲團重たくなつて人の末

ゐんだんの話に娘平氣なり　大阪　美津女

折箱の蓋に飯粒派手につき

産婆皆末の事をばほめてをり　大阪　貴志子

子の翌日を思うて是もあれも食へ

觀兵式にて

軍國の至尊は雨にぬれ給ひ　守口　武子

あますところもう半月の風が吹き　大阪　機見女

溫情の密柑すつぱし夜の机　大阪　伊勢子

年の市をうら淋しくも通るなり

しんみりとかこふ火鉢へ妹茶目

○　麻生霞乃

おもはくのある神棚のお供へや

ごもくあさりが君に似てゐたとも云ふ

むつちりとして世馴れたはエロの客

佛檀の埃を異見して歸り

夢路に輪をかけた愚論を大眞面目で吐く

落語家氣どりの小太郎ぢやの、迷亭と泥試合をやつて名聲をあげた可明ぢやの、議論は嫌いぢや嫌いぢやと云つちよる辯護士の雲雀ぢやの、いまだに番傘の空氣が十分に吸ひきれんやうな文久ぢやの、他人の句は馬鹿げた嚴選をするくせに、自分の句にはひどく寬大な蹄二ぢやの、その他月下、砂人、午朗以下大勢擧を並べちよるが、老人これから按摩をとらせんならん。今日はこの位にしておかう　思ひ切つてづけづけ云うたが、齒に衣きせんのは年寄の持病ぢや。番傘の幹部に逢うたら惡しからず云うちよいて吳れ。

## 本社句會　出席回數表

昭和七年中本社句會へ六回以上出席された方を調べて見ました。（水車調）

（一二回）夕鐘、掉二、水車、かほる（一一回）絲雨、豆秋、鶴峯、琴人（一〇回）里十九（九回）おさむ、葉平、山雨樓、夢裡、艸樂、變人、あや美、鮎美（八回）小柳子、みつる、機見女、八步、勝二（七回）鬼丸、松之助、默平、禿山、新水、路郎いわを、白柳子、方眠（六回）えいを、白峯、華水、萬よし、楳太郎、柳次（五回以下省略）

# ふ味を句

## ——前月の三誌より——

閑生・山雨樓・町二

なるやうにしかならぬ寢床に落葉聞く　雅幽

**閑　生**——なるやうにしかならぬと諦めさゝれても、なほ諦め切れぬものが心の底に動いてそこから無限の淋しさが醸される、折からの落葉の音、神經の末端がざらついて冷い寢床の膚ざわりも身に添はない、字句を糾つて弱者、敗者が泣き醒めた後の涙の味ひが出てゐる。

**山雨樓**——初め古川柳の面白味に隨喜した當時には誰の句であつても　即ち句主がわからぬでもいゝ、只わけもなく嬉しがつたものだが、次第に句と共に句主と云ふものに關心を持つ樣になつてくる（これは獨り川柳に限らないが）この句はこの句主にして始てほんうの味があると云ふやうになつてくる。僕は雅幽氏の句にはとうから惚れてゐるものゝ一人だ。それは氏の人柄と句に對する忠實さとが自ら引付けるのであらう。惚れた仲では痘痕も靨に見えると云ふが、決して句を盲信してゐるわけではない。句の鑑賞には之れを最も恐れてゐる。あきらめの底を流れる人間の佛心がこの句に光を投げてゐる。愛誦再讀すれば　叙法のうまさがわかる。

**町　二**——「なるやうにしかならぬ」とは作者の一つの人生觀ではあらうが、安易さを免れぬ。安易さではあつても、古來なるやうになつた時代なんかないのだから、この語決定的に嘘ではない。決定的に嘘ではなくて誰もが身に滲みて心得てゐる　平凡な眞理だから、十九音字中の十音字を占めさせるのは安易さを免れぬのだ。此の句の見るべきは「寢床に落葉きく」心境であつて、この心持には共鳴出來る。

　更生へ馬も早よから起される　豆秋

**山雨樓**——豆秋氏は此頃すばらしく　佳句を生む。

この句はフト作者の頭に浮んだ　自力更生觀として時事吟であらう。——平凡と云ふ意味ではなくて比較的沒個性的　或ひは題詠的である。——所謂川柳らしい川柳である。輕くて面白い。しかしそこに豆秋氏の面目があらはれてゐる。　この人はこう云ふ見方に惠まれた素質がある。明朗な快活なキヤラクターから偽りなく流れて出る　柳味は益々大牢の滋味を增すことであらう。けれども苦惱する豆秋から生れ出る作品により　大きな期待を持つものは恐らく僕一人ではあるまい。

**閑　生**——生氣の脉々たる句と云はうか、更生といふ字は反復される性質がある所に　極めて巧みなユーモア味もある、何にしても更新第一の朝に拉し來つた馬が　句を容易に成功せしめてゐる。

**町　二**——初五へ「更生へ」と川柳作家の常套的手法の言葉を据えて「馬も早よから起される」と敍したところ、成功の句と云へやうといふのは「更生へ」とか「幸福へ」とか置いた句に碌な句のあつたためしがない。それをこれだけに生かして云つたのは、偉とするに足るといふ意味だ。私の作句對度とは對蹠的なものではあるが。

　蹄鐵屋出て今更に秋の晴れ　大門

**町　二**——着想、表現共に玄人の作である。只「今更に」がどうかと思ふがこの言葉がこの句の生命點であることに氣がつく。一口に云へば川柳よりも俳句に近いと　思はれるかも知れぬが、やはり川柳だ。少くとも我々の「秋の晴れ」の「れ」は不要と思ふ。

**三雨樓**——數年前　講談倶樂部の懸賞川柳（秋）の選をした劍花坊氏が「呑口を出る醬油も秋の音」の句に對して「純主觀、但し俳句もこの邊までは至り得る」と大見得を切り「秋の暮手紙ポストの底へ落ち」の句に「ストンと云ふ音がした、そこに何とも云へない淋しさがあつた」と評してゐる。大門氏の句が必ずしも俳句以上に出てゐるとは　云はないが、俳人である作者が俳句以外の詩的感覺を

川柳として見出したものであらうことは疑を入れぬ。川柳は俳句のやうに季感と云ふことに咽喉をやくされる懸念はない。より奔放により潑溂に詩心を詠むことが出來るだけに川柳のもたらす句感は立体的であり跳躍性を姙んでゐる。この句の語感の強さには川柳ならではと思はすものが受取れる。

**閑　生**――鋳鐵屋の軒先を離れる時にからりと氣分が明かになつた、その瞬間の變境を的確に捕へた表現がうまい、こゝへ入る前も秋の晴で、氣分も輕かつたが、そこを出て今更に心の晴れが空の晴れと遺憾なく照應したと云ふので、技巧に句の力が減殺されてゐないのは、自由なる字句の驅使によるものである。

秋は秋は煙をつなぐ青空や　　雞　門

**閑　生**――この人の現在の句の批判は町二君に任せておいて、その數年の先を待つことにしやう　其のうち句法の轉機も脫化もあらうから。

**町　二**――六句の中では、この句が一番好きだ。一讀して只好きなんだから、何とも仕方がないが、強いて好きな理由を擧げると、句が澄んでゐるから。すぐれた技巧を持ちながら作者の感情が何ら技巧にさまたげられず脈々として私に迫るから。そして何よりもこれは私の考へてゐる「詩」であるから。

**山雨樓**――觀賞者は、この句の何處に川柳味を見出していゝのか。それは常識されてゐるおかしさ、うがち、輕みなどゝ云ふ第一次方程式では解けさうもない。少くともうがちの第二次方程式以上の作品だ。しかしこの句には確かに川柳味が漂ふてゐる。

川柳は一面言葉を最も能率的に愈角度に、對蹠的に驅使する。――それは即ち心の最もムーブメントな働きを示す詩的精神への跳躍を意味する――藝術である。「けむりをつなぐ」と云ふ物の見方は美しい程巧妙な川柳味のサゼストである。青空に戀ふ純眞な若者の胸の鼓膜が齟々におどつてゐるやうだ。

秋の暮芭蕉をはじめ寂しがり　　塊　人

**町　二**――この「芭蕉」は人間芭蕉か植物芭蕉かと、不覺にも私は惑うた。どうも前者らしい。いや勿論前者だらう。これは秋の暮は芭蕉をはじめ人間共が寂しがるといふ理屈である。秋が寂しいといふ心が理屈ぢやなくて句が理屈なのだ。俳句ではこんなのを月並といふらしいが、川柳では何といふのか知らん。「オルガンはキリスト教の音がする」の句と共に作者のために惜しむ。

**閑　生**――無造作に打つた一撃、平凡なゴロそれが芭蕉をはじめの邊で忽然とイレギュラーバウンドをして、野手のグラブを掠め、安々と一壘に生きてゐる、と云つた趣きがある。矢張老練の選手かなアと思はれる、秋の暮は無論秋の夕ぐれの事で、暮秋の意味ではなからう。

**山雨樓**――塊人氏には　塊人張りと云つたものが見え出してきたやうに思ふ。芭蕉を初め日本人全体が……と大がゝりな物の見方である。これは句想が大きいと云へば云へるがやまをかける表現で、下手をすると單なる誇張に終る處れがある。　この句の想は問題にするほどの特異なものではないが、同氏のカラーが漸く固定化しやうとしてゐるのを見受けたので俎上にのせた。自己陶醉のマネリズムは誰の身邊へも常におそつて來る。氏は今警戒線の上に立つてはゐまいか。

死ぬ先の事ばつかりへ夜が來。　〇　丸

**山雨樓**――〇丸氏の年輩から、作句經年からそして又其圓熟そうな性格から生れる句は多く平淡な滋味な輕味なものであらうと、實は近頃餘り深い關心を以つて拜見してゐなかつた。ところが「きやり」の十二月號の同人吟欄を通讀して、この句を見付け少なからず胸をうつものがあつた。〇丸氏はたしかに先年愛嬢を失はれたことがある。お役目柄人生の無常迅速は誰よりもよく　お察しの筈である。斯う鋭く眞正面からぶちまけられて見ると句が流石に迫つてくるやうだ。　これできやりの句風を云々するのではないが餘り低廻趣味に落着かずと斯うした、突込んだ句の傾向を見せて貰ひたいものだ。

**町　二**――この句一讀して深い味ひを持つと見る。再讀してどうもぴたりと來ぬと感ずる。それは「夜が來る」の座五に必然性が稀薄だからだ。試みに「死ぬ先のことばつかりへ」の下へ「灯がともる」「星冷ゆる」「落葉する」「指の冷え」「續く雨」「冬迫る」「尖る秋」などゝいくらでもくつつけて見たらどうなるだらう。とは云へこの句「きやり」の中では出色のものと思はれる。

**閑　生**――所詮、往生は無生なり。死ぬ先には何もない、無は解決の埒外にあつて、到り見れば別事なく、別事なき中に尚心底に一事を留む。同じ事を日暮に思ひ續けて居れば、いつともなく無疑の一疑へ闇が來る。好きな句である。

# 柳觀スタヂオ

寺川信
挿畫 足立俶郎

滿員の南濱電車に、字義通り蟻集の鮭になつてゐると、

「やア、どうしてゐれん」

肩を叩くのは舊友麻生路郎君である。

「三十年來の友達で、君と僕とになつたなア」

彼、感慨に耽つたやうな口をきいておいて

「おい、何か書けよ僕の雜誌に、活動の方には川柳的なことが多いだらう」

「あり〳〵の大ありさ」

と僕、こんな風に御受合をしてしまつたわけである。後で悔いても及ばず、君子でないだけに、すぐと危きに近寄つて、こんな下らぬ原稿で恥を暴した上に、麻生君並に川柳雜誌幾千萬の讀者諸兄姉——と云つても、その實誰も讀んでくれはしないだらうが、——に御迷惑をかける次第となつたわけである。

×

日本撮影所ほど川柳の題材にもつてこいの處はないだらう、A、B、C、D、Eと數へると、大正八九年以來、歷史をもつたスタヂオも少くないが、何處も同じ「變な處」である、(新川柳を「變な」とか「可笑しい」とかに比喩するのは以ての外だ人生詩の權威に關はる……といふ大上段からの一本を入る氣早な方には一寸待つて頂く)

何故、變な處か、とそれを分解斥說するだけでも、本稿の目的は達するわけなのだ。

×

撮影所生活といふものは、不平均で跋行的なのだ。他の場所でなら傾いて倒れるか、動搖くかするに決まつてゐる狀態にゐて、此處だけは不思議に安定を保つてゐる。

伊藤組の撮影、午前五時集合などと揭示が出ると、前日夜半十二時迄撮影があつても、師走の寒天に曉闇の北嵯峨の細徑を、幹部、非幹部、男女老若が、ぞろ〳〵標へながら、電燈の明るくもない、撮影所に集合する。

化粧をすませ、鬘をかむつて、衣裳までつけた、大石藏之助や吉良家の勇士や侍女達等等は、盛り上げたやうに、ガタフォードに乘せられる。斯うしたキネマ俳優と稱する貨物積載の自動車が三、四臺づゝ。

伊藤組が洛北八瀨へ走れば、木戸組は伏見方面へ、西鄕組は長岡附近に、と云つた具合に四散して、京の町はまだ寢入つてゐる頃已に、彼等は、その生命の爲の勞働を開始する。

山縣組は午後一時、セツト撮影とあつて、伊藤組と掛持出演の人氣スターになると、午前中山野を猪の如く馳けめぐらされ、冬でも汗みどろになつてゐるのに又もや自動車で運び返される。先方の撮影時間の都合でその歸りやうが少し遲れると、飯を食つてゐる時間などはない。待ち兼ねた山縣監督は、「撮影所長から」「新

年特作だ、何日までに上げたら懸賞金百圓也……」などと、煽られてゐると「人間は飯を食ふなんか間違つてゐる」云はぬばかりに、撮影開始！と怒號りつけるのである。このところファンが見たら泣くことだらう

そして夕暮になる。

大隈組東京へロケ、と張り出される、すると、伊藤組にも山縣組にも主役を勤めてゐる、春野秋江と云つたやうな人氣スターになると、必ずこの大隈組にも重要な一役を受持つてゐる。夕方から京都驛へ、そして夜汽車に一睡するかせないに「東京」。早朝から神宮外苑の寒風に吹きさらされ。而してその夕方、又京都へ。翌日休養があるか無いか保證の限りに非ず。

×

併し、それはスターの場合だからまだよい、銀棒、梅助、ワンサガールの面々になると、此頃ならば、早瀬も凍つてゐやう嵐峽の奥空まだほの暗い曉天に



「オイも一度飛込め、寒いのは誰も同じだ、泣面をする奴があるかツ、自分の藝術の爲だ死ぬ覺悟でやれツ」

監督に叱咤されて、彼氏は、塗れ鼠の水滴の下る衣物を干す間もなく、喪心しさうになりながら三度目の入水を演じさゝれる、それも、スター俳優に蹴飛される一補吏の役所で。

スターに失策があつて、撮りなをし、となると五度でも六度でも、骨の髓まで凍つても死ない限り飛び込さゝれるのだ又、寒夜の一時である。人工猛雨のなかの大殺陣、お姫樣や侍女も追ひつ追はれつする、ポンプの雨滴は凍土に氾濫して、それが又氷結して、素足に感覺を失はせ、辷り倒けさうになる。これを眼前にしたなら、孫子の代までキネマ俳優にすることだけは思ひ止るだらう。

終了三時。それでもスター女優は自動車で送られもする中幹部以下は、何れも其親にとつては可愛い子や娘であらうに夜闇の北峠峠を恐ろしいとも思はないのか、それ〳〵に消へて行く。

その翌朝遲くも六時には、又撮影所へ。

それでゐてお給金はワンサーは三ケ月無報酬、初任十五圓也が普通である。京都市内から通ひでもしたなら、交通費にも足りぬ。遠い故郷から出奔するやうに、紅や青い雲の如き希望を抱いて來た彼嬢等であつたなら、パンの爲に何を賣るか知れたものでない。

人氣花形、キヤストに大書される人々とても、實給金は公稱の十分の一と推定

して大して誤りはない、多くとも三分の一を越す筈はないのである。

舊知池田義信夫人(栗島すみ子氏)に某ファンが、月收千圓もあるなら家を建てなさい、とか何とか勸めた、處が「千圓もあつたらねーいゝのですけど」日本一の名女優にしてからが如斯である。

×

忙しい一面があるかと思ふと、毎日「ばやーつ」と、午後から顏を出して、俳優、監督部屋か監督部屋で麻雀、Y談、寒暑の酷くない頃はラケツトを振りまわす。こんな時もある。こんな人もある。

撮影所長の仕事の大部分は、俳優、監督等の月給前借や無心の擊退である。

シナリオライタアは、所長の前に怖る怖る伺候して。

「若い女が泣いてゐるのです、樹の下でね。すると街路の先方から自動車が馳けて來ます。その女が見てハツとしました、と思ふと、青年はひらりと飛び下り女に近づく、その刹那、彼方側の窓からピスルがパンパン……如何です、こんなのは」

「よしよし、その女は可愛想な最後になるのだね。見物を泣かせるかい確に」

「そりやもう、吃度、泣きますよ、舘で特製のハンカチーフを賣出してもよい位ですよ」

「よしそれをとつてもらをう」

斯くして「彼女は何故死んでゐたか」の大作が幾週間の後に街頭に宣傳されることになるのである。決してそれは喜劇ではない。

×

御室仁和寺の裏山に、山をめぐつて四十八ケ所の靈場巡回の名所がある何かの佛會の日以外は猫の子一匹通る處でない故に、ワンサーの悲哀は、監督X氏やスタデイオ要路のZ氏と云つた人々のお伴をして、この靈場を巡拜するのである。

さうすると、靈驗たちどころに顯れ、今迄つかなかつた役がもらへ、タイトルにも例へそれが、女中一とか侍女であるとしても、鷺奈喜子、武仁壽々好子とか名で出る、すると、物好なファンから澁紙が、ぼつ〳〵來出す、と占めたもの。

「彼女でも人氣があるのだね」なんか所內で口の端に上るやうになればプロマイドも作られる。

やがて、端役からワキ役、主役と、鰻登りに、スターに昇格する。だから「新參は繼に賢き歩行ぶり」(武玉川)となるのである。

北嵯峨は竹籔の名所である　晝猶暗い細徑が多い。撮影見物に足繁く通つてゐる間に日暮るのも忘れて、うつゝを抜かしてゐる不心得な町娘達は、梅助の一人にでも聲かけられると嬉しがつて送られることになる、春は朧のものかげに、映畵なら定めし檢閲官によつてカツトさるべき、一情景が展開される。

又、嵐峽、大櫓川に散つて渦巻くのは山ざくらの花のみでない。

江上を上下するあの水馬のやうな短艇にも「內や床しき、內ぞゆかしき」のロマンやイストアルの第一頁は描き出されてゐるのだ。そして

澁柿のまだ十月に氣が付ず(武玉川)ならまだよいが、紅がら染の格子の奥、昔ながらの京の舊家に

似ぬ顏を產んで我身も疑はれ(武玉川)となると、物狀騒然となつて來る。

×

其他、映畵會社とは會社と從業員は痩せ、重役ばかり肥る所である。その機構にも多分の柳昧があるが、長くなるから一とまず此處で擱筆。

以上些か漫談に墮したが、必ずしも出鱈目ばかりでない。ことだけは申添へて、後は又の機會に。——

ぬかるみを顏しげしげと通りけり

——をはり——



# 近作

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう

元旦といへど六疊出ぬあるじ

日は東酉の年にて候か

起されて雜煮の膳のかみにつき

數の子も暮と違つた味になり

署紙を書いた手でもう父は呑み

スキーヤー初日を下に見る氣なり

連れ出すに應援のある三ケ日

今たつた人の盃うけさゝれ

誘惑をひそかに待つも松の内

ほがらかな松の内なり借は借

麻生路郎

# 近作俳句

路郎選

不平持つ人の鉛筆折れて居り　大阪　大門
やつと起きた藥屋小さい窓をあけ　同　同
冬の陽を慕うてあがる藥埃り　同　同
突然に霧がうごいた非常線　同　同
非常線お通夜の珠數を出して見せ　同　同
棒押しの帶がゆるんで押し切られ　同　同
落ち入つた人に家政婦手を合せ　同　螢ヶ池　愚籠
幸福よ水はのん〳〵流れてる　同　同
秋の夜を詩集一冊持たずゐる　同　同
つめたさに無心は言はず戻りけり　同　同
いつ死ぬか知れぬに髪を伸ばすなり　同　同
死ぬる日がくるがあわてゝくださるな　同　同
何も彼もかなぐり捨てゝ初湯にゐ　同　火取　沐天
元日の孤兒ちよこなんと居るばかり　同　同
思ひ出も斯くてよろしき祝膳　同　同

## 飛燕往來

私信のことですから公開を憚るやうなところは前略、中略、下略、又は××の伏せ字にしました、御諒承を乞ふ。

▼**大島濤明君**（滿洲新京にて）二十五日（十一月）朝六時二十分　新興滿洲國の首都新京の黎明は何處かはつらつとした心地がして　自ら生々します旅行ばかりで　貴誌選句延引おゆるし下さい何れ新年號になりと　拙作を送ります。（路郎宛）

▼**中野柳陽君**（新京）こゝへ來て一ヶ月餘り未だ御挨拶もいたしませんで　相すまぬ次第です今日濤明さんの御來京、トテも愉快に一日を過しました。川柳と先生の御話を中心に。御健康を祈ります（柳陽）新興滿洲國の首都新京の一等旅館コゝの主人が　中野柳陽氏です今川柳雜誌を　中心に話をつゞけてゐます（濤明）（路郎宛）

▼**川村花菱君**（東京）先日大阪へ久しぶりでまゐりましたが　それの用むきは午前中にすむのでそのあとはゆる〳〵　あなたに御はなしを伺ふ事を樂しみに丁度雜誌の　選をしましたのでそれも御手渡し度しと思ひ　樂しみに致して居りましたが　殘念でした。選も出發直前に　大阪から出させました。いろ〳〵御苦心御奮闘の事全く大變だと存じます。川上君此度報知大懸賞に美事當選の由まことによろこばしく存じます。いづれまたその中に御目にかゝれる機會のある　事を樂しみにし

種を蒔く様にキッスをして廻り　京都　同　木公

舊友と菊見に遇へば鼻冷ゆる　同　同　同

湯の郷の松籟と寢む額の下　同　同　草村

果物の味覺へ處女の指長き　同　同　同

しんし張り姑のものと知れるなり　同　同　同

草に臥て帽子を鼻にかぶせたり　同　同　同

末つ兒の側で長女が編む日向　同　同　同

聞捨にならぬ言葉へ笑ひたり　淘山　同　雀子郎

轢死者へ鐵と鐵との無表情　同　同　同

搾取さる者のみ正し陽の眞下　同　嬉川　鴉天

支店長に拔かれて田舍物足らず　同　同　同

恥讀へ電氣スタンド不意につき　同　同　同

感謝した恩にいつしかしばられて　同　京都　竹雅

我妻へ聲が大きい歳になり　同　同　同

見込みない男になつて夜の猪口　同　同　同

金の事で女がついて來る朝　同　神戸　秋彦

誤解して傘はいらぬと友は去に　同　同　同

母のない娘に星を見る癖があり　同　同　同

火葬場が出來上つたのを見て戻り　同　長野　柳兒

鉛筆をなめ〳〵女のすがる戀　同　同　同

理智的に女眼鏡に育てられ　同　同　同

て越年致します。先般の雜誌で御令息の御大病の句を拜見して、昨年小生の子供猖紅熱の事を思ひ出して胸がむすぼれました。御奥さまはじめ皆々さま折角御自愛願ひます　早々

極月一（路郎宛）

▼**安川久流美君**（金澤）北國のこの頃はもう炬燵、寢轉んでじつと人生を考へてゐると、不平も一種の快悅をおぼえて來る。と同時にナゼ川柳や俳句位に理解を有つ山の神を迎へなかつたかを後悔してゐます。（路郎宛）

▼**安川久流美君**（金澤）森の都のおでんやを薙ぎ倒しに呑み廻つた揚句、やはりお酒のいゝ所へツイ足が向きます、おかげでアルコール毒か、關節が痛んで眠れぬ夜もたび〳〵。

△白湯のんで人生を考へる（寢乃宛）

▼**寺川信君**（大阪）本日別便にて「柳觀ノタデイかばなし」と云つた半片二十四枚ばかりの記事を送りました。然るべく御使用下さい。此頃のことですから、着不着御報願上ます。一度ゆつくりお茶でものみながら話したいものです。寒いからお大切に。まだ知らぬ令夫人によろしく。十二月六日（路郎宛）

▼**顯原退藏君**（京都）拜啓貴誌毎々御惠贈を忝うし御懇情の程深く奉感佩候　特に武玉川研究の分は取揃へ御送被下誠に嬉しく　存候武玉川の研究は當然早く　出づべかりしもの貴誌によりて是非荊棘を拓かれ候　やう切望罷在候（261）近松丹波與作、道中双六の條「三島こゆれば箱根へ三里峯目次第に關こゆる、悪い目うてば手判をとりに元の京へ立歸を」句は右の悪い目うちし場合と存候　蛭子氏補

言ひ負けて膝から夜の冷を知り　松江　同

思ひ出の丘の彼方の夜汽車など　慕秋

マネキンにチヤンスが欲しい嘘なる　同

たまさかに彼女と逢ひ見しなれば

諸肌が匂ふ大人びた君　同

氷の下の鯉が食いたいブルジョアー　島根　玲児

泣くもよし涙を拭いてくれる人　同

寝ころべば儲かる町の灯がにぶし　松江　砂詩

生か死かフケが溜つた原稿紙　朗

近寄れば婦人闘士の薄化粧　同

酒飲まぬなどとも云へぬ春の雨　小松　しとし

唇のあまさよ月が見てゐます　同

此の土地へ來ても銀杏のあるお寺　愛媛　南葉

盗みする外に自力のあるものか　同

仲人の忙しくなる酒を飲み　大阪　青兒

連れがあり娘はつきり口をきゝ　同

母親に見上げられてる紺がすり　新潟　狂花

煙り出しては居るが家賃拂はない　同

女性を捨てゝ學校の經營主

功績を己れに結ぶさもしさよ

死ぬといふ手紙平氣でポスト受け

記(75)の「松脂はたゞ膏藥の子の日哉」は眞德の句にあらず守武の句に候　職人盡の誤と被存候(社兄)

**▼上野錦水君**(石川縣)　寒冷日々に相加り候處本社益々御清榮奉大賀候陳者　今般當地出火に際しては格別なる御懇願を賜り　難有奉存候過日は結構なる　御慰問品並に川柳雜誌夥數御惠贈下され夫々叮重に　罹災川柳家へ御贈呈仕候いづれも感激置く處を　知らず御厚情を謝し居り候右御禮申傳へ旁々御挨拶まで本社御一同樣へ然るべく　申傳へ被下度願上候敬具(路郎宛)

**▼廣江天痴人君**(松江)　先生、久しく失禮いたしました。御多忙の由、柳壇の爲慶謝に堪えません。私もやつと稻刈を了へました。天候が少しく不順になつて例年よりは　二旬ほど遲れました。昨日と今日に、(執撰り(コナシと云ひます)をやりました。今夜始めて新米を食ひました。我家の新嘗祭です。先日は、短册並に御手紙をありがたうございます。御禮に何か送りたく思ひますが、只今、ポケツトが貧血してをりますので殘念です。御免下さい昨二十四日、社友の八步氏が私の宅を突然訪れて下さつて、驚喜しました。約十分間話て別れ、八步さんは今市へ。當夜松江の定宿岩城旅館へ、柳人、祥月、巻二、硯滴、まさを、私の七名が押寄せて句會をやりました。大阪の話をうれしくきゝました。元氣な八步さん萬歲！十二月一日夜いつもの龍昌寺で　師走句會を開きます。早く十二月號を見たいものです。「ぼた餅の味へ稻刈りやつと濟み」(路郎宛)

給料をそつくり渡す新世帯　大阪　同

歸らない夜は炭團にも侮辱　勝二

社長にも御辭儀をさせる人があり　同

鬼灯をキユウツと鳴らして左樣なら　金澤　今雨

奥樣の口添へで嫁ぐ日の女中　同

どてら姿へ今日も玉葱少し延び　大阪　素月

さはあれど女後をも見ずに行き　同

モーニング遣るも貰ふも古馴染　同　荷千

閉め切つて貧しき家にみせる冬　同

鷲に國の訛りは無之候　筑川　柳風

夫婦喧嘩男はさつさと遊びに出　同

自尊心傷つけまいとマツチする　愛媛　虹一

離婚沙汰訊けば浮氣に出來たもの　同

梨、林檎、リユツクサツクに秋の色　神戸　竹楓

衝動を抑えるバツト深ふ吸ひ　同

熱情は女の髪に血が通ふ　石川　醉羊

靴の紐結んでくれて忘れかね　同

男爵の息子を案ず捜査隊　神戸　幸捐

はにかみはキングを置いて窓を閉め　同

黒枠へ爵々を並べ立て　大阪　菊路

出て行けと云つた口から保護願ひ　同

▼**蛭子省二君**（朝鮮）冠省。書籍の義は御高配を蒙り萬謝申上ます。公立社御主人のお手數も感謝致してゐます。お正月にあの九册を讀むでしまふ心組みです。「飛燕往來」に因て諸氏の御近況が知り得らるゝ事は、便利であり欣快であります。穎原敎授の武玉川研究（118）狐妖傳說必ずしも支那の受賣許りでないとのお手紙は御尤。然し註釋通りでも別に支障はないと思ひます。例へば井上圓了博士の妖怪學一〇九六頁に「我邦の狐談の起原を探究するに全く支那より傳來せる狐說に據りしこと明かなり」一一一二頁に「我邦の狐談の起原發達を明知すること能はず、余も屢々國史に明かなる大家に就て尋問したる事あるも、皆判然たる答を與ふるものなし、故に狐談の歷史は他日を待ちて說明することとなす」而して其談は全く支那傳來のものたるや疑を容れざるもの〻如し」とありますから。尤も支那の起源も仲々判然せぬのではあります。川柳雜誌が今頃武玉川を珍しがつてゐるなどと、惡たれ言を聞きますが、武玉川の生命が「今頃」で消滅してたまりますものか、柳多留を「今頃」も亦「十年後」も有難がつて研究を要すると同じです。殊に今度のは全釋です。柳壇に類がないのです。春からは二篇に着手致して置きます。お忙しいでしよう。蛭子涙人には曆日なし。暮だつて平氣です。十二月十二日（廣島宛）

▲**平岩司郎君**（京都）先生、一昨夜はお別れの挨拶もせず失禮いたしました。いつもに變らない先生の熱辯、京郎兄と歸へる道々感嘆し

隱し藝强制執行と云ふかたち　大阪　利生
常識があるばつかりの課長さん　同　生
齒並びが綺麗な朝の鏡です　松阪　沃里
逝く秋の町內一人減りにけり　同　同
おいそれと耕す土にあらざりき　鳥取　湖山
日めくりとお金仲よく消えて行き　同　同
酒抜きが無難ときまるピクニック　堺　慈雨來
木枯へペンキの色の褪せたまゝ　大阪　あや美
逢狀をふところにして眉を引き　同　翠峯
甦生のプランを立てゝ宵寢する　大和　同
子の親になつて冗談ちと覺え　同　四五磨
秋風に酒を冷まして去ぬ養子　同　同
小使が少し送れるだけの兄　大阪　同
女なり泣く子をあやすバスガール　同　黑天子
路傍の糞にも親しみを持ち　同　有爲郎
復活の相手は金の要る女　長野　同
自嘲など毎日のことあくびする　大阪　夜王
札束が俺の心を射かへした　同　山茶花
賣る本もこれきり師走のアスハルト　同　同
夜具深く情痴の夢の外は冬　同　同
ひやかせばエロのシーズンだとぬかし　同　同

てゐました、葉平兄の熱辯と共にあんなお話が三十四名しかと思ふと殘念で　大阪からわざ〳〵來て頂てのお話なのにすまなかつたと言ふ念で一杯です、而し乍らあの三十名程の人は何かきつと思ひ當る所があつたらうと信じてゐます、あの人々こそ十二月の忙しさの中から會費値上にもかゝわらず來てくれた本當の川柳雜誌愛好の人々だと思つて許して頂き度い、尙、萬歲、萬歲の後に熱血詩人麻生路郎師萬歲を興奮に乘つて忘れました不悪正月の句會では萬歲は僕が發言します（路郎窓）

▲**神尾三休君**（廣島）其後打絕へて御無沙汰致しました、不相變涙ぐましい御苦闘の御樣子は常に誌上で拜見乍陰敬意を表して居ります、小生は御存じの通り今春退官以來自分の土地に自分の家を建て恩給で家族を養ふ身分となりましたが一子の健康回復、果樹園創設の準備、建築の監督は隨分多忙な日が續いて川柳の方も辛ふじてお茶を濁す程度に止まり雜誌も柳界未曾有の醜態裡に幕になつてしもひました。

明年は創刊十周年の由、その尊い御業績は炳として後世に輝く事と思ひます、記念特輯號に對する拙作は丁度花童子君を訪問して三日間風雨にとぢこめくれた爲め遲延して甚だ恐縮いたして居ります　御都合で除外なされても宜敷い拙作ばかりです　乍末筆貴下のため新年の多幸を祷ります（路郎窓）

▼**廣江天痴人君**（松江）緣雨樣毎度有難うございます。昨十四日夜奈良井柳人君の好意によ

鶴子さんへ

宿命ぞ一ト月前は未知の人　　同
カタカナで來た妹の見舞狀　　聲ヶ池　煙太郎
父さんのお經が待てぬ膳につき　　同　憤兒
幸福な聲する家を見て通り　　神戸　霞川
嘘に倦み小鳥の聲が欲しき日よ　　同　白眉洞
夜遊びがとぼけて歸る大晦日　　松江　孤鶴
背の子のかるさを知つてふと淋し　　同　青米
風景の杜鏡へゆれてゐる　　大阪　史錄
養子のやうな淋しい醫者が來る　　同　寂光
約束の子へ嘘になる碁を閑み　　姫　坊茄子
分けまへをはつきり決めてからの判　　同
そよ風に土筆の影をみつけたり　　大阪
フロイドの說によればとからかはれ
貧しさはお叩頭で濟ます手を覺へ
此の頃は暗算で濟む賣上簿
友達としては動作がをかしい娘

看護の姉樣へ

有難う百の看護婦より強し
淋しくもひとりゐるから爭はず
泣いたとて十六燭は搖れもせで

大阪

り同君の宅で、私を共選の選者にして頂いたに對する祝賀句會を義士會に併せて開いてもらひました。今夜の句稿は奈良井君がお送りする筈ですからよろしく願上ます。その歸り(十二時すぎ頃)私の家の附近で松江署の非常線にひつかゝりました、之は其處から三町先の松江衛戍病院前の縣道でギヤング事件が起つた爲でした。私服達は皆私の顏を光榮にも知つてをりましたので何事もなく笑ひ話で別れましたが、他の人達は寒風の中で帶まで解かれて大分迷惑がつてゐました。同封の切手十二月號一部代として松本六郎君歟ル面改めから送付して來ました。三錢切手で御迷惑でしやうが御受納下さい。正月號は「十二部」お願ひします。正月から同人(支部の)組織を確立の豫定です。そうなると少し樂をさせて貰へて句作の時間が出來ると存じます。以上亂筆御許し下さい。十二月十三日夜(綠雨死)

▼**大谷五花村君**(福島縣)　拜啓每度川柳雜誌有り難く拜見仕り候へ共個人的には、一向御沙汰勝ちにて顏汗至極に候新春記念號に付いての御企畫贊成至極に存じ候へ共、仲々、書けず、漸く別紙書いて見候間に合はれば沒書結構に候、大雜誌としての川柳雜誌の前途な益祝福致し居り候、我々の方の東北川柳なぞは勿論川柳界の埋草に過ぎぬものに候故、大した事もないが、川柳雜誌の將來には多大の待望を持つて居るもに候間何卒しつかり御やり願上げ候。路郎先生よりは時日御便りを頂戴仕り居り候三太郎君と春早々には大阪

込上る血よたよりない神無月　石川　一

寝る俺と夢見る俺と置炬燵　同　凡

表彰の貞女に夜が訪れる　法泉子　同

額の裸婦陳情團へ重く居る　松江　同

決心は儲ける事にとりかゝり　大阪　たけを

逢ひたさは電話口にも立つて見る　金澤　同

ゲラ〳〵と笑ふ男の頼りなし　東京　たし路

淋病を手柄のやうに應酬し　大阪　同

獨りもの子供にばかりなつかれて　同　みを

人のとも思はず磨くマニキュアー　同　憲

傳染された時までわかる風邪をひき　大阪　坊

叱られた時だけ娘足袋をはき　同　兆

親方の利かぬ氣スコップ引つたくり　同　迷

荒みきつた中にも裾を押さへて　同　耕

百圓も出した蘭とは思はれず　盛中　朗

人間の底底ととが助け合ひ　大阪　多郎

御馳走の火鉢の炭にはぜられる　同　郎

遺言狀を書き初めにする父となり　同　三郎

一人居て廣い工場に暮迫る　同　同

血の枯れぬ程度に仕事あつて欲し　松江　靜一

眠い眼へ自分の鼻の先が見え　尼崎　虛白

誘はれて菊見にマスクかけてゆく　筥川　羅門

罵りつかれて高き煙突や　聲ケ池　定城

手眞似して谷間の人へ呼びかける　同　美朗

滿蒙へ行く氣になつて病んで居り　同　一平

出鱈目の歌にも藝妓三味を引き

訪問なし樣といつては居り候へ共、十二日以降に於て、十三か十四の間に參り得れば、駄目に候（下略）（紐育寫）

▼**木村高君**（佛府）拜啓向寒砌貴社益々御隆盛奉賀候　承れば來る新春御社十週年記念にて大册御計畫の由御目出度く存じ候　從つて御多忙の事と御推察申上候　就ては兄上事此度の就床は　非常に重体にて過る十一月中旬より　句作は勿論文通面會は一切謝絕仕居候今日。此頃の寒さには一進一退生死の別もつかずでも昨日は　少々氣分宜敷くと相見え候へばうわ言の如く「鶏の鳴く聲天地人と和し」さすがは好める道の新春題を思い浮ひし事ならんと　左に記し申候貴社御送附の雜誌は小生に於て出來得る限り販賣致し殘誌として代金御送附申上候へば御承知被下度末筆乍ら廳生樣に　御宜く御傳聲被下度。十二月十六日（紐寫）

▼**米村あん馬君**（松江）拜復歲末いよ〳〵御壯榮奉欣賀候　爾來の御厚配奉深謝候、さて數ならぬ小生へ寄稿之儀恐縮仕候、われらの貴誌創刊十年の御目出度さを祝福可申上　駄稿一氣に相認め別封を以て呈上仕置候　御一笑被下度併し一夜漬のマヅサ加減は眞平御海容願上候、先は御返事旁如斯に御座候、尙も年末貴輦の御筆硯の御多祥を祈り奉り候　敬具（鹿兒島寫）

▼**岩垣日本村君**（大阪）病中鉛筆お赦し下さい　御無沙汰いたして居ります、先達つてお目にかゝつてから又々發病ほんとに困つて居ります。先達ては御見舞狀　有り難ふござい

着物から服へ着換へて見る笑顔
頬骨が尖んがつてゐる冬が來た
掛取の旅で師走の髪を刈り
此の風にまた出るのかと母の聲
移り行く世相へあはれ人力車
樂書の色褪せたまゝ壁へ秋
職工の意志の堅さが響くなり
冷淡と言はれたくない羽織きる
買へぬ身に特價提供何んになる
淋しけりやこそ歌ふのさ朗らかに
すき燒の外は障子のなる寒さ
蝙蝠よ氣兼ねはよして晝にとべ
暮一つ持たぬ男の世話係
眞實はにがいものだぞ弟よ
生粹の大阪つ子で胃が弱し
晝休み一人離れて編んでゐる
金口の箱からバツト抜いて呉れ
天高し菊の匂ひは垣一重
大都會たつた一人が生きかねる
取入れの子は遠くからあやされる
インチキな福引があり喫茶店
子守する母の足許ダンスめき
疊の目荒き疲れとなる夕べ
肱ついて幻を追ふ影となり
ギヤング團リレーのやうに持つて逃げ
ふと女給弟のやうにさとしてみ

岸雨公平（同）
岩露洲巴（同）
松苔石冬生（大阪）
紫舟（岡山）
寄豆（堺）
曲（神戸）
正土筆司（松本）
方坊眠郎（姫島）
義馬骨（尼崎）
春光（大阪）
柳次久悟吞波（京都）
銀英子（大阪）
西佐津美（愛媛）
角丸雄人（同）
興詩路（兵庫）
徽柳子（松江）
生朗（大阪）

ました。淋しいのでほんとにうれしうございました。直ぐに御返事を書けなかつたものですから申譯ありません。今日は氣分も宜いので取敢えず認めました。讀み難いでしやうがお赦し下さいませ。

先達つて短册の御願ひをして置いて直ぐに短册お送りするか持參しやうと思つて居ましたのに寢て仕舞つたので、それ計りを思ひ出して仕樣が無いのです。どうとかして早く頂き度いと存じます。少し宜い氣分の時に持參いたします、その時はどうぞお書き下さい昨今どうも觀賞川柳家なる樣な氣分がして仕舞つて仕方がありません。日本村と云ふ號に變へたら、各方面から色々と端書や手紙を頂きました。日本村と云ふ名が餘り奇拔だつたのでしやう。自分でも類句があるやうに雅號にも同じ樣なのが有るので誰のにも觸れないつもりで付けて、ついこんな名になつて仕舞つたのでした。何れも好評です。

それからつれ〴〵に新年の端書の原稿を書いてゐるのですが、次の句川柳になつてゐませうか、どうぞお敎へ下さいませ。

又數句あるのは一句拔いて下さいますやう、どうぞお願ひいたします。

句會にも出たい〳〵と思ふのも心計りです

先達つて一寸清水町迄行きましたら、途中で「かほる」さんに遇ひました。お子達二人で表でゐられました、かほるさんにお子達一寸變に思ひました。かほるさんに酒之れも變です實際世の中は想像では行けないものと考へさせられました。奥樣初め一步樣へよろしく御傳へ下さいませ。（錦鳴宛）

藝者から朝日を一つまき上げる　愛媛　虹一

十一月夜業の倉の灯がもれる　今治　紫陽

立志傳伴天なども着たさうな　京都　柊波

良心がいろんな事を言はす酒　大阪　樓

同伴の席がないのが不足なり　愛媛　葉光

自力更生と頭も角刈りし　大阪　紫雲

祭客未知の家へも上り込み　愛媛　永樂

秋が來てポプラの高さ仰がれる　今治　世都

藝妓もう唄ひ疲れて煙草にし　大阪　曉象

女學校運動會　　童

能く走る子を見て父は眉顰め　堺　笛秀

弱點を擽られチツプ強ひらるゝ　大阪　一

あの女昼氣樓さへ喰ふだらう　同　みつる

初産へ夫いよ〳〵弱うなり　同　坊子

三回忌子を連れた姉世帶じみ　同　雷兒

たわむれの目とあきらめる夜のしゞま　松江　玉月

行手から美人が迫る細い道　岡山　海士雄

よし行かう俺に財布を渡しとけ　　富白花子

故郷の母から

一軒置いた隣へ嫁が來た知らせ　大阪　一騎

エプロンと二人で呑んだ大ジョッキ　同　詩郎

爭議ビラ半ば剝れた風の街　石川　いの助

絶對に飲まぬと云ひし酒なりき　同　北陽子

ビルデイング兒は三越にしてしまひ　大阪　無鬼

不器用にあける茶かすも男にて　大阪　一笑

子は親を眞似る大きな下駄を履き　不明　朴甫

# 武玉川初篇研究　是非

蛭子生

本研究完成のため、讀者諸氏の御意見はなにくれとなく御通報を期待する。

(129)　外科はその名も付ず別る、

紫痴郎＝皆樣は鍼醫との事に一致され候樣子、小生は少し考が違ひ申候。外科は本道（內科）とちがひ花柳病を扱ひ申候句の場合は性病殊に六〇六病と推し候。我々醫人は常に一家の平和を念頭に置き候へば、妻や子供の前で亭主の恥をさらけ出し、平和を亂し度くなきまゝアアそうか直きに治るから藥を取りにこい位の何んでもない風を裝つて、別れ歸つたと云ふ句に解し申候＝醫心があつて女房驚かす」と併せみると、仲々深かみあり候總じて句解は考過ると反れる事有之候。省二＝此句を幾度も口づさむでゐると、自ら意味が頭に浮ぶ氣がする。そして自說を棄て得ない。寧ろ紫痴郎君說がお考へ過ぎではないかとさへ思ふのだが東魚＝私は別に鍼醫者と云ふ說に贊同しなかつた筈だと思ふ（引越騷ぎで雜誌見當らず）＝負傷の手當などをしてやつたりするので、別にこれと病名をつける事もなく、立ち去るので充分だと思ふ。紫氏は花柳病だから家人の手前を憚

一頃の姉と變りし姉となり　池田　灯羊子
投票したら味方でなかつた　東京　白丘土
つまづいた石が生活の第一歩　大阪　湧水久
紋付で行けばタクシーうるさすぎ　同　一

活動小屋のハネ

下駄出して貰ふ間のアクビなり　同　小舟
秋の日を無口な兄と道を行き　同　のぶを
法律の要らない様に育つなり　同　峯
轉宅に母だけ涙ぐんで居る　京都　富美
父さんがおんぶして居る子守唄　松江　祥三
靜脈のむくれ立つたる日が暗し　高知　月
喧噪へ不吉な豫感胸を打ち　京都　鐵
頼み狀添へて弟置いて行く　大阪　吉
禿げて居て時代に遲れまいとする　神戸　阿南
出來た子の名は男なり貯金帳　大阪　鴻
酒呑めば淋しく思ふ夜のぜん　京都　柳
つまづいた線路にふつと寒けがし　兵庫　玲
朝の氣輕さ妻にキッスをなげて出る　大阪　樓
寂しさを友の便りにチト忘れ　宮崎　北
蹴を持つ兄へすまない靴をはき　兵庫　人
褒める氣の親に似て居るとは淋し　大阪　光
本心に觸れたと思ふ顔の色　同　麗
眞相も知らずにわるいものにする　不明　吉
貧しさの命うとまれがちにあり　長野　左
我が夜具の汚れて見える旅戻り　京都　右
幻に現實の汗追ひ付かず　鳥取　仙
出た序母はお彼岸參りする　高松　雞

灯羊子　池田
白丘土　東京
湧水久　大阪
一　同
小舟　同
のぶを　同
峯　同
富美　京都
祥三　松江
月　高知
鐵　京都
吉　大阪
阿南　京都
鴻　神戸
柳　大阪
玲　神戸
樓　大阪
北　京都
人　兵庫
光　大阪
麗　京都
吉　兵庫
左　大阪
右　宮崎
仙　兵庫
雞　大阪
喜代　同
美堂　大阪
繁　兵庫
友　大阪
鯉　大阪
園　同
小松　不明
白　長野
菊　京都
亭　鳥取
風　高松
佐郎
耕一
柳民夢

つて病名を言はぬのだとの説であるが、少し考過ぎの様に思はれる。昔も外科は花柳病を取扱つたらうが、内科でも扱つたらう。内服藥で治す方が多かつたのだから。外科の手に掛るようになるのは、隱くさうにもかくされない時分が多かつたであらう。

秋農屋＝東魚君説の如く昔は梅毒獅病等は本道にて治療したるものなれど、横根の如き準花柳病は外科醫の手にて切開したるものならむ。異説が出ても私は前解の如く名の知れぬ腫物の治療と思ふ。

(143) 高く聞へる闇の口上

眉斧目錄二篇に一字違ひで、「高く聞ゆる闇の口上」

(159) 六月キはたらく靈山の柚子

東魚＝四月から九月にかけての六ケ月。靈山の坊などに宿をかりる參詣者のもてなしに山の精進料理に、清新な氣の利いた取合せに、何にかと柚子が役立つ熟す頃なら柚味噌などになるし、青々してゐる頃には香を賞味せられると云ふやうな意味であらうとのヒントになつた句

靈山の若葉にからむ料理屑　ケイ五

があります。三方圖會に「柚子は多く山に」云々とありますから、直ぐ木から取つた柚子を靈山の坊などで料理に用ゐるのも適切らしく思ひ付が如何でせう。

# 肱・枕・艸・紙（一）

梅本塵山

是れは、清少納言が枕草紙に摹へるに非ず、亦、某氏の尤の雙紙に倣へるにも非ず。肱を曲げて枕となし、看果ぬ浮世の夢を看る暇に、予の生れたる昔より、七十餘歳の今に到るまで目に視耳に聽きたる、人情風俗の變遷と、自己一身に係る事どもを、思ひ出る儘に筆を採りて、順序も遂はず書き記すもの也。此中に僅一條なりとも、讀者を稗益することのあらば、僥倖なれど、人の手にも觸れず遺棄されて、紙魚の肚を膨らする料となるならむ。昭和壬申秋九月四日。

【一】

世の人情風俗は如何に變遷するとも、四恩のみは一日も忘る可からざるものと念ふ。

【二】

予は、文久二年九月廿七日、江戸の北隅谷中天王寺古門前町の商家に生れて、舊時代の江戸と新時代の東京に於ける、相異なる事物を見聞するは、一大幸福と謂ふ可きなり。新舊兩時代の人情風俗に、善きものと悪きものと有りて、昨は善しといへるも、今は悪しといふもの有り。されば世態の善悪美醜は、一概に斷定すべきものに非ず。

【三】

我邦に太陽暦が採用されてより、既に六十餘歳を經過せるが、月に大小あり日に閏あり。亦他にも不便の點有る故に早晩改正さるゝものならむが、予の如き老人は、太陰暦の方が可なりと思ふ。それは月毎の三日には新月が現はれ、十五日には滿月が現はれて、暦日と太陰の盈缺が一致する而已ならず。十二個月を、春夏秋冬の四時に區別し、廿四節に分ちてそれ〴〵の名稱を附せるは、實に詩的なる故なり。

【四】

江戸の昔の新年は、今の東京の新年よりも、氣象は麗かに、世間は賑はしく、幼心も自然に浮立ちて、陽春なりといふ事が深く感じられたり。元日には市中の商店一同に表戸を鎖し、家人は雜煮を祝ひて後、枕に就きて午睡をなし、子供のみ戸外に出て、紙鳶を揚げ羽子を突き、亦夜は大人も子供に打交りて、骨牌、雙六に興じたる故、市街を往來する人は稀にて、頗る靜肅なりしが、翌二日は各商店が一齊に初賣をなし、禮者の巷を右往左往するもあり、萬歳、鳥追、太神樂、猿

廻し其外の物貰も、此日より來りし故に昨日の靜穩にひきかへて、大いに殷賑を極めたり。三日より七日に到るまでは、二日に變る事無けれど、六日の宵に松飾を撤去する故に、新春の光景が、稍寂しく看えたるなり。十五日までは、萬歲も鳥追も來れば、なほ新年らしくはあれども、二十日正月を過れば、平素の光景と同樣にて、相異なること無かりし也。

【五】

昔の萬歲の扮裝は、今の萬歲と大に異りて、大紋の素袍を着て、風折烏帽子を被り、亦、才藏は裁着袴を穿きて、侍烏帽子を被りたり。此萬歲には二種ありて、一は大名、旗本の屋敷を顧主となし、每春定日に來る者。一は顧主といふもの無く、町々の家々に就いて、錢を乞ふ者なり。予の幼時の頃には、豫て懇意の二三の旗本屋敷より、今日は吉例の萬歲が來るからとて、屢々招かれて看に行きたるが、萬歲が來ると、直に座敷に通じ、屠蘇、雜煮を饗じて後、彼等に技を演じさせるので、醉に乘じて女子供を追廻はし看るに耐へざる惡巫山戲をなしたり、今の萬歲の扮裝は俗惡にて、其唱歌も昔のとは相遠するものの如し。

【六】

鳥追の扮裝は、實に目覺しきものにて勤番武士などが一見して、血を湧かせしも無理にあらず。彼女等は非人の妻亦は娘にて、平日は女太夫と稱して來る者なれども、新年には鳥追となりて來るもの也。孰れも顏に厚化粧をなし、一種の編笠を被り、緋鹿子と淺葱鹿子の、頬當といふものを、笠の紐に結び添へ、着衣も帶も木綿織なれど、皆新しきを用ひ、白足袋に吾妻下駄を穿きて來たり。「海上遙に看渡せば、云々」といふ唱歌を謳ひ三絃の調子は高く賑はしく、衆人の耳に快感を與へぬ。今より思ふに、其三絃の調子は二上りなりき。萬歲と鳥追とは、新春の景物の第一と謂ふ可きもの也。江戸時代に、風姿の最良きものは、男にては江鱶魚の鮨賣、女にては鳥追と併稱されたるが、女太夫も鳥追も、明治十四五年前後、全く其姿を隱したり。

【七】

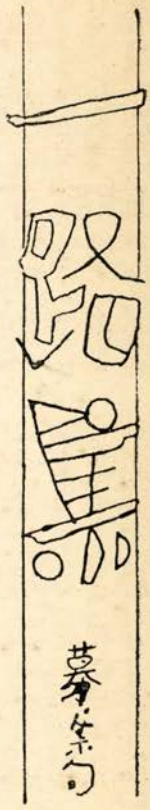
昔は、錢相場が日々に變動したれば、兩換屋より商店へ、今日は、金壹兩につき錢幾貫幾百文、と觸れ知らせて來る故其れに由りて、總ての商品を賣買取引なしたる也。

【八】

予は、二階住居を好めども、諸所に移轉して、一時平屋住居をしたる事有りしが、今は亦二階住居にて、此處をみづから死所と定む。

【九】

歌舞伎劇といふものを、予が初めて看たるは八歲の時にて、明治二年の正月、中村座の「鼠小紋菊重扇染」といふ狂言なりしが、先づ劇場の土間に入り、舞臺の方に目を遣ると、坂東龜藏といふ老優が、鼠小僧の義母お熊婆に扮して、或る男を絞殺する上、金財布を奪ひ取る場にて、幼心に不快を覺えたるが、其後屢々母に伴はれて、中村、市村兩座の狂言を看て、漸次に興味を覺ゆるやうに成りたり。九世市川團十郎と五世尾上菊五郎を明治梨園の二明星と稱するに論無けれど此れに五世坂東彦三郎を加へて、明治三名優と稱するが、至當なりと思ふ。中村宗十郎、中村芝翫、市川左團次、市川團藏の四優は、前の三優に亞ぐ上手なり、今の菊五郎、吉右衛門の二優は、頗に名人の城に到る可き者なるが、菊の優秀なる手腕に對して、吉の手腕は稍劣れり。




## 雪

雪にかこませて湧湯に妻と春　勝二
大阪は昨日の雪の踏めぬとこ　菊路
雪の下水の流れる音がする秋　彦
雪の朝やはり朝刊入れてある春光
音をみな集めし如く雪が降る　鐵吉

## 炭

炭俵たいて朝の暖を取り　白菊
待たすとも待つ身になるな炭ぐ　柳夢
桐火鉢切炭行儀よくいこり　方眠
炭斗に豆炭ばかりある寒さ　亦紅丸
一切を炭火にまかす二階借　三郎
極寒に母は氣長く炭を割り　同
一俵の炭持て餘す二階借　狂花
炭ついでさて用件に伯父這入り　朝四郎
すき鍋に邪魔する炭をつまみ上げ　松之助
炭ついですき燒しばし待つ煙草　鴉天
かき探す炭火へ夜は更けて居る　一笑

今晩は積るぞ明日は日曜日　四五磨
宿る氣へ雪はだん〳〵酷くなり　小松園

○選後感が七七頁にありますからお讀み下さい。

## 麻生葭乃選

微笑を含んで炭をつぐ話　北陽子
炭ついでにげる仲居の合言葉　耕民
急かちな氣持へ炭は火花散り　一笑
炭燒は人を忘れたやうに生き　ふみを
炭代がもめて隣家の炭を見せ　紫石
雜談の膽をつぶした炭の音　灯羊子
はね炭をことなく拾ふ男の掌　葉光
工事場の炭無造作になげ込まれ　悟久
炭籠をとり合つてゐるお通夜ぢゃ　明珠
福引へ炭引當てた賑かさ　山月
御用とは別の厚司で炭屋來る　雷兒




▼一九三三年の春を皆樣とともに迎へることは實に欣快に堪えません、今後も一層御鞭韃と御援助をお祈り致します。

▼十週年記念句會には東京から川上三太郎、塚越迷亭、福島縣から大谷五花村、函館から龜井花童子の諸氏が御出席の都合をつけられる由大いに期待致して居ります。尙各地の知名の川柳家が多數出席下される豫定です。

▼社友楊井二南君は、本號から同人に推薦することになりました。尙同君は本年から緊褌一番活躍されることになつてゐます。

▼社友吉田水車君は、同人に推薦されると同時に今里支部を新設されて幹事として活躍されることになりました。

▼萩の茶屋支部の創立句會が十一月廿六日夜萩の茶屋の壽屋で催されました。本社から路郎先生、琴人、山雨樓、かほる、里十九、

ワンタン屋炭の匂ひへ笛を吹き　華水
切炭が小さく鳴つてゐる旅心　木公
煉炭の火鉢が客を待つてゐる　青兒
わが腹のいたまぬ炭の使ひ用　西英子
切炭をつゝいて貸せと言はず　紅
炭つぎに何時來たのやら宿の朝　南棗
停電へ炭火が赤い四疊半　銀波
刎ね炭を探せば針が落ちてあり　憲坊
留守番の眠むさへ炭がはぜる也　裕
根氣よくついで緣談ことわる氣　たけを
炭をつぐ襟が淋しいすきま風　法泉子
きつちりと坐れば櫻炭がはね　柳次
炭積んで大家の威嚴みせてゐる　春光
盛裝をうろたへさして炭がはね　しとし
下宿代たまつて籠の炭わびし　紫雲
賣れぬ妓が炭をつぎたす長火鉢　柳風
又遲い夫へ炭をつぐばかり　勝二
炭をつぎ〳〵女將の意見　曉童
消炭の未練あるのがいぶり出し　禿山
ニグロかと思ふ炭屋が呼び出され　路城
炭取へ粉炭殘して夜が冷える　あや美
又しても炭火を埋めず立つ若さ　鯉友
晴れやかな座敷切炭一つ活け　四五磨
三度目の炭へ相談まだ出來ず　水車

感情を害し炭團をくづされる　吉左右
炭が消える頃小僧眠くなり　富士雄
嫁て三年炭の買ひ方使ひ方　茂代
炭つぐと言へば縮込む足の列　白花子
炭刎ねて妻は自分の罪にする　雀子郎
炭をつぐ火鉢に風の音を聞き　いの助
底冷を炭火で明す夜警團　詩郎
小炭まで細かく拾ふ老の母　愛子
ついだ炭消えても客はまだ去らず　良之佑
獨り者ざる一ぱいの炭を買ひ　永樂
辯解が出來ずも一つ炭をつぎ　秋彦
はがゆさに手摑みにて炭を出し　角丸
火を起す事が自慢で炭をつぎ　一柳
獨り者炭をつまんで持つて來る　興詩雄
轉寢の夢炭はしる音に覺め　世都象
珍客へまあ〳〵〳〵と炭をつぎ　一久
內職の炭消えたまゝ底冷える　富美三
炭を切るのも父親の手をかりて　祥月
顏と顏接近すると炭がはぜ　生朗
あの人を待つばかりなる炭をつぎ　沐天
火消つぼにエネルギーは押えられ　湖山
氣易さは炭ついでゆく見舞客　阿鴻
炭俵格安の値で露路へ來る　玲樓
特價炭買つて歸ればはぜるなり　寒月

---

新水、豆秋、水車の諸君と私が出席しました幹事は奥野禿山、木村銀波、兩君が大車輪で會の世話をされました。發展を祈ります。

▼盛ヶ池支部では川柳短册展を一月に二日間開催されます。

▼小松支部では幹事上野錦水、寺田白山坊の兩君で十二月十五日夜宮崎太思君居で久し振りで支部句會催されました。近く支部の機關誌「北陸川柳」を刊行されるとのこと。

先般本社主催の下に小松大火慰問川柳會を開催、慰問品を送つたことについて同地柳友諸兄から一々禮狀が參つております。

▼北濱支部がしばらく休んでゐましたが、今回元幹事の谷村稔君が復活して今後活躍されることになりました。

▼塚越迷亭氏は十月中旬より那須溫泉松川屋に滯在されてゐられます。

▼清水虛白君は十一月廿三日京都高尾へ紅葉狩に行かれました「紅葉坂連れたる人は追越され」虛白

▼松江支部の香緒樓君は島根縣商工水產課へ勤務される事になりました。

▼松江支部で十一月廿四日商用で行つた社友の大西八步君を圍んで一夜樂しい句會を開かれました。——社友會の噂もきゝました今夜は朗らかです。短册ありがたうございます。(天痴人)久しく失禮してゐます。皆元氣でございます。(柳人)「大橋の風に吹かれる旅鴉」八步の句、都之介は生れ變つてまさをになりました(まさを)松江更生句會は盛會でした。(祥月)

炭をつぐ手附き素人になり切つて　小松園
炭船の世帯コークス焚いてゐる　利生
石炭のむくろ煖爐の朝となり　白丘士
貰ひ子のミルクへ夜の炭をつぎ　竹雅
カン〳〵とたゝいて炭屋保證する　鐵吉
會計の目は炭へまで光つてゐ　虹一
一廻りして來て巡査炭をつぎ　寄舟
賽錢の音に社務所は炭をつぎ　新水
赤字から火鉢豆炭使はれる　玉兒
炭をつぐ妻へ齒磨粉をちらし　秋生
昇給の給仕嬉しく炭をつぎ　幸捐
食ふ事になつて男は炭をつぎ　慈雨來
引越せばもう來る炭の御用聞　胡蝶
はぜ炭よ髭のあたりを狙へかし　雀子郎
火箸にもかゝらぬ火だけ消さず寢る　沒食子
越して來てそこに炭屋見當たず　菊路
炭俵日に〳〵袖が邪魔になり　荷千
月末の小言へ炭屋釣錢がなし　春秋
(人)炭一俵が邪魔になる臺所　白峯
(地)表から炭屋の裏がすいて見え　今雨
天ぢ堅炭の赤き嬉しく服を脫ぎ　馬骨
(軸)燗瓶を射通す樫の火を見つゞ　霞乃
(同)奪ひ合いつゝ下手なが炭をつぎ　同

## 闇

約束へ誰へ向きの闇が來る　菊路
門將棋無闇に強い相手も來　孝男
慨世の士に世の中は闇にされ　要一
黒い物動けば闇に犬が吼え　富士雄
暗黒と松風袋の中に立つ　歩哨　富美三
暗闇へ男も足が早くなる　眞一
袋叩きにされる守衛の闇の土堤　作次郎
人生の闇にあんまが笛を吹き　西英子
飼猫へ共に鬆くりしてる闇　山月
手から手へ闇の鼓動は高まりぬ　黒天子

## 大島濤明選

捕手ふと闇で聞えしラブシーン　麗光
すれ違ふ闇にふり向く戀心　耕民
町の子の電燈消えて闇の色　泰典
闇の中背の兒が知つた流れ星　まさる
闇の方を向いた女の瞳に泪　義郎
闇の夜を煙草の火同志すれ違い　白菊
闇の中白足袋ふんだ口ごたへ　玄坊
闇の海蟹とる船がゐるばかり　方眠
兄さんと呼ばれて止る闇の中　星城
暗闇の牛に驚く登山隊　松之助

---

▼柳櫓寺川柳舍から　新川柳自選句「百三十三人集」を刊行されました。(定價金一圓)
▼同人岩本素人、社友片桐靈癡の兩君は、家事の都合で退社されました。捲土重來の日を期待してゐます。
▼社友木村晃卓君は重體の由　弟さんから知らして來ました。一日も早く全快を祈ります
▼松江の淞愛川柳會から「川柳叢雲」が近く創刊されます。
▼本號の編輯は、十週年記念新春特輯號であるので路郎先生、町二、山雨樓、琴人、杏三、亂耽、水車、鶴蜂、かほる、二南、豆秋、機見女の諸君と私とで致しました。

### 轉居

▼橫山勝二君(大阪府豐能郡豐中町新兎九二へ)▼太田朝陽君(福岡市屋形原中尾へ)

### 改號

▼裕一流君は流之助▼田久和法泉子君は白曜兒

### 前號正誤

六三頁「よれよれの洋服でアシヨなどいつてゐる」みつる
三八頁「懷手足で何かを描いてゐる」曉童
四七頁「兒の壽いた妻はお手を開いてる」紫石
六二頁「陶醉の窓に暮色の迫るなり」香峯
六三頁「わがまゝな姉に婚期が過ぎてゆく」香峯

慣れきつた手付で閨の家を開け　琴舟
爭つた妻の足音閨へ消え　骨馬
閨にたつ女に小首ひねらされ　南柳
暗閨に肩を並べた二人居る　詩朗
炭礦へ逃げて閨から閨へ縫ひ　暢山
舊曆を操つて夜道をあきらめる　紅
雨蛙閨をびつくりさせて行き　今雨
停電のまへ獨身は寢てしまひ　玉兒
緣近く虫の來てゐる庭の閨　菊路
敗慘の木の下閨に淡き夢　貴志子
何者か居る事にして閨をぬけ　華水
閨の夕べふつと君の手のあつき　靜太
銃劍の先が光たまゝの閨　白峯
おどかしてからの夜道がこわくなり　掉二
世をすねて閨の中なるものおゝ　慈雨來
閨の森無理な祈りを梟聞き　沒食子
夕閨に逝ける女の白い顏　ゆきう
閨を行く我が足音を無氣味がり　八步
村徑の閨を蝗がふりむかせ　天痴人
待ち呆け閨の潮鳴り怖う聞き　永樂
公園の閨に冷たい戀の果　竹雅
家出する決心へ宵閨迫まつて來　秋生
閨の中まだ明るみは見えてゐず　正路
停電の閨すつとんで燈が灯り失名　佐一郎
閨の路友と別れた步調なり　佐一郎
つと閨を八手に風の魄白い　朴甫
フト覺めて閨が怪談じみて來る　曉鳴子
老婆こそ〳〵流しの閨になれ　葉光
閨の夜に何か謀らむ合言葉　白花子
猫の眼があつて鼠の啼いた閨　春秋
坑道を行くカンテラに顏が搖れ　百丘土
とびとびに閨が出來てる新開地　水車
暗閨の莫吸ふ火に氣が散じ　虹一
暗閨を魂と共に步く　青豐
醉つ歸へれば〳〵に糸瓜が白い　鴉天
夜のとばり動物性が亂舞する　ことし
冷靜にかへれば閨の中に恥ぢ　明珠
閨に波白し空想の戰慄　鴉天
閨がもつものゝ深さをじと見る　卯助
人間の弱さを知つた閨の中　青兒
鐵窓の閨に思想の變り行く　四五磨
人生は脆し俎上の閨を行く　虎徹
此所ばかり閨が逃げてるジヤズの町　平八郎
御佛の薄閨にこそ尊とけれ　禿山
派手に派手に唄ひつゞけて閨の路　迷作

五　客

停電に佛壇ポツト浮び出し　南葉

評　明るい電燈に蠟燭の光りは消されて

---

十二月四日の支部聯合句會に寄贈を仰ぎました方々の御芳名を掲げこゝに厚くお禮申し上げます。（京阪神支部聯合句會幹事一同）

△梅田支部（ハンカチ十五枚）△永田里十九氏（酒一升詰三本）△萩の茶屋支部（シヤープペンシル四本、ノート十冊）△安西杏三氏（當用日記三冊）△守口支部（茶器一組）△天王寺支部（卷戸硯箱五個）△福田山雨樓氏（短冊十一）△松盛琴人氏（川柳手帖十冊）△麻生路郎氏（累卵の遊び五冊）△鶴町支部（タオル箱入八）△神戸支部（茶鐘入四ツ）△高橋かほる氏（飴瓶入三個）△京都支部（茶器一組）△塗青支部（硯石壹タオル箱入、切手盆各一ツ）△御池橋支部（組立本立五、ハーモニカ三打）△たまむし川柳社殿（たまむし一ケ年講讀券五、書棚一）△萬よし氏（カップ箱入一、風呂敷一、手拭十、エハガキ三）△姫田夕鐘氏（チック半打）△山川紫明氏（京講讀券三枚入九）△道田葉平氏（手帖十冊）△楊井二南氏（菓子器サック入一）△橋本緣雨氏（組立書架五個）△春元商店殿（石鹸百二十個）

## 本社基金醵金者

## 御芳名

醵金を拜受しました方の御芳名を錄し御厚志の程を深謝致します。

金拾圓也　谷脇素文殿

累計金　四百拾九圓七十錢也

その所在さへはつきりしなかつた佛檀か、停電の爲ハッと人の目に移つた光景、そのまゝ見る樣だ。

一線の光明は求人廣告柳夢

評　無職者の果敢ない望みを讀み得てゐる。

暗闇へ蛙ともかく一つ飛び勝二

評　闇の中の動きと蛙の動作との對照が面白い。

ルンペンの双手は空へ空へ向き　沐天

評　職へ、パンへ焦れる彼等の心裡を表現して遺憾ない。

闇を背に交番所の出入口　白瀧

評　常に公明であるべき官署にも天の自然は明と暗とを作る、何だか暗示的な皮肉だ。

## 失望

一杉選

◇

失望の顏が出てくる紹介所　菊路

失望をする程自信持つてゐず　狂花

失望をさせない話バーに寄り　寄舟

失望をかくした膝に默り勝ち　朝四郎

失望を慰めるには金も要り　悟久

失望は返事の封を切る早さ　山月

失望が怒となつて喧嘩する　柳風

失望のどん底神は祈られる　玉兒

失望の手紙も一度繰り擴げ紅

## 三光

一點の星を見付けた足取り　鐵吉

評　希望を捉へた歡びと、勇氣とは、四肢の動きにさえハッキリ現はれてくる氣持ちのいゝ句である。

思ひきり闇で躍つた律義者　孤鶴

評　世の律義者ほど優柔で、引込み思案で、馬鹿正直なものはない、それが人目や義理や、習慣から解放された暗の中では、ほんとうの自分を心のまゝに働かせるであらう。彼等にはそうした天地を與へねばならぬ。

坑の闇カンテラばかり神經質　有爲郎

評　着想も叙法も共に新しい、しかも思想的にこの句の仕立てられたことは現代川柳として嬉しい作である。

阿形一杉
生田翠夢　共選

失望へ輕い笑が向けられる　白花子

失望へ別な願ひが湧いてくる　利生

もう一分で約束の時間なり　鴉天

失望の言ふべきことがドラマじみ　葉光

失望の毬はどこまで轉び行く　富士雄

失望は今日の仕事へ疲れ切り　耕民

失望はすれどまだ〳〵若い父　白菊

失望のそれから口の惡い姉　竹雅

自決する氣持を月にそゝられる　白丘土



官報は開かれた儘面を伏せ　灯羊子
失望は泣くだけ泣かしといてくれ　洩食子
失望をしばらく酒へとかさんか　波樓
失望へ硝子の多い世間にて華水
失望の片頬青い冬の月　與詩雄
失望の通る道には明るすぎ　詩郎
失望の電話ためらふ聲になり　繁堂
夫望をするには先の長い年　湖山
（十客）失望へ女心の泣きくづれ（嚊子吹）　玲樓
（五客）失望へ相談瀾の物足らず　角丸
（五客）失望をしてはならカレンダー　北陽子
（五客）失望をしたと近道から歸り　今雨
（五客）樹生がきて踊つてゐる失望者　禿山
（人）失望をした顏はせず母とゐて　明珠
（地）初日の出去年のことは思はず　沐天
（天）返された履歷書皺もよつてゐず　法泉子
（韓）失望を思出にする年の功　一杉

## ◇　翠夢選

相性が悪いとあつさり母は言ひ　灯羊子
失望の毬はどこまで轉びゆく　富士雄
失望を斟酌してることはり狀　葉光
失望のうなぢかすめて風はすぎ　鴉天
失望へ別な願ひが湧いて來る　利生
女事務休みに逢へばハズを連れ　沐天
出直して來うかと歳を數へゐる　しとし
樂しんで國へ歸れば人の妻　菊路
待つてゐた父は何にも下げてなく　白花子
病院へ來て手遲れを聞かされる　玉兒
失望は母にやさしくなだめられ　柳風
失望の父へ家族は默り勝ち　角丸
失望を慰さめるには金が要り　悟久
失望の愚痴なんぼでも聞いて　寄舟
失望をする程自信持つて居ず　狂花
失望の見つめてゐたい夜の壁　珍樓
失望の兄鶏を飼ひ豚に慣れ　三郎
失望は手紙の返事やめて置き　青兒
失望の父へ無邪氣でしがみつき　胡蝶
失望の譯警察へ書いて死に　阿鴻
待望の就職口がまた外れ　世都象
成功の夢から舌打ちだけのこり　呑湖
失望に只川の面をながめて居　默想
失望の今日も陽暮れに歸つて來　南葉
失望を母子何度も讀んでゐる　春光
五人目の赤子またく女にて　ふみを
失望を邪慳に父は云つてのけ　四五磨
失望に母は玉子を割つてくれ　秋生
失望に歸へる朴齒が石を蹴り　路城
失望は神も佛も信じゐず　方眠

---

## 川柳「雪」の選者として

川村花菱

歌でも詩でも、俳句でも川柳でも、選者と云ふ場合には、一面そこに教育者を云ふやうな氣持がつきまとふ。現選手に對していくらOBがやつきになつて見ても、そのほとばしる生氣の上に於て到底かなふものでない。殊に私のやうに、川柳を愛する上に於ては昔も今も變らないが、絶えて久しく川柳にも遠ざかり、作句すら出來なくなつたものにどうして現代川柳の選者となる資格があらう。私は川柳雜誌を愛好するもの、一人であるが、熱心な諸君の投ぜられる川柳を選む事丈は心苦しく思ふのである。

路郎君は、何を認めて私に選者たるの光榮を與へられたか分らないが、恐らくその結果は投句者諸君に多大の失望を與へるに過ぎないと思ふ。

私は此度「雪」の數多い投句に對して、鑑賞者の立場として、只自分の好むところの句丈數句を選び出した。

けれど、正者に云へば、それすらもつまらないと思ふ句ばかりだつた。數百句の中にはルンペンと雪、子供と雪、隱居と雪、酒と

失望の朝茶碗まで冷えてゐる　孤鶴
失望の一足先を派手な聲　木公
失望の大きく坐るほこりあび　法泉子
失望をするには先の長い年　湖山
失望の電話ためらふ聲になり　繁堂
失望の片頬青い冬の月　與詩雄
見えぬ眼になつた男の肩の幅　今雨
正直に言へて失望してるなり　北陽子
失望もせずに根よく進み行き　柳夢
一すじの望みも絶えし涙なる　失名子
藝者を相手に失望醉つてゐる　祥月
溜息のとぎれるとこに白い壁　たけを
失望の影しよんぼりと灯のともり　紫雲
期待外れてデパートを出る　小松園
失望へ友一人減り二人減り　慈雨來
失望にしては大きな握り飯　白峯
失望はもう一本を吸ふと決め　一笑
失望の日から日記もついてゐず　憲坊
失望もさせず留守居をもてなされ　明珠
手にするは皆失望の手紙なり　波櫻
失望の友啄木の歌がすき　生朗
失望の大きく肩で息をする　永樂
急に發つ淋しい友の置手紙　馬骨
失望へ死ぬとは餘り身勝手な　禿山

失望の吾に豫感のおそろしき　詩郎
惡友は失望を連れ灯の街へ　六造
やけ酒を飲んでも失望未だ消えず　良之佑
失望へ鐵瓶の音まだ續き　幸捐
失望の眼に廣告の求人部　山月
灯の街に捨てた失望また戻り　耕民
失望のどん底酒の味も知り　白菊
失望へ今日も恩師が來てくれる　秋彦
慰さめに失望すなとは御無理なり　あや美
便箋に金の出來ぬをかきそへる　耕人
失望は泣くだけ泣かしといてくれ　沒食子
失望の瞳女給に見破られ　同
失望のそれから口の惡るい姉　竹雅
失望を輕く扱ふ相談所　同
失望はつい意氣地ない聲を出し　紅
新調の柄を皆にひやかされ　同
廊の灯ぬけて失望まだ歩き　勝二
家にゐてくれたが此處も札がたし　同
失望へ石は波紋を見せてゐる　銀波
失望をたゞ慰めるだけの妻　同

住吟

人生はこんなものかと手を見つゞ　白丘土
失望の日記に拔ける秋の髮　朝四郎
大蟻に小さい蟻が殺される　曉童

---

雪、雪だるまと朝日、雪つぶてと子供と云ふなものがかなり多かつた。そんな對照や寫生はいづれも古くから詠み古されたものばかりで、新人の感覺に感じられた雪そのものに生命と云ふ風なものは一つもなかつたと云つてもよい。私は、それに觸れる事を求めて居た。

どこやらに杭打つ音す大桶をころがす音す雪降りいづる

たしか啄木の歌に慥云ふのがあつた。私はこんなのが本當の雪の感じだといつも思つて居る。そこで川柳の事になるが、私は此頃川柳は、やつぱりユーモアを中心にしたものでなければいけないと思ひつゝある。されば又年がたつて考へが變るかも知れないが、川柳はおかしくなければ川柳ではないと思ふやうになつた。眞實味と云ふ事もたしかに力強い事だ。物の生命を把握してそれを表現すると云ふ事も意義のある事であるが、それよりももつと川柳には獨自の天地があるやうに考へて居る。

全く、いくら考へても可笑しくて一人で笑はずに居られないやうな川柳が、現代に極めてすくなくなつて居る事を淋しく思ふ。

此の考へが、全く諸君と相容れないもので

失望の聲だん〳〵とふるへて來　麗光
なぐさめの言葉もなくて默してゐる　茂代
失望のたゞ默々と土を踏み　紫石
失望へ妻の返事も他人めき　春秋
失望の靴びらを踏み糞を踏み　勝二
失望の酒亂の癖も憎めなく　吉左右
はる〴〵と來て失望の灯に拗ねる　水車
失望は最後の金策しぼられる　雷兒
失望の中に人生觀を知り虹一

失望へ子供の若さ信じきり　華水
秀逸（共鳴吟）
失望へ妻子眞面目にゐてくれる　鐵吉
失望の靴はきつちり揃へられ　柳次
失望へ妻は默つて酌いでくれ　秋彦
失望の友へ話題がみつからず　あや美
失望に君は若いと猪口をくれ　富美三
失望の淋しき通り石をけり　西英子


謹賀新年

和漢洋醫院

大阪市南區長堀橋一丁目
電話南四一八八番
醫學博士　長谷川成一
私宅　大阪市東區大手通一丁目


あるかも知れないが、私丈はさう思ふ。

本當に可笑しいはなしの出來る人も尠い し、本當に悲しいはなしの出來る人も尠い現代に、川柳丈が、本當の泣き笑ひの人生を歌ふ事が出來るのではないかと思ふ。

勝手な事を申上げてまことにすまない。

## 新誌友

（七年十二月廿六日まで）

「川柳雜誌」半年分　金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を提載します　何卒此際新讀者を勸誘下される樣　御願ひ申します。御紹介下される方には、「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますから」お申込み下さい。（綠雨）

西木朴甫（福田鶴峰）小寺久夫　松丘町二ノ根上柳村（上野錦水）加藤一笑、武田北人、古谷金喜、戸倉試司、松野えいを、宗蹄、森本貞夫、竹內勝利、阿部佐保蘭上村壽夫、奥六造、田口作次郎、辻詳平大橋龜男、武田紫陽、前田五健、勝山齋（本社事務所）括弧內は紹介者

# 千日前今昔史（四）

木村半文錢

## （6）金澤席の福圓一座

改良座は千日前を地場として、千日前らしい客を吸收せず、特異な客種をつくつたのに反し、千日前を地場として千日前らしいお客の中で、千日前の人氣を攫つて了つたのは金澤席の福圓一座だつた。

金澤席は現在の常盤座の前身で、面積もずつと狹小だつた。謂はゞ南側の小寶席は依然として昔乍らの隣り同志だが、北側の道路に面した一角には煎餅屋があつて、つまりその家の面積だけが表間口へ擴大した譯だ。奥行は恐らく昔乍らではあるまいが――それほどに到つてお廉末な、古めかしい小屋に過ぎなかつた。

道路即ち千日前の道路も、この金澤席を中心に、其の前は頗る狹隘な道幅に過ぎなく、例の大火前までは此の半町足らずの區間が迚も身動きの出來ない道路だつたことは恐らく讀者諸君も御記憶さるゝところであろう

この狹い道路に面して、金澤席は建てられてあつたのだが、人氣は素晴らしく此所に集中して、夜も晝も、下層階級の歡樂境地となつてゐた。

一座の座頭は市川福圓と言つて、小紅家市川市十郎の弟子だつたと思ふ。同じ小紅家の家號を稱してゐた。或は眞の藝名は市川市三郎ではなかつたかと思ふが、兎に角福圓の方が遙に名高かつたのだから、斯く稱しておく

この福圓は、藝の上に於ては特に取り立てる程の巧者ではなかつたのだが、其の人氣の絶大なるは驚嘆に値するものがあつたのだ。而も女流の仲間に大騷ぎをされたのだ。その女流と言つても安もの〻藝者でもなければ、女郎でもない。多くは女工だつたのは特筆に値すると思ふ。即ち紡績女工だの、織布の女工だのに最眞客が多く、其の金澤の棧敷や二階は、いつも此の一群で埋もれてゐたと言つても過當でない。其他、下女、乳母、後家、淫奔な娘、子守に到るまで福圓サマでなければ夜が明けなかつたのだ。

何うして斯くも女に斗り、人氣を博したのであるか、と言ふことは實に疑問である。其の舞臺上の演技にはさしての魅力もなかつたのだし、特に婦女子に覩迎されるほどの美男子でもなかつたのだ。されば一體どこが斯の種の人氣の中心になつたか、と言ふ事は解釋するに苦しんだが、後年、ある物識りの言ふところによると、彼即ち福圓は、最も御安直に女共の要求を容れた、といのが人氣を沸騰さしたのであらうと言つた。最も、この解釋は確に斯かる安芝居と、俳優生活の裏面とを穿つた觀察ではあらうが、然し、その一面には女工なるもの〻生活を直視する必要があつたのではあるまいか。

と言ふのは、都會へ狩り出されて來た田舍の純朴な娘達は、煙と埃との中で營々と稼ぐ一方、若い娘に有り勝な性的享樂の對象を、斯うした安芝居に索めなければならなかつたのだ。謂はゞ此の女工達の唯一の歡樂場は金澤席だつたのだ。福圓だつたのだ。

元來、昔の安芝居は淫風の低氣壓に滿ちてゐたものだ。俳優は給金が安くても、俗にいふ肩入客の爲に其の生活を支持されてゐた。俳優は男妾と何等偸るところがなかつたのだ。是は一座の座頭や人氣俳優は勿論、いかなる馬の足でも、斯の一種の不文律なる恩惠に浴してゐたのだ。上流の夫人や淑女達が不心得にも俳優を待合に喞へ込むのと等しく、是等の下層階級の女流にも、役者狂ひの淫蕩生活が世間並に展開したのだ。

女工連中が大擧して押し掛けたのも、實は此要求に應ずる對手が眼を光らし、網を張て待つてゐたからだ。女工は國許へ送る爲替を癈めて幾度その種の俳優の懷中をごつそりさしたか分らないのだ。勿論、女工の全てが期く墮落したのではない。若し女工の全てが

斯く墮落したのであれば、いくら精力絶倫な俳優達も遂に悲鳴を擧げたであらうことは察するに難くはない。

要は需給關係に於て適度の法則を守つたであらうことは、彼等俳優が久しい間金澤席の舞臺に登場してゐたのでも知り得やう。話が脫線して聊か恐縮だが、福圓の人氣は實に壓倒的だつた。

一と頃、活動寫眞が流行期に入つた時代に眼玉の松ちやんが全國的に人氣の中心となつたのは當時の奇蹟と見られたが、その氣違ひじみた人氣が過去の福圓の上にも存生した

筆者は福圓以外の俳優も知らず、福圓に就いても特殊の記憶がないが、千日前をぶらつく子供心にも、彼の人氣の素晴らしいのを傳へ聞いて、幾度か其の木戸を潜つたことを記憶する。

狂言の多くは、岩見重太郎とか宮本武藏とか天下茶屋の仇討とか、所謂講談畑の連續芝居で、見物は安つぽい涙を流したり、常套的な昂奮を感じて滿足してゐたのだ。筆者の現在に於ても印象の深いのは、見物の誰も彼もが福圓が出ると「小紅家」と口々に喚いて、手をたゝいてゐた光景と、も一つは、いかなる幕間に於ても、或は開演最中であつても、見物の過半數が握り飯をぱくつき、巻すしを頬張り、酒を飲み、肴を喰つてゐた、その凄じい場面だつた。子供心にも「よくアンナに喰えたものだ」と感心した程だつた。事實それ程に彼等は芝居を見、ものを食つて飽くところを知らなかつた。

福圓一座の人氣は可なり續いた。筆者の記憶するのが六七才頃からだと信ずるがそれ以前にも亘つてゐるのであらうから、恐らく十數年の間連續したものと見て不當ではあるまい。

斯の如く、千日前の寵兒だつた福圓一座も遂に沒落して其の行方も不明だが、後年新世界の大山舘に於て、目玉松之助の活動寫眞を映寫中、見物の一人が「あつ福圓がゐるゐる」と叫んだ時、筆者もスクリーンを凝視したがさて何れが福圓やら、既に發見することが出來なかつたほど、その記憶が淺くなつてゐた憶ふに、若し此の時の福圓が事實彼であつたならば恐らく旅興行に失敗した果を、ああして目玉一派の端役の中に殘骸を曝してゐたのであらうと考へる。


# 祝賀川柳大會

## —本誌創刊十週年—

本誌創刊十週年祝賀川柳大會は左の通り33年初頭の佳日を卜し恒例の本社新年句會と合併して開催致します。講演やら作句やら研究やらで劃期的有意義な而もなごやかな川柳大會の出現を期しております。幸ひ日曜の事ではあり、晝からの句會でもありますから奮つて御出席下さい。猶各地柳友諸兄姉の御來援をも特に歡迎いたします。（御遠方の方の御出席は豫め御通知願ひます）

日時　**昭和八年一月十五日**（日曜）**正午**

會場　道頓堀倶樂部（大阪市南區日本橋南詰東入ル天牛本店階上

兼題　「松過ぎ」　二句　路郎選

講演　砂塵を浴びて　麻生路郎

會費　五十錢　兼題及席題三光（但出席者に限る）に呈賞（鉛筆御持參）

記念品　記念品菓子及句會プリント記念號を呈す

記念寫眞撮影

**記念懇親宴**＝大會閉會後午後六時より＝會場未定　（會費　三　圓）

# 僕の手帖

麻生路郎

**傑物三太郎**

三太郎君が柳壇稀に見る傑物であることは今更私が云ふまでもなからう。その三太郎君が私宛に書いた書簡の中に東京の川柳家に知己なしと云つたのがシヤクに觸つたと見えて東京の一部の柳人が騒いでゐる。が併しそれだけでも三太郎君の眞意を摑んでゐない。なるほど知己なしと云はれても致し方があるまい。

三太郎君が現柳壇に對してどんな事を考へてゐるか。それが三太郎君にとつていゝ事か、悪るい事か、それが柳壇にとつていゝ事か悪るい事かすら感じないで、三太郎君の知己であるやうな顔をしてもコレ又致し方のないことである。

私は三太郎君が近時思ひ惱んでゐることを私自身の一つのなやみとしてゐる。

三太郎君が箇の生き方へ趨ることを豫知した時、私は畏友として欣ぶべきか、三太郎君の私的生活を減殺してもなほ三太郎君を柳壇共有物として彼を終始せしむべきかに思ひなやんで初秋の頃からひそかに憂懼を感じてゐるのである。

その後、新春の句會には來阪するといふ信書に接してゐたので私は一ト先づその時をまつて懇談したいと思つてゐる。その時あらためて、全柳人へ呼びかける私の語となるであらう。今はたゞ謎のやうなことを書くことさへ三太郎君のために憚れてゐる。

**威力**

チヤランといふ仔猫が死んだ。ストーンが行衛不明になつてから一ケ月も經過しないのに。

ストーンにしても、チヤランにしても、鼠を一度もとつたことはなかつたが、外國船から貰はれて來て私の家のペツトとなるに及んで猫としての威力は十二分に發揮してゐた。

私は彼等が、ホンの猫であるといふだけで、人間よりも鼠に對して強い威力を持つてゐるのを羨んだ。人間のサーベルが所謂ギヤングやテロリストに對してこの十分の一の威力さへ持合はさないことを善良なる國民の一人として同時に悲しんだ。

**ガレシヤの句を**

細川忠興の夫人を詠んだ句を御存じ

の方があれば御教示願ひたい。同時にソノ夫人の名が知りたい。夫人は明智光秀の次女で忠興に嫁した。伉儷端正な方であるが、その事蹟が相當深く研究されてゐるのにもかゝはらず、名を逸してゐるのは遺憾である。

クリスチヤンネームは、ガレシヤと呼ばれてゐた方であるからガレシヤとして詠まれた句があればなほさらありがたい。

なほ序と云つてはすまないが、日野富子、桂昌院、芭蕉の妾壽貞、天璋院などを詠んだ句があれば、これも御教示にあづかりたい。

**羅馬字砂手本**

畏敬する高尾亮雄君がタツタ一人の愛子元君を失つた。その追悼會が十一月の下旬に私たちこども黨に特に馴染の深い紅葉寺で營まれた。

當日私は前月號の編輯あと始末で徹夜したため、午後に至つてもなほ深い眠りについてゐて、いつも寢床で讀む新聞雜誌は勿論のこと、一葉のハガキすら手にしなかつた。イヤ私の枕許に運ばれてゐるのを少しも意識せずに、眠りつゞけてゐたのである。私がそれを手にして胸をうたれたのは既に〳〵案内の時間から遠く離れてゐた。

私はこどもに緣の薄い高尾君の心情を偲びながら一人靜に默禱をした。

私が元君を知つたのは六年の冬、朝日會館で開催された「朗らかな笑ひの夕」の歸途、多喜健一君の案内で新町の「與太呂」へ行つた時、同じ會へ出席した高尾君と再びそこで落合ひ、當時四つの丸々と太つた元氣な元君と近づきになつたのである。

優良兒として保證され健康そのものやうに見えてゐた元君が僅々一年の後に慈父を殘して幽明境を異にしようなどとは夢にも思へない。

私も昭和二年の三月に長男のロンドンを亡くした苦い經驗をもつてゐる。そして今なほ諦めかねて、折にふれ時にのぞんでは痴人の愚を繰返してゐるので、高尾君に會つても、おそらく悔みの言葉を發し得ないで、顏を見合はしてもそのことには一切觸れないで、アハハハ……と笑つて手を握るかも知れない。高尾君にはすまないが當分高尾君には會ひたくない。會へば一緒に泣きたくなるだらう。

手向けの句といふよりは高尾君の悲しみをホンの瞬間的にでも奪ふことが出來たらと思つて拙吟二句を君に贈ることにした。

その點句の拙さは問題ではあるまい

愛子を喪へる高尾兄に

晩酌へのばす子の手を偲ぶ君

君の子が書けば羅馬字砂手本

# 各地柳壇



＝いのちある句を創れ＝

## 京阪神支部　聯合忘年句會

十二月四日夜　於ちとせ倶樂部

何となふ氣忙はしい師走の四日、折からそぼ降る雨の中をも物ともせず、恒例の我社支部聯合忘年句會へ……滿堂これ熱心なる柳友諸士によつて早やくも川柳氣分横溢。各支部からの寄贈賞品は果して誰の手に？「句會プリント」と句會誌「雪」はいやが上にも作句熱を煽る。時に新水氏起ちて開會の挨拶を述べ次いで山雨樓氏句會プリント互選句の披講をなし、路郎師拍手裡に立つて明快なる一場の講演あり、「大晦日」の古句をかつて今を語り今に就き更に古句を味ふ等一片の漫語は遂に熱辯となり寸言よく眞理に至り講演を了し引續き兼題席題の披講、三光五客へ何れも呈賞其都度起る拍手萬雷一段と興趣を呼ぶ。萬よし氏の閉會の辭により、和やかに意義ある昭和七年を送る。時に十時二十分。（水車記）出席者芳名左の如し。

路郎先生、霞乃、禿山、八歩、鶴峰、琴人、水車、麗光、綠雨、白峯、變人、稔、往來、柳笑、葉平、豆秋、詩郎、三郎、卜居、鶴郎かほる、伊三郎、一笑、一騎、翠峰、紅、文蝶、えいを、司郎、春光、角丸、新水、閑子、千里、おさむ、明珠、岩石、雅幽、青兒、窮巢、觀月、喜由、遊歩、機見女、蝸牛、翠夢、みつる、省三、あや美、紫石、比古、方眠、北人、黒天子、小柳子、默平、勝二、明暗、羅仙、沒食子、雨少、銀波、鮎美、里十九、正夫、夕鐘、艸樂、小松園、鬼丸、友帆、春秋、華水、幸捐、吉左右、四五磨、才兒樓、二南、竹楓、卯三、聞路、柳次、松之助、山雨樓、愚陀、掉二、宏郎、夢裡、多郎、白柳子、呑吸、ゆきら、萬よし、冬光、樸太郎、いわを

兼題　大晦日　路郎選

女房の智慧で落付く大晦日　柳笑
ハッキリと言はればならぬ大晦日　竹楓
佛檀の灯を忘れたる大晦日　紅
大晦日髯剃る年となりにけり　愚陀
大晦日何處かで派手な錢の音　鬼丸
大晦日逢ふ舊友の落ちふれて　新水
大晦日日本はせまき國なりき　觀月
大晦日こんにやく煮へたらが煮へ　方眠
元日の準備の晝へ社が退ける　機見女
人間に飽いてしまつた大晦日　幸捐
大晦日風呂の中なる午前二時　山雨樓
大晦日娘買いたい物ばかり　四五磨
大晦日　父を眞似てる懷手　岩石
大晦日越した顔から風呂へ來る　沒食子
横町から來たか晦日の店へ羽根　默平
金屏風出て今年も終りなり　千里
大晦日あざける樣に時計鳴り　八歩
掛取へかるたの聲の聞えて來　えいを
大晦日よもやの處で名を呼ばれ　艸樂
頭痛膏の乾いたまんま大晦日　柳次
デコチンのデンボ氣にして大晦日　樸太郎
大晦日でも慌てない構へなり　水車
大晦日伊勢は初日を待つばかり　春光
大晦日家賃だけなと拂ひたい　紫石
大晦日他所の赤字の例を引き　萬よし
夜中から足袋買ひに出る大晦日　里十九
へそくりを一寸のぞいて大晦日　黒天字
大晦日障子は白く寢ころべり　鮎美
馴染甲斐ない散髪も大晦日　雨少
信用は有難いもの大晦日　吉左右

大晦日塵接間には花が無しかほる
大晦日好い職人へ金を貸し同
大晦日療養所も陽は沈み麗光
大晦日秒に鞭打つこゝちして卯三
大晦日座敷で下駄を子に履かせ同
大晦日病む子と妻の細き手と迷兆
大晦日何も知らない子の寝息同
大晦日なんとでも言へと言ふ態度同
大晦日一人かなと思ひ同
大晦日一茶を眞似て風呂に來る稔
大晦大いに呑む氣炭をつ晦ぎ同
小銀貨をみんな使つて大晦日鶴郎
ポマードの匂ひが過ぎる大晦日同
一つ宛話をつける大晦日明珠
大晦日かしてる人が來てくれず同
大晦日子供が嘘をついて吳れ二南
大晦日襷をはづす連れが出來同
百圓札が背虫合せも大晦日夕鐘
大晦日興奮をした金を借り同
大晦日佛に灯り人が居ず琴人
大晦日子は寢ることを忘れてゐみつる
大晦日喋舌り止まない子を叱り同
大晦日すつかり掃いて掃いて寢る同
(五客)歸らずに金を送つた大晦日春秋
(同)大晦日こんな日當り忘れられ明暗子
(同)思ひ切つた大あくびなり大晦日梓二
(同)大晦日火鉢の灰を少しすて變人
(同)大晦日次第で妾別れる氣翠峯
(人)大晦日六法全書まに合はず葉平
(地)大晦日走りごつこをして戻り新水

(天)大晦日上昇がかはいてゐ鮎美
(軸)大三十日地圖をひげ〻暮らし也路郎
(同)嫁ごの娘は娘で困る大三十日同
(同)大三十日子ども邪慳にっかはれ同
(同)君僕といふてゐられゐる大三十日同

兼題 出帆 綠雨選

出帆の見送りやはり女なり華水
出帆の濱で味噌汁匂ふなり雨少
出帆へもう廣告も讀み盡し かほる
甦生の意氣高らかに船は出る閑子
出帆へ健氣な母に成つて立ち柳笑
出帆の時間家出のもどかしく禿山
かた向いたまゝで出帆遠ざかり水車
出帆がせまり移民の子の熱よ沒食子
出帆へフト先祖の墓のこと鬼丸
出帆は双親の無事言づかり琴人
出帆を明日にひかへて空を見る鶴峯
警報が出て出帆は明日にのび方眠
出帆に出産の月を聞いておき夕鐘
さようなら船はアメリカ航路なり おさむ
船出にはたれもしんみりした氣持窮巢
日本を遠く離れた海の色葉平
船が出ると小遣帳を出す男路郎
出かせぎに出帆からが案じられ あや美
出帆へ何か云ひたくなつて來る らせん
出帆の山の形が變るなり觀月
出帆の帆一ぱいに朝の風卯三
出帆を勵ます肩が殖えてくる二南
出帆の氣笛へ堅く手を握り一笑
出帆へ水平線を見て戻り同
出帆へ海の青さを信じきり山雨樓
出帆へ兄弟五人揃ふなり同

(五客)君が代で送られてゐ御用船明珠
(同)出帆は故郷を捨て戀を捨て路郎
(同)送り人のない出帆は雲を見る柳笑
(同)出帆の跡には米の洗ひ汁稔
(同)出帆のどんな音へも目を瞑り明暗子
(人)移民船今や日本を離る也葉平
(地)日本語を使ひたがめの船出也路郎
(天)出帆へ妻の手子の手かすみゐ竹楓

兼題 巾着 琴人選

巾着になつて青雲の志小松園
巾着は今みぞおちの邊りなり喜由
巾着に吉のおみくじだけ殘り萬よし
巾着の紐前掛へ續くなり文蝶
巾着へ玉子の賣れた金を入れ觀月
巾着の紐へもつれた國訛り柳次
巾着の殘りを鳩に撒いて去に艸樂
巾着に哀れさを增す行倒れ稔
巾着の底に貧しい綿ぼこり鬼丸
有りそうな音の巾着バスを買ひ銀波
巾着の紐文錢をくくりつけ方眠
巾着を落して雪を喜しがり かほる
巾着の高を息子は知つてゐる呑吸
鮮人が出す巾着の妙なとこ一笑
佛壇の偶で巾着古くなり いわを
巾着は空にしてからほつとかれ鶴峯
巾着を出す母木魚遠く聞き麗光
片道を出すに巾着紐長し司郎
巾着にお守まるうよごれてゐ鮎美
巾着など見せて叔父さん醉ふてゐ變人
巾着を母に言はれてキック持ち伊三郎

祖父様の巾着祖母は持つて死に　青兒
近道をした巾着は買はずに來　新水
巾着を持つてるだけの祖母を連れ　華水
巾着の重さをれだる村祭　八歩
こし巾着が好く相に行く　葉平
巾着の重たき京は住い所　紅路郎
あのチビが巾着切りで名を知られ　竹楓
巾着は油斷を見せぬくゝり樣　黑天子
むづかつた子へ巾着の音をさせ　みつる
巾着がやつぱりいゝと祖母は持ち　水車
巾着は思ひ掛けない釣を出し　同
たしなめて置いて巾着ゆるめてゐる　幸捐
（五客）巾着が書いて貰つた貸家札　鍋牛
（同）巾着の出し合ふ錢に鐘が鳴り　路郎
（同）巾着と珠數と杖との日が永し　翠峰
（同）巾着をすられてゐる　友帆
（同）巾着に先代からの判があり　あや美
（人）紙芝居孫へ巾着ゆるめられ　華水
（地）ネオン燈巾着たしかに持つて居る　默平
（天）巾着は眼鏡の要らぬ祖母の作　琴人
（軸）巾着に紙幣入れて婆さん若い也

席題　短冊　萬よし選

短冊を書く側らに咳もなし　翠峯
短冊の前は眞面目な顏で立ち　明珠
短冊が逆向いてゐる悲しい日　同
短冊の天地に迷ふ筆を持ち　琴人
短冊を器用に持つて書きつぶし　同
碧梧桐をまねて短冊書きつぶし　葉平
短冊のまゝゆづられる下宿部屋　雅幽
短冊を集めて世相にはうとし　同
世辭云ふてから短冊の字に迷ひ　二南

短冊の文字から湧いた社會相　喜由
いける口短冊こんなとこにあり　路郎
短冊へベン字の癖がつき纏ひ　明暗
落花ふん〳〵として短冊へ散る　卯三
氣に入つた短冊かけて柿をむく　艸樂
短冊へためらひもせぬ鷺堂流　默平
短冊も突ッ込みにして競賣し　水車
短冊へ故人の癖字生きてゐる　春秋
短冊へ秋はいよ〳〵深くなり　觀月
（五客）短冊も朝の海となつて春　喜由
（同）勅題の短冊にかへ軸もかへ　沒食子
（同）短冊を乞へば隣と話してる　春秋
（同）短冊を賞て隱居へ世辭が出來　華水
（同）正眼に構へ短冊醉ふてゐる　豆秋
（人）ヒンの跡ある短冊の黑の色　柳次
（地）自己滿足といふ短冊を書いてゐる　おさむ
（天）短冊に我社の主張みせて春　沒食子

席題　齒醫者　翠

口臭に齒醫者思はず橫を向き　遊步
不足ない暮しと齒醫者見つけたり　鬼丸
いまに見ろと齒醫者注意を敢てする　葭乃
入齒してエロの話にかゝるなり　山雨樓
母親と來た子に齒醫者よく笑ひ　小柳子
今治水きかず齒醫者に行くときめ　銀波
麗人も信じ切つてる口を開け　華水
もうぬけたんです齒醫者笑つて居　觀月
デンチスト浮ぶ淚をものとせず　堯山
氣持よく齒醫者話を合はして居　いわを
金槌の音を齒醫者で聞いてゐる　かほる
痛そうな顏に齒醫者もなつて見せ　小松園
此の齒にも金を入れた齒醫者の眼　勝二

此樣に等と齒醫者の齒も汚れ　司郎
痛む齒はチカ〳〵しみる光る器具　竹楓
先生の口が大きい齒の療治　柳次
齒醫者だけ殘る暮れるビルデイング　水車
齒醫者らしいタイプに出來て獨り也　葉平
羊羹の事で齒醫者とうまが合ひ　明暗子
二三日通ふて金齒作らされ　友帆
齒醫者から時候見舞の來る齒なみ　一笑
臭い呼吸齒醫者はマスクかけなさる　沒食子
痛がつて齒醫者の世辭にさからはず　二南
云ふた日に治らぬ齒をば覗き込み　鶴郎
齒の痛む時は齒醫者を信頼し　窮巢
恐ろしく齒醫者及物をかちやつかせ　往來
風邪ひいた事にも齒醫者うがひさし　新水
先生はあつさり虫齒を片附る　松之助
八百屋から齒醫者へ寄つた御寮人　路郎
御近所の眼にぜいたくな齒の治療　機見女
後程に受承ると齒醫者云ひ　白峯
痛い目をさせて齒醫者は金になり　閑子
なすび齒を抜くには惜しいなと思ひ　紅
緣談も齒醫者二三は持ち合せ　春光
うづく齒へ齒醫者のメスの冷たい過ぎ　夢裡
落ちそうなだれを齒醫者ふいてくれ　掉二
往診の齒醫者は帳場まで歩き　同
齒醫者もうそろ〳〵金のお言添へる　夕鐘
この痛み齒醫者手がるう言つてのけ　白柳子
齒醫者から戻りハンカチ離さない　勝二
齒科に待つ女の帶はほどけそう　變人
齒のいたさとまり齒醫者と話こみ　同
齒醫者から戻りそつと飯を食ひ　往來
（五客）齒醫者まづ已れの口をあけてせ

（同）歯醫者今日爲替の記事へ目を通で　文蝶
（同）歯醫者また角帽で來る友を持ち　雨少
（同）泣きさうな顏は歯者は順に呼り　琴人
（同）嘘は言ふ口が歯醫者へ泣で來る　同
（人）歯醫者から廻る用事もこゝに出　八歩
（地）チト痛むやと歯醫者拔いちまひ　萬よし
（天）歯醫者まだ氣の長い事云ふてくれ　明珠
（軸）秋の雨歯醫者無沙汰の筆を持ち　翠夢

席題　草鞋　華水選

草鞋かたづけ久々を詫ぬ　いわを
露凱つて登る草鞋へ杖が鳴る　紳樂
思ひ出は草鞋で村を出た俺だ　鶴郎
托鉢にきのふの草鞋足に冷へ　窮巢
くたびれた草鞋へ今日もたそがる　翠夢
草鞋あむ側で學んだ俺なりし　岩石
草鞋履いた人に大阪まだ寢てゑ　雨少
エキストラ草鞋を履いたまゝで飯　豆秋
わらじで出る花道の板が鳴り　白柳子
裏口へ草鞋をぬいだ故郷の客　椋二
よい松があつて草鞋の賣れる茶屋　雅幽
嫁の幸がこわく草鞋の手がゆるみ　勝二
故郷を草鞋と共に捨てゝでる　往來
角哨の夢は草鞋の兄の事　沒食子
露踏んで草鞋新し旅鴉　三郎
凪に草鞋くる〳〵茶屋に舞ひ　閑子
照明の道へ草鞋は氣を配り　二南
信心の草鞋へ朝のしめりする　山雨樓
樂屋から庚申塚へ草鞋ばき　春秋
白い呼吸草鞋の父の健やかさ　卜居
峠茶屋草鞋のゆれてゐて淋し　おさむ
白い足見せて草鞋と足袋を脫ぎ　かほる

旅宿の素足草鞋に冬迫る　司郎
子の事を思ひ草鞋をはく寒さ　小柳子
すぐき賣草鞋が一ツアスファルト　紅
御近所へ賴んで草鞋はいて出る　明珠
落葉落葉草鞋をぬらす朝の露　葉平
國訛りまる出しで聞く草鞋連れ　琴人
渡舟草鞋の紐を結びかへ　鶴峯
國を出る草鞋へ朝の露しげき　翠夢
踏みしめた草鞋に土の香を感じ　同
暗い朝思ひ直してゐる草鞋　八歩
故郷へ着く朝の草鞋をはきかへる　同
（五客）秋が來てゐる大きな草鞋　白峯
（同）人の世の情けに今朝の草鞋ぬ　方眠
（同）義理堅い男の草鞋偶に脫ぎ　二南
（同）父さんの草鞋へ涙こぼるゝ子　白峯
（同）孝行で知られた若草鞋を編む　路郎
（人）草鞋作つて田舍は夜の音　竹楓
（地）吾が足とみつゝ草鞋の朝の呼吸　鮎美
（天）草鞋解き〳〵子のこと留守のこと　竹楓

席題　制服　鮎美選

制服の二人吉野で氣が揃ひ　かほる
制服にぞつか淋しき影を見る　みつる
制服をつけた寫眞が屆くなり　夕鐘
鴨川の水へ制服濡れてゐる　雅幽
制服で抱けばボタンなどいぢり　變人
制服の父へ背なの子手をかざし　柳笑
母のうるみへ制服がしやちこばり　卜居
制服の默つておれぬことがあり　柳次
制服の釦へ今日を歪めゐる　愚陀
制服のはるかの的を視つめつゝ　觀月
制服のなやみ詰所の笑ひ聲　山雨樓

卒業をして制服を親しみぬ　華水
髭があるので制服も生きてくる　閑子
制服のこよひ姿勢をくずすまい　鶴峰
制服の醉ふてる足が目立つなり　同
（五客）制服で訪ふ氣輕な叔父で居ゝ　吉左右
（同）シグナルの靄に驛手の動く影　竹楓
（同）制服を勵ます肩が揃ふてゐる　二南
（同）制服へ舊師手をおきなつかしゐ　吉左右
（同）制服のうれしき菊の花にふれ　柳次
（人）制服で來る寶塚母を連れ　白柳子
（地）制服で首卷をして釣に行き　かほる
（天）濕情と見ゆ制服の朝寒し　山雨樓
（軸）制服に冷たき雨がひかるなり　鮎美

席題　綻び　雅幽選

綻びた見せて行商戻つて來　里十九
綻びへ女中の肱の太すぎる　禿山
綻びをかくして子供小さうゐる　翠夢
綻びを直す間の置炬燵　友帆
綻びを縫ふ横顏へ醉ふてゐる　鮎美
綻びた承知で獨り者出掛け　小松園
綻びへ母はうれしい叱り樣　掉二
反抗を示して着物綻ばし　失名
綻びた袖に戀あり寒むさあり　卜居
綻びのついでに二男叱られる　聞路
綻びへ器用な人で納まりぬ　黑天子
又朝になつて綻び思ひ出し　方眠
綻びへ神經質になつてゐる　觀月
愼重に綻びを縫ふ初年兵　春光
綻びの縫ふ間をお人好にされ　吉左右
漂泊の三年になる綻びよ　琴人
綻びを縫ふ手が細い多產性　同

綻びを頼む器用な友を持ち　北人
綻びへ服屋は下手な事にされ　同
おとなしくして綻びを氣付かれる　柳笑
問ひ詰める綻びへ血が附いてゐる　同
(五客)綻びの案外綻びすぎてゐる　おさむ
(同)綻びに氣づいてからの歩きやう　掉二
(同)四五人に言はれ綻び腹が立ち　明暗子
(同)綻びを母は手荒に脫がせたり　琴人
(同)綻びはまだそのまゝの輕い意地　小松園
(人)綻びを待つてる炬燵寢てしまひ　柳次
(地)綻びをステテコ踊る型で待ち　聞路
(天)肩張つて綻び縫はす男の子　萬よし

席題　伊達卷　新

伊達卷を半分卷いて思ひごと　水選
伊達卷をパーセンテージの高き伊達卷　山雨樓
伊達卷になるまで子供泣かしとき　葉平
伊達卷になれば女のひよろ高し　松之助
伊達卷が半身見える段梯子　琴人
伊達卷へ派手に明けたる雪の朝　豆秋
表情もなく伊達卷の派手な柄　竹楓
寢顏見て伊達卷力なくすべり　四五磨
伊達卷で出ると悲しい事を聞き　文蝶
伊達卷の汚れ年子が二三人　明珠
伊達卷のゆるみ落葉を踏んでゐる　路郎
伊達卷へ伊達卷が來てなぐさめる　幸捐
伊達卷へ朝の小說惜しく切れ　雅幽
揚げ髮へ伊達卷ちよつととけか、　明暗子
伊達卷の返事も輕くひげをそり　翠夢
待ちぼうけとは知らぬ伊達卷　吉左右
伊達卷の帶にかくれて齡を增し　翠夢
(同)思ひ出す心に妻のデスマスク　青兒
(同)それを敢てする七男とて二月　友帆

袖口で伊達卷茶瓶つかんで居　方眠
美しい素足伊達卷たちあがり　同
伊達卷のまゝの日記に親しまれ　同
伊達卷の一つへ若い妻が居る　華水
(五客)伊達卷は昔を思ひ出すばかり　同
(同)伊達卷の赤さへ俺のおちつかず　柳笑
(同)伊達卷になつても別の意地を持ち　夕鐘
(同)弟が來て伊達卷の端をふみ　萬よし
(同)男性を呪ひ伊達卷痩せてゐる　鮎美
(人)伊達卷をしめ直してる京言葉　沒食子
地)伊達卷へこうしておれぬ爪を噛み　柳笑
(天)伊達卷の嘘は候文に出來　柳次
(軸)伊達卷の死んでも見澁が見れ　二南
　　新水

雜吟　清記互選

(十二點)退屈な火鉢へ爪の伸びてる　方眠
(十點)言ひ馴れた言葉に感じる日　公平
(九點)夜の膳寒く秋刀魚を裏返し　夢裡
(同)夕闇へ勝氣をみせた洗ひ物　山雨樓
(同)思ひ出に歌へばみんな笑ふ　秋無草
(同)減配はすれど嚴然たるビルよ　麗光
(同)今更に見馴れた顏もお元日　素月
(七點)相性を言ふては居れぬ義理　松雨
(同)交際を賞められ貯金ないのな　彩秋
(同)足すべらせて秋が身に滲む　一笑
(同)秋の土顏に乾きて晝餉する　あや美
(六點)都合で來たのと無理で來た　町二
(同)父になり母になりたる明の春　春秋
(同)凶作の故縮に悲しいことばかり　北人
(五點)叔父さんは意見もまぜてくだされ　巻巴
(同)思ひ出す心に妻のデスマスク　九文錢
(同)それを敢てする七男とて二月　耕之介
　　葉平

(同)この耳を疑ふほどのことを聞き　夕鐘
(同)父親の涙もろさを寂しめり　眞弓
(四點)慌た兒轉ぶも泣かす紙芝居　禿山
(同)久々に故郷のものみなつゝ見え　棹二
(同)禁煙の文字を遠目に煙を吹き　山抱子

(三點以下省略)

帶　清記互選

(十五點)寢ず子の帶か石が一つ落ち　麗光
(十一點)帶かたくかたく二十の思ひごと　青踏
九點)帶ながくながく今宵も疲れ　鮎美
(同)角帶が似合ひ故郷に母がゐる　公平
(八點)娶見へ帶をなでたり叩いたり　閑子
(七點)丸帶の價も知らず嫁に行き　詩郎
(同)家政婦の過去を思はす帶の柄　巻巴
(六點)初戀は乳房の上まで帶を締め　山雨樓
(五點)帶くけて大安の日が近くなり　彩秋
(同)帶といてまだ〳〵寢ない夜の机　鳥語
(同)十五六帶の恰好付いてくる　山抱子
(同)里にやる子供の帶をしめなほし　鬼丸
(同)帶が這ふ秋の疊のつめたかり　葉平
(四點)木枯へきりゝと締める帶さなし　町二
(同)待ち呆けて帶も直す湯がたぎり　秋無草
(同)寂しさに〳〵帶しめ直し　夢裡
(同)街角を曲つた帶の派出な柄　華水
(同)帶だらりだらり鳴川の夕　里十九

(三點以下省略)

川柳雜誌社　**加茂川句會**（京都）　司　郎　報

十二月十一日、七ヶ月振りに路郎師の熱辯に接し嬉び多き一夜を送る御旅支部との合併

を嬉んで臭れた紫明氏忙しい中を御出席下さつた松窓氏福造氏其他二十數名の京都側作家や大阪からの諸氏に心から御禮を申し上げる。

兼題　國訛り　路郎選

丸出しの訛りで母の動き過ぎ　紫明
意氣地なくお國訛をかくしてる　波郎
タコをつる伍長も同じ國訛り　白扇
久し振り訛り同志の猪口を受け　無折
京言葉口説く氣にさへさせられる　みつる
失業に歸る土地あり國訛り　紀太
國訛りの二人しつかとかたき組み　富美三
京訛り小學校をきいて見る　翠夢
妓の訛り聞けば遙かな北の國　冠岐
國訛り嘘があるとは思はれず　清堂
東京で寂しくなつた出雲辯　天痴人
堂々たる議論のはしにある訛り　迷兆
國訛り息子覺える程になり　福造
國訛りかたまつて行くアスファルト　晃洲
註釋の要る方言に笑ひ轉け　同
（人）國訛り都會の土となるつもり　泥鈴
（地）訛りもなくて本を讀む話し樣　あや美
（天）京言葉聞きかへされて旅に居る　ゆきら
（軸）必要なとこしか言はぬ國訛り　路郎

兼題　十二月　翠夢選

運命線みつめて暮れる十二月　白扇
十二月今更金歯の事を言ふ　變人
十二月このハードルへ眼をつむり　木公
十二月お逢ひ出來ない文が來る　波樓
逢ふ餘裕だけはあります十二月　みつる
十二月同じ便りが國からも　迷兆
遊んでるとチト言ひにくい十二月　ゆきら
愚痴を言ふ妻に理のある十二月　圓角
あわたゞ金を追ひ師走の街へ出る　六祥
十二月盜電をして活氣めき　天痴人
か細い手撫て手撫ぜても十二月　司郎
逢引の街は歲暮の灯の光　紀太
十二月閉ざした家と向ひ同志　清堂
十二月塲末の戀を忘れたり　泥鈴
十二月他人の財布の音をきゝ　清月
邪魔臭い樣に別れた十二月　紫明
十二月冷たい錢を手に感じ　同
この金で醉つてはならぬ十二月　路郎
十二月自分のうちへよりつかず　同
（人）十二月自分の首と人の首　福造
（地）十錢の足袋を投げ出す十二月　路郎
（天）世帶して成程と言ふ十二月　清月
（軸）妻よ子よ十二月の父と知れ　翠夢

兼題　後　紫明選

入れ違ひだつたと聞いて淋しい日　秋生
心配な後を通る笑ひ聲　清月
追つて來る聲に氣の付く忘れ物　晃洲
後ろ向く舞妓に惚れた京の夜　あや美
後押しの子に正月の日の遠き　迷兆
振りかへればつゝ話しながら來る　圓角
飴ねぶらして後刻參上　福造
一層にくたぶれてゐる尾行　清堂
眼頭の熱さへ後ろ見らるゝ　木公
言ひ切つた後濁んでる黒眼勝　同
後ろから母の聲する娘の外出　啓秀
後に人の瞳を強く感ずる日のあと　同
（同）うしろ姿が妻に似るひと　泥鈴
（同）よもだゞ別れ來し夜のネオン燈　欸乃
（同）銅像の後ろ淋しい冬が觸れ　福造
（同）後うにも眼がゆく樣に親は言ひ　清月
（同）感激の後姿へ霧が立ち　同
（人）御辭儀した尻が何かにつき當り　泥鈴
（地）後から呼ぶ惡友へ妻とゐる　泥鈴
（天）みじめなる俺の後ろを誰が來る　白扇
（軸）うしろ向く父のうなじも佛性　紫明

兼題　骨　松窓選

骨抱いて歸る海路の靜かなり　佐一郎
骨を粉にして働く夜の酒なりし　迷兆
ふとふれた女給の腰に骨があり　翠夢
さかなの骨がしやくにさわる日　あや美
頰骨へ今の苦勞をなぜて見る　悟久
食用蛙のま白い骨よ　葉平
トヨツコを押す頰骨が尖つて居　紫明
骨を貰つた仔猫おとなしい　變人
ホヽ骨の高さ氷雨のしと〳〵と　白扇
魚の骨ぬかされて猪口待えている　秋生
清骨持つ父の兩手も震へ勝ち　阿鴻
（佳）骨張つた顏が手が撫取を語る　冠岐
妻をやく　葉平
（佳）たつたこれ丈のまつ白い骨　同
（同）氷雨する夜なり骨うづく夜也　葉平

選

席題　蟲

照れば照れ蟲れば蟲れ疲れ切り　あや美
姿見へ蟲る吐息の二十過ぎ　白扇
くもる鏡よひげそる夕べよ　紀太
桐の花落ちし蟲る朝　佐一郎

憂鬱へアパートの窓曇る晝　悟久
警報へ歸る魚船に曇る海　同
皆んなうつ向ひて歩く日の曇る街　欸乃
雪曇り離緣話も凍る夜　同
(佳)病人に曇つた窓があいてゐる　清堂
(同)昏づけをゆるしぬ曇る宵な　あや美
(同)曇る心よ沼へ石すつ　司郎
(軸)くもる空故なき泪おつ夕べ　葉平
席題　珍　物　圓　角選
珍品に徹夜徹夜がつゞく也　葉平
珍品といふ意識かすかにふるえる　六祥
珍品にすれば小さき物なるぞ　麗光
珍物で酒が廻つた泊り客　泥鈴
珍物へ掌受ける順を待ち　無折
涕かんで珍物見せてもらふなり　秋生
珍物をあげるに思案要る隣　阿鴻
十二月いつも國からくる珍味　欸乃
箱にまで入れて珍らない寶物　あやみ
珍品の値を問へばたゞ笑つてゐ　ゆきら
珍品の謎默々と鯱こばり　木公
珍物を集めて狹い座敷にゐ　清堂
珍物を内にもあると言ず見る　佐二郎
ほめられる度に珍物垢が殖え　清月
珍物は顔が揃つてから開き　同
珍物と笑へる父の手の包み　波樓
珍物へさてどう書かうお禮狀　同
珍物をもぶつてチト持てあまし　紀太
珍物屋お妾ハンが買ひに來る　同
珍品へ自分の慾は外にあり　紫明
珍物へ心と添わぬ口を切り　同
(人)珍物へ箸を持つ手の多すぎて　迷兆
(地)凡人の眼に珍物と思はれず　清堂
(天)ふと珍品に目がくらみたり　葉平
(軸)棺を蓋ふても珍品の疵があり　圓角

## 御旅吟社京都吟行（大阪）

川柳雜誌社　北川あや美報

十二月十一日、歲末の例會を京都支部と合同して開催すべくお午頃より紀太氏宅に集合し、路郎師を押立てゝ途中岩清水神社に參拜、正六時半加茂川句會々場へ乘り込み我が御旅の意氣を京都柳界に知らしめた、句會終了後にぴき料亭にて京都進出記行吟の選出披講を路郎師に願つた。

ケーブルを排斥をした汗をかき　翠夢
默つて山はくるゝ落日　葉平
(佳)必要な金もあらうに淀の馬　紀太
石段の一つ一つに樫の實つぶれ　圓角
鮮人が居ると見えたり干してあり　同
背をむけて休めといはぬ茶店の娘　同
月までが俺と一緒に京へ行く　あや美
茶屋町の水のにごりに目を見はり　同

## 晝の集ひ（大阪）

十一月二十一日　於里十九居

水谷鮎美報

題　みかん

所在なさかんむく手を見つめられ　水車
病上りみかんの筋へ氣が疲れ　同
みかんころ〳〵はらばひの兒のうら　鮎美
みかんむきながら時計あはしてる　同
題　火　鉢
交涉は火鉢なんかへ眼もくれず　水車
大掃除火鉢はすれた姿なり　同
支那火鉢すこし飽かれて店に出し　同
まごゝろの火鉢の火だれ消えゐる　鮎美
火だれをもらふ火鉢が寒むそうな　同

雲堂めぐりーその七ー

## 六波羅密寺（十一月二十二日）

道しるべ街の中なり六波羅密寺　鮎美
革堂　革堂で椿をもつて遊ぶ子よ　鮎美
六角堂　石疊六角堂は靜かなり　鮎美
六角堂鳩もひかりに見ゆるなり　同
觀音寺　御詠歌を唱へ靜かな觀音寺　鮎美
秋晴れの橋を渡れば觀音寺　同
定紋の湯呑みを納めた觀音寺　同
清水寺　椽下の音羽の瀧の晝暗く　鮎美
紅葉の舞臺の眞下のさんざめき　同

## 大地吟社（島根）

川柳雜誌社

十一月十二日夜　於十四取倶樂部

尼　絲之助報

雜題　苦　勞　絲之助選

苦勞して姉はさみしく死んでゆき　美登利草
苦勞した人だけの持つ慈愛の目　設子
おし隱す苦勞笑ひのさびしさよ　夢人
苦勞とは別に女房又孕み　水煙
苦勞して家出する子に育て上げ　汀雨
苦勞性嗤ふ女と夜を歩む　桂之助
勞苦して苦勞して父は死んでゆき　鴉水

笑ってはすまない母の苦労性　鶴天
世の苦労額に深く辻藝人　與詩雲
酒足りて佗しき父となる苦労　羅門
教會でも救はれなかつた戀でした　石楠
(人)自潮してみても苦労は苦労なり　夢人
(人)その苦労遂に知らず父は逝き　鶴天
(地)まざ〳〵と苦労やつれの母の鏡　鶴水
(天)苦労した姿眼鏡を拭きなれる　桂之助

同　歯　田鶴緒選

歯の痛み仁丹なども噛んでみる　美登利草
妻はセメントで我慢してゐますよ　石楠
痛む歯へこわ〳〵舌をあてゝみる　鶴天
ルンペンの子に虫歯などあるでなし　夢星
情熱がよろめく白い歯と醫　與詩雄
歯が痛む顔合槌が合ひかれて　綠之助
金歯うれしき鬼灯が鳴つてゐる　桂之助
(人)弟は漫畫の型で歯を磨き　田鶴緒
(地)歯が二つニョッキと生えて愛兒　羅門
(天)漬物を今噛む音も總入歯　綠之助

席題　膝　與詩雄選

膝詰の話もいつか破られて　紫光
裾は膝をくづさず聞いてゐる　芳延
歸るなり膝に抱きとる親心　美登利草
おゝ孫と云はぬばかりに膝の上　夢星
膝頭抱いて孤獨の秋を知る　夢人
お父さんは膝から下はゴムなのよ　石楠
膝組んでみても話題のない晩だ　綠之助
膝に子を抱いて舊友父らしく　比佐緒
膝枕外は出湯の音に更け　田鶴緒
(人)ごもや〳〵玩具まで膝に眠れ兒　羅門
(地)運命が見えすいてゐる膝枕　綠之助
(天)膝組めば膝へ眞晝の煤が降る　羅門

同　微　笑　綠之助選

微笑んで見たりなどして自惚れる　夢人
幸福―微笑を交し合つた頃　田鶴緒
出征の父を見送る乳兒の微笑　紫光
微笑んだまゝで女給次の椅子　夢星
優勝の刹那の微笑キャッチされ　比佐緒
全甲へ子は微笑を隱さず　美登利草
彼女の微笑よ今日の朗かさ　雅月
微笑めばいゝお父さんである將軍　與詩雄
微笑みへ情痴の窓が疲れてる　羅門
(人)微笑んでみても一人だ落葉道　夢人
(地)若き日の感激微笑みともなつて　比佐緒
(天)日めくりをめくる思ひの微笑　羅門

生　命　綠之助選

二等兵生命線の一人にて　與詩雄
三面に若き生命が二つ消へ　綠之助
生命にさゝやく朝と知る朝よ　美登利草
(佳)純情を生命とし生きがたし　綠之助
(同)かなしきいのちが戀なき日々　羅門

同　炭　互　選

炭を燒く煙り長閑な歌が洩れ　雅月
炭竈が轉んだゝけに女笑ひこけ　紫光
これのみが一家の糧だ炭を燒き　夢人
愛人は炭火に頬ほてらして　石楠
賣れぬ妓が炭ついでゐる長火鉢　同
あの方もう來る時分と炭をつぎ　比佐緒
炭火はれたりうれしい二人です　羅門
炭火がしきりに飛ぶ破戀の日　田鶴緒
消し炭をまぜてつまらぬ一人者　綠之助

川柳雜誌社　**鶴町句會**（大阪）　於白峯居　妹尾變八報

十一月十五日

風　雅　選

風強く表札のぞく集金人　小柳子
表札の手前無心が言へぬなり　公子
表札へ埃をためて住みなれる　紅
國の人表札見たと訪れて來　白峯
表札の太さも住友吉右衛門　夕鐘
表札がくすぼりきつた住心地　同鐘
表札の寓ゐすゝけた儘で居る　一笑
表札にまでも武勳はのびて居る　同
たしかめて居る表札にたそがれて　變人
表札に今大膽な顏で立ち　同
(軸)表札の横に目白の籠をかけ　雅幽

席題　奉　迎　紅　選

奉迎へ新調したる國旗竿　一笑
奉迎へ八百屋は店を閉ぢて居る　雅幽
奉迎へ巡査感激してるなり　白峯
よしやブロレタリヤとても赤子　夕鐘
奉迎の朝をキレイに歯をみがき　變人
(佳)奉迎へ列ぶ生徒のひざ頭　小柳子
(同)奉迎の父最敬禮を忘れてゐ　白峰
(同)奉迎へ我老人をいたわりて　雅幽
(軸)奉迎へ重なり合ふて曲り角　紅

席題　冗　談　小柳子選

冗談を隅の方からとがめられ　變人
冗談へひとりはきつう腹を立て　夕鐘
冗談も云へず淋しく二人居る　公子
冗談が本氣になつたお縫ッ娘　雅幽
冗談のやうに心をひいて見る　一笑

冗談へ嫁は笑つたまゝで居る　白峯

席題　小遣　變

小遣ひをやつていゝかと念をおし　夕鐘
小遣はもう是だけにしておこう　白峯
小遣の切れ目隣りへきいて見る　紅雅幽
玩具など持つて小遣もらひに來　小柳子
(佳)借りに來て子に小遣をやつたる　一笑
(同)小遣へ姉は姉らしい物を買ひ　變人
(軸)病める身に小遣錢を握りしめ　紅雅幽

席題　損　選

番頭の口は何時でも損をして　白峯
結局は損した事を言ひにくる　夕鐘
損をして寢られぬ夜の子のれいき　小柳子
(佳)損をする競馬へ義理を忘れた　變人
(同)損になる算盤をして置炬燵　雅幽
(同)損をする日もあり男盛りなり　同
(軸)損をした數字がにじむ赤インキ　紅

席題　立腹　夕鐘　選

腹いせと言ふのもつらい女なり　白峯
立腹の顏を子供に覗かれる　一笑
腹立てて出れば冷たい風があり　變人
(秀)腹立ちの袖へ女と言ふ力　同
(軸)腹立てゝ歸つてゆくも十二月　夕鐘

席題　重荷　互　選

母親の重荷へ娘無邪氣なり　一笑
汗が出る寒さの中に貧ふ重荷　小柳子
ヤレ〳〵と重荷のおりた膳につき　變人

## 二人寄りて（岡山）

十二月十五日　雜吟　森本素木　報
　　絲雨　選

お前等がもうける主義の鐘太鼓　雀子剛
女事務いと生氣な化粧ぶり　同
カチ〳〵のパンの切端だが捨てず　同
はしりまで凍りましたと妻の聲　素木
三助と夜啼もうけのない話　同
不寢番が轢死女をおびえたる　同
自轉車の焚火へおりたはなしずき　同

## 天痴人居偶會（松江）

天痴人報

十二月四日午後、冬らしくなつた雨の中に折柄着いた川柳雜誌十二月號を手に歡談

席題　傘、晝、洋服　互　選

後姿へ蛇の目傘が邪魔になり　一雄
傘棚へ悲哀が殘る四十九日　天痴人
洋服が揃つてカメラ向き直り　同
傘の柄に大の男の持つ力　墓秋
洋服へ出勤の身の愚痴もあり　同
番傘を小さくさして女事務　法泉子
燕尾服どうにもならぬ咳が出る　同
洋服の白粉マヅム承知せず　同
久し振り女が傘を持つてくれ　巷二
洋服の男まるめた札を出し　同
眞晝中嘘につかれて女寢る　同

## 大阪吟行（神戸）

川柳雜誌社

十二月四日　喜多春秋　報

その日、華水幹事につゞいて五勇士、ひるの汽車で神戸驛をあとに、梅田驛まで御出迎へ下さつた二南氏の御案内で大阪城參觀、夕食は路郎先生をお迎へして、食後有益なる御話を承り句會に乘込めば別働隊西村明珠氏すでに御出席。

神戸——大阪間、車中吟。

椅子　竹楓　選

六感のするどき椅子のすれる音　吉左右
活潑な答を賞めてゐたる椅子　幸捐
派手すぎる會社の椅子で考へる　華水
(軸)展覽會忘れた樣に椅子一つ　竹楓

入選　春秋　選

入選壽下に小さい銀の札　竹楓
自動車の艶へ入選笑つてる　華水
(軸)入選の夢へ灰皿あるばかり　春秋

發車　華水　選

發車迄三分間の土を踏み　竹楓
空想にふけり發車を氣にかけず　幸捐

大阪城參觀雜吟　互　選

豊公の書狀二三字拾ひ讀み　吉左右
春秋氏文鎭の値は五十錢　幸捐
且元の槍に忍ぶは桐一葉　竹楓
靴音がひゞく大阪城の晝　華水

晩餐席上に路郎師をお迎へして

二階　互　選

現金が着いて嬉しい二階の灯　幸捐
二階借みはらしだけの障子開け　吉左右
憂鬱の影に二階は明る過ぎ　竹楓
二階の柱俺は獨身者よ　華水

二階からことはる聲が又變り　二南
マンドリンもう飽きたらし二階留守　路郎

隅　二　南選

すつと通つて隅の埃を知つてゐる　春秋
隅に居て喋る男にされてゐる　吉左右
病室の隅に果物あはれなり　竹楓
(佳)洋裝が似合ふた隅に瓶を置き　華水

（同）講堂の隅から先生椅子をとり　幸捐
（軸）幹事又座敷の隅を叱りに來　二南

眞似　路郎選

眞似られてひどい奴だと愛してゐる春秋　竹楓
人眞似の上手な男隅に居る華水
愛人を眞似てそわで歩いて見　二南
眞似をする子供の手にも父のくせ
一人者眞似も出來ない寢ざまなり　同

川柳雜誌社　梅田句會（大阪）

十二月十一日例　於里十九居

來る二十日松山歩兵第二十二聯隊へ入營の當支部同人今井眞坊君送別の句莚をひらく、本社より孚人、新水、かほる、水車の諸氏御來援下され記念撮影後、眞坊君、梅田支部の前途を祝して乾盃す。（鮎美記）

今井眞坊君におくる

入營を送り男の子をほめる
爪の白さも軍服を着る　新水
明日からは銃を持つ手を握りしめ　水車
ふるさとのやまをながきみのえがほ　鮎美
冬晴れへ國家の秋へ眉きりゝ　ト居
非常時の銃持つ君へ幸あれ　坊茄子
双肩の重き君とはなりにけり　觀月
入營の朝日の丸につゝまれて　白菊
軍服の肩へ重さを感じたり　遊歩
軍國の非常時君を持つてゐる　晩春
天地の限りへ君の旗印　夕鐘
ばんちなどあづけ榮ある銃をもち　里十九
今井君萬歳かたく握手する　方眠

入營に際して

さまざまに思ふてみては苦笑ひ　眞坊
泣き寢入り　かほる選

泣き寢る子へ父の無骨な手は動き　ト居
蝙蝠が話相手の泣き寢入り　鮎美
泣き寢入り何か夢見て笑ふてゐる　方眠
泣き寢入り頬のぬれてるいじらしさ　坊茄子
小說をあけつぱなしの泣き寢入り　里十九
泣き寢入りした子へ母の賃仕事　夕鐘
（人）國の手紙が長い泣き寢入り　鮎美
（地）泣き寢入りなづくことがあるの　觀月
（天）泣き寢入り同志のを汲み　鮎美
（軸）泣きれ入り袂しやぼん入れ　かほる

兼題　玉子酒　新水選

賣出しを控へて無理な玉子酒　水車
玉子酒女の連れが來てくれる　かほる
くちびるへやんはりあたる玉子酒　里十九
（人）玉子酒明日をたのむ汗を拭き　觀月
（地）鼻紙がまたなくなつた玉子酒　方眠
（天）玉子酒夜業へ少しまわり過ぎ　水車
（軸）御附合ひ縫ふ手を止めた玉子酒　新水

兼題　鶏　鮎美選

鶏の瞳のうるみ人間親しまれ　ト居
鶏をさがせば屋根の上にゐる　白菊
幸あれと鶏のとさかの赤かりき　方眠
椽先へ鶏が來てみんな留守　かほる
鶏の影翳々し冬の陽よ　坊茄子
（人）入營の朝ひときはの鶏の聲　晩春
（地）鶏の上手に溝を越へて來る　かほる
（天）しめる手とは知らずに餌をも　水車
（軸）鶏をおふ父とはなつてしまひけ　鮎美

席題　賃ひ子　方眠選

賃ひ子は羞しながら出べそなり　里十九
賃ひ子の雲の行方を視つめたり　觀月
賃ひ子と知らずおほきな欠伸する　新水
神棚の燈を賃ひ子が點けてゐる　鮎美
賃ひ子へ怒りにふるゝ手をひこめ　坊茄子
賃ひ子の辛抱蟻を見つめてゐる　鮎美

席題　君と僕　水車選

君と僕こんなとこまで歩いて來　觀月
階級はついても昔の君と僕　晩春
君と僕なかですき鍋煮へつまり　遊歩
一升が平氣になつた君と僕　觀月
君と僕と月と歩いた久し振り　鮎美

席題　近道　夕鐘選

近道にしては案外廣い道　里十九
近道で君んところの父に逢ひ　ト居
立札のない近道を案じたり　新水
近道のあすこの犬は今日も吠へ　方眠
近道へ好い裾よけを見せて行き　かほる
（人）近道をしたのが兩手あげてゐる　觀月
（地）近道の辻のポストははげてゐる　鮎美
（天）近道の影も曲つてついてくる　同

席題　師匠　里十九選

久し振り師匠と晝の風呂で會ひ　かほる
變屈をみこんで師匠ほれがおれ　方眠
師匠にもやつぱりよめぬふしもある　晩春
お師匠にあへば子供を抱いてゐる　觀月
肝心のとこは師匠にごうも似ず　水車
あの人がお師匠さんですと子が敎へ　白菊
お師匠と座る土びんの湯がたぎり　鮎美
（人）きつちり師匠時間に顏を見せ　かほる
（地）お師匠と云はれて困るお茶のみ　夕鐘

(天)聞かぬふりしてお師匠は鼻をか　方眠
席題　歲末風景　觀　月選
年の瀬の氣ばかりせいて何もせず　方眠
大丸へもう年末やなと思ひ　里十九
歲末へゴーストップもまごろくし　水車
十二月道頓堀の灯があかし　鮎美
十二月サンパツをしてでれてゐる　かほる
(人)餅花へさびしく暮れる酒場なり　坊茄子
(地)十二月嫁ぐ女の細い息　新水
(天)店先に足をとゞめて見るばかり　艮坊

## つ　ど　ひ　第七回（大阪）
姫田夕鐘報

初芝居　初
と辻で別れた初詣　水車
初刷りを配るあとから日が昇り　同
初日の出去年の疲れへ昇りきり　夕鐘
お座敷へ初めてと云ふ稚さばき　同

## 古志原句會（島根）
十二月九日夜　於檳榔居　白曜兒報
甦生第六回例會を開く、
席題　道　天痴人選
道ばたの草にも似たる女居る　白曜兒
道連れに昔の友のことが知れ　檳榔
暗い道昔の戀人おもはれる　いさを
知らぬ道聞けば聞く程遠くなり　遊星
(人)本當の道を牢屋が待つてゐる　歌川面
(地)廻り道する妹は十五なり　白曜兒
(天)補助金へ道路工事がもめてゐる　歌川面
席題　夕燒　檳榔選
夕燒に明日の仕事へうでを組み　遊星
夕燒に生きて白壁の即興畫　天痴人
類燒のあきらめた顏へ夕燒る　白曜兒
(秀)夕燒は忘れられてる都會の灯　同
(同)夕燒とすゝきと丘の想ひ出よ　天痴人
席題　旅　亂笑選
スタンプを蒐める趣味の旅に出る　天痴人
滿洲旅行道たゞ遠し風寒し　同
もう一生逢へぬ人達よ旅心　檳榔
旅先の寫眞疲れたらしい顏　天痴人
席題　煙、子　互選
プラットホームの煙涙あり　遊星
故里へ汽車は名殘りの煙を出し　亂笑
煙突がたゞつき立つてストライキ　檳榔
炭を燒く煙へ小作人の秋が更け　歌川面
飢餓線を煙突男に助けられ　同
サイドカー大滿洲の砂煙り　天痴人
煙突も檢束したい特高課　同
煙だけ引いて靜かな沖を行く　檳榔
プロレタリヤをだます煙突が高い　白曜兒
セネストに煙突白き眞晝間　同
女學生子もある人に親しまれ　遊星
子を眞中に据えて冬の夜の團欒　檳榔
舊友に逢へば子供が二人あり　同
卒業をした子父の涙にまよひ　歌川面
雨の降る小路へ缺食の子が戻り　白曜兒
夜業から歸れば寢てる子泣でる子　同
全快の笑顏女醫も抱いてくれ　天痴人
隣の子やつたお菓子へよく走り　遊星
兼題　トラック　白曜兒選
みなで飲めと初荷のトラック活氣あり　いわを
火事騷ぎトラックにも人が乘り　鹿の子
トラックへ定期に遲れた客らしい　遊星
トラックが儲けただけを待たされて　檳榔
トラックの除行目出度い荷を積んで　天痴人
極寒の原野にトラック武裝して　歌川面
トラックが師走の街に幅をとり　檳榔
避けさせる音でトラックやつて來る　天痴人
トラックが道半分を動かない　檳榔
繭出來た村へトラックの列　天痴人
兼題　朝　歌川面選
漕難の友を圍んで朝を待つ　白曜兒
もう朝かもう朝です と新世帶　遊星
朝の日に今日のれがひなぶちまける　天痴人
(人)永病みの疲れた窓に朝しのぶ　檳榔
(地)落ち髮にみだらな想ひうつ朝ぞ　檳榔
(天)アスファルト朝の氣持を蹴て行く　天痴人
白曜兒

## カラス會報（出雲）
十一月五日夜　於鴉天居　鴉天報
夢、光、先生、失望、卵
愛し子の夢に微笑む母の膝　親光
此のまゝに捨てるは惜しき今朝の夢　眞雄
行き暮れた木の間がくれに星光る　同
好い夢を見た日一日氣がほがら　汀雨
一笑にされた夢だが氣にかかり　水煙
次々と失望して來て十二月　同
女先生の戀ガルガンの亂れがち　鴉水
失望の我を迎へて香る菊　同

## 此花句會（大阪）
十一月十九日夜　於藤田特許事務所　藤田紫石報

當夜琴人、翠夢、葉平三氏の選後夫々有益なる講話あり、尚同人堤比古氏の祝全快句別項の如く追補し各句を夫々短册にして同氏へ贈りたり。

祝比古氏全快

はれやかに此花會の　氏の笑ひ　辰生
怪我などしたとは見えぬ笑顔かな　晶水
大怪我もなかつて君は元氣で居　野洲
繃帶は君の元氣でゆるんだり　龍美
病癒つたりほがらかな朝々や　文蝶
全快もまです南地へ逢ひに行く　翠夢
癒つたがさて當分の　禿かくし　即香
全快の君又タクシーに乘つてゐる　香峯

席題　生活の斷片　葉平選

月日を不滿だらけに生きて居り　晶水
新事務所客も來ぬのに茶がたぎり　更生
オーバーの孔又氣になる朝をでる　芳夫
妹に敬遠されて家を出る　文蝶
ラヂオ消して獨居の夜をあるく　比古
嫂が寒むいと言へば寒むそうな　琴人
嘘を言はなければ結局儲からぬ　即
秋の風又貧乏を追つて來る　紫石
(軸)冷へ切つた兒の手にとける手のぬく　葉平
(同)母のない兒の安けきうまいよ　同

席題　開業　琴人撰

更生の道開業して微笑む　野洲
新妻もたすきして立つ開業日　芳夫

(祝龍美氏開業)

エンジンのひゞきへ家内總だかり　紫石
吉日をトし開業旗を立て　葉平
玄關に靴の賑ふ新事務所　更生
開業に主人苦心を一くさり　同
準備成り金あり派手な店開き　文蝶
此の軒で店を開いて三年目　即
開業の時は着物も揃ふてた　同
開店の窓明々と灯がともり　あや美
なれぬ手も品つゝんでる開業日　比古
お負けしておきますと開業日　同
(軸)すはだしで働く氣な店を持ち　翠

兼題　本　琴人選

脊皮の金文字に思想が沈澱してる　正夫
いかめしき本を飾つて悦に入り　悟坊
試驗まえ本のほこりを先ず拂ひ　辰生
圓本ももう拾錢なみにならべられ　更生
新刊の定價を聞いてそのまんま　文蝶
圓本を讀むひまもなく飾り立て　野洲
樂書を消して妻は本を賣り　木兎
買はぬ奴三味の境にあり　即
本棚の冷めたく見える淋しき夜　あや美
古本のしみへ不安をふと感じ　紫石
日曜は兒と繪本を讀む父となり　比古
國禁の書をよむ夜なり氷雨する　葉平
(佳)共鳴の著者へ一筆送るなり　文蝶
(同)看板の洋書倒に立てゝありの　晶水
(同)約束を待つてる本の落ちつかず　あや美
(同)本棚にあるじの趣味がうかがはれ　貢
(同)本抱いて子供素直に寢てしまい　文蝶
(同)聖書よく讀まれて背文字消へ　琴人
(軸)大閤記讀んで其の日も悉なし　翠夢

兼題　靴　琴人撰

蹴るためにはいてゐる靴か留置場　正夫
病める子に靴は侘しく待つてゐる　香峯
逢ひに出る靴の音さえはづみきり　翠夢
初誕生勤め歸へりに靴を買ひ　野洲
蟋蟀のヒョンと飛び出す朝の靴　更生
エナメルの靴で秋晴れ歩いてる　紫石
ゴム靴で顏を洗つてる獨り者　即
靴ぬげば吾が一日が匂ふなり　葉平
靴のつや消して失業歸つて來　文蝶
春の風エナメルの靴に投げキッス　比古
ハイヒール內わにへつたのが歩き　同
(軸)靴の紐とくのも樂し新家庭　琴人

兼題　ハンカチ　琴人選

汚されて捨られた女かハンカチフ　正夫
ハンカチをふり〳〵日本遠くなり　香峯
ハンカチを持つて寫すも女氣の　翠夢
ハンカチを拾つてやつた戀ごゝろ　比代
美ハンカチが涙の程を知つて居り　石人
ハンカチを風呂屋で洗ふ獨り者　更生
嬌笑が色ハンカチへ崩れて來　紫石
ハンカチの白さ彼女へ自信持ち　文蝶
ハンカチのしわを延ばして聞いて居る　即
恐縮の手に握つてるハンカチフ　比古
種も仕かけもないハンカチを取出す　葉平

## 此花句會（大阪）

十二月十日　於藤田特許事務所

藤田紫石報

當夜會員の願望により琴人氏は川柳の起源發達等近世に至るまでの歷史的の移變に付て御講話下され一同甚だ得る所がありました。

兼題　ネクタイ

戀人に貰つたネクタイ地味すぎる　正夫
彼女からネクタイ貰ふた事が知れ　野洲
思出はネクタイだけに止どまらず　あや美
生活に疲れネクタイ油じみ　香峯
赤ネクタイかげて車掌はいばいん　紫石
妻の手を借るネクタイは醉ひ居る　文蝶
女車掌の赤いネクタイ目に痛い　葉平
ネクタイの柄の赤さをしたしむ日　あや美
ネクタイは首のつなぎにならぬなり　更生
ネクタイをほめられカラーが氣にかゝる　紫石
憂鬱にネクタイを結ぶ茶屋の朝　比古
尖端をまづネクタイの色に見せ　香峯
蝶ネクタイ本性出して醉つてゐる　琴人
ネクタイも變へず主任の十五年　素月
ネクタイの柄へ若さを濺らし　琴人
新世帶ネクタイまでが變つて來　即
主義者今日ネクタイ締めてやつて　あや美
（人）ネクタイを直してくれる手の白さ　葉平
（地）子の寢顏ネクタイの沙汰しなし　琴人
（天）ネクタイは黑ばかりや愚給居　鵜足
（軸）ネクタイの好き若き日の詩り　琴人

兼題　妻　翠夢選

酔となり伴侶となりて妻老ひぬ　正夫
妻病んで朝の子供に着せてやり　香峯
人妻となつてあいそを聞かされる　素月
妻の聲背に出勤は靴をはき　紫石
みなみにくゝ見ゆる夜を妻とある　比古
妻の顏のびやかにして有難し　鵜足
寒い夜妻の枕へけつまづき　あや美
エンゲージ捨てゝ故郷に落葉聞く　文蝶
新妻のまだ親しめぬ裏長屋　素月
行く途え妻は數へて淋しがり　即
目の底につめたき妻の墓標うく　葉平
二日醉妻への土産買つてゐる　紫石
歸つて來た妻の出すサンドウイツチ　比古
病夫持つ勤めと見えぬタイピスト　素月
いとしき妻のはじらひの笑み　葉平
内緣を氣にせぬ妻の若さなり　文蝶
新妻がせのびして打つ注繩飾　芳夫
（五客）仲なほりする水屋の戸がひらく　鵜足
（同）妻だろか二號だろうか髮の艶　素月
（同）妻貰ふ話に心アラ誘はれる　あや美
（同）妻と子と動物園の日はうらゝ　紡月
（同）我妻はと申すべき妻ならじ　鵜足
（地）妻の顏歪んで見えし夜なりき　即
（天）つめたき笑を見する日の妻　葉平
（軸）待つ妻の床に淋しい雨の音　琴人

兼題　年末雜感　翠夢選

あてうすき胸算用で暮に會ひ　正夫
生醉に蠣船の灯が流れてる　香峯
暮の街へうつろな空がのぞき　即
人事に思へぬ年末迫つて來　紫石
昭和八年の曆をはつて春を待ち　文蝶
寒行と支那蕎麥だけの通る街　香峯
せり市に立つて師走のふところ手　比古
足早に步けば夜道いてゝいる　あや美
子を楯に母年の瀨を強調し　晶水
眞實も通らずなつて年の暮　比古

川柳雜誌社萩之茶屋創立句會（大阪）

十一月廿六日

於壽屋フルーツパーラー　奥野秃山報

當支部創立句會を、せめて月の中半頃と思ひ居りましたが、生憎く病氣しましたので月末になりましたのと前日來の雨等で氣にして居りましたのに、何れも御多忙にかてゝ加へて市電未だ敷設されない不便な土地にも不拘、正規の時間に、路郎先生を初め同人社友及諸家の續々と多數の御來臨を恭なうした事を衷心感謝いたします。

締切後の披講に先だちまして私（秃山）當支部創立の喜びにつき寸言御挨拶を申し上げました處早速琴人さんより祝意の御答詞を賜はりました。

次に主幹路郎先生の當支部へ對し御懇篤なる訓諭を承れられたる有益なる御話の御

ぼんやりとみつめるばかり年の暮　紫石
年末へ集める金の少なすぎ　あや美
乞食だけ忘れられてる暮の街　素月
上がんや湯氣ばつかしが寒そうに立ち　あや美
（五客）膽をいためて人生の音をきく　鵜足
（同）十二月じりじりと消ゆるろうそく　葉平
（同）暮れの街蜜柑の色の冴えかゞり　即
（同）待機熱燒伏師走の風が吹いてゐる　葉平
（同）復活の彼氏に寒さけとばされ　あや美
（人）忘年會幹事豫算を切詰める　文蝶
（地）白たびの先に今年も押詰り　更生
（天）ごろごろ塊まつて年が行く　即
（軸）カレンダー帶封のまゝ春を待つ　琴人

披講せられました。
最後に山雨樓さんの當支部の發達成功を希待せらるゝ熱意の祝詞を頂き、直に席題を披講せられ目出度會を閉し、後は談笑數刻終りの秋を惜しみつゝ、和かなる當夜の會もいとも盛大裡に散會いたしました。

兼題　記念　路郎師選

卒業の記念の時計掏摸に逢ひ　禿山
あの時の記念の指輪値があがり　眞如
記念日を寫される人眼が据り　古扇
醉ふたまゝ記念寫眞の中にゐる　詩郎
出獄の日から毬栗頭で居　稔
記念日に醫者の車とすれ違ひ　かほる
引退記念いと華やかに舞ひ納め　葉平
御祖末ㇾ机と椅子が記念なり　里十九
何もかも記念となつた荷をまとめ　水車
記念とて借金ばかり嵩むなり　山雨樓
死んだ兒の下駄が出てきて泣かれる　同
記念品心盡くしも雨にぬれ　新水
二三日は飾つて居るも記念品　綠雨
醉はされた記念に關を書いてやり　豆秋
（人）行幸の記念に橋の名が變はり　新水
（地）記念品歲をとつたと思ふ也　綠雨
（天）記念品貰ひてきれいな首になる　豆秋
（軸）夢だ夢だと記念品に社長醉ひ　路郎

兼題　軒　店　琴人選

嚴めしい代書の顏で軒を借り　禿山
混んで來る軒店うまく掛けさせる　古扇
軒店で褌を吹かれてコップ酒　眞如
軒店は愛想に水も播いてやり　無二
軒店のほゞ眞い女疲れてる　三郎
軒店の女黑朱子かけてゐる　詩郎
軒店の此の頃株を少し買ひ　稔
軒店の暖簾くぐつた寒い風　紫石
やめられぬ酒軒店の顏馴染　新水
軒店の火鉢は狹いとこへ置き　豆秋
軒店にまだ日が高い午後三時　葉平
乾坤一擲軒店の灯をともし　同
その板場軒店出して恙なし　里十九
軒店の暖簾に背がはみでる　綠雨
（佳）軒店の頃の心でおれば眞し　里十九
（同）軒店の皿と鉢とが世帶じみ　かほる
（同）軒店を殘して西陽ざかと落ち　山雨樓
（同）軒店はたばこの使ひなれたもの　路郎
（人）軒店も繁昌らしい影を見せ　水車
（地）軒店の喧嘩脊廣が立ちおくれ　路郎
（天）軒店の親父よつぽど清潔好き　里十九
（軸）軒店の閑は小說讀んで居る　琴人

席題　安　産　新

安産に女房の歲もわかるなり　水選
安産はしたが指數しらべてみつる　銀波
安産を知らしてよいやら惡いやら　里十九
安産へ何は兎もあれ祝ひに出　あや美
安産院はうれしい聲を送り出し　水車
安産へ陽が當つてる一ところ　山雨樓
安産の耳へ眞人の聲があり　琴人
安産に宿直をせぬこと久し　路郎
安産のそれから不眠性になり　稔
ベビー服ばつかり買ふ御安産　同
安らけく產めかし貧を思うまじ　同

席題　祝　電　山雨樓選

祝電に女の顏もこぼれさう　三郎
實空へ祝電だけですましとき　豆秋
盛會へ祝電を讀む聲の巾　琴人
祝電の次のも讀んで白け切り　かほる
祝電の隣りひつそり閑と居る　稔
以下略の祝電早く呑みに行こ　路郎
祝電へ四角張るだけ四角ばり　同
（人）ハッテンチシユクスぼりてこそ　禿山
（地）祝電へあり〳〵浮かぶ伯父の顏　新水
（天）祝電を讀む仲人の五ッ紋　豆秋
（軸）祝電は頭の上で取り次がれ　山雨樓

## 川柳雜誌社　西條例會

十二月四日　於田村冷槍居　荒井英賀夫報

雨　傘　西英子選

二次會へ相合傘が又通り　冷槍
雨傘の置場忘れた二日醉　虹一
傘持つて來る新妻へからかはれ　承春
降り出した雨へ借傘思出し　英賀夫
破れ傘これでも雨はしのげるよ　冷槍

年の暮　冷槍選

丸髷に結ひならしてる年の暮　英賀夫
門松の用意が出來た年の暮　虹一
追附いて來る氣忙しい年の暮　矢舟
掛取の息が揃ふた年の暮　虹一
賣出しの太鼓へ師走の腰が浮き　西英子
子の晴着作つてホット年の暮　矢舟

稻　刈　春選

日曜日訪れて行けば稻を刈り　矢舟
植附の苦勞も言ふて稻を刈り　英賀夫
同情の寄つて稻刈る出征後　西英子
子の寢息聞いて稻刈る鎌を研ぎ　英賀夫

豊年の稲穂を刈りる朗らかさ　矢舟
刈稲へ案山子は弓を持つた儘　虹一

預金　矢舟選

切りつめた世帯へ預金増へてゐる　承春
預けてる預金の嵩を羨やまれ　同
装ふりもかまはず預金する男　西英子
預金帳微笑むでから又預け　冷槍
預金帳減つて女給に戀があり　英賀夫
(人)引出した預金へ氣前見せて呑み　西英子
(地)預金帳出して微笑む共稼ぎ　承春
(天)預金皆な出して終つて病み續け　虹一

二十歳後家　一選

二十歳後家噂の通り男が來　英賀夫
二十歳後家惜しまれる程いゝタイプ　承春
二十歳後家世間の人がほつとかす　矢舟
二十歳後家昔の柄をよつて見る　西英子
子を一人樂しみにして二十歳後家　冷槍
子が無ければや貰ひてゐる二十歳後家　英賀夫
(人)煙草屋は名にしと二十歳後家　冷槍
(地)二十歳後家又緣談を進められ　西英子
(天)男への愛憎も知つた二十歳後家　英賀夫

二人連れ　英賀夫選

盛り場を抜けて寄添ふ二人連れ　西英子
又今日も何處へ行くのか二人連れ　矢舟
勤め先角で別れる二人連れ　冷槍
行く時は一人歸りは二人連れ　虹一
添ひ遂げて出雲で下車た二人連れ　同
二人連れ宿の女將に見直され　西英子
二人連へツドライトに手をはなし　承春
山道もおそろしくない二人連れ　矢舟

## 睦會句報　（神戸）

十二月二日　西村明珠報

誓文、腹痛、二科展を見て

むつかしい畵を見る顏のむつかしさ　彌之助
息子の畵一つだけ見て歸る母　同
誓文の飾りに景氣窺はる　芳雪
誓文の旗不景氣な音を立て　同
誓文の街で借てる人に會ひ　明珠
腹痛へ會社の机冷めた過ぎ　同
見逃がしてならぬ二科展から疲れ　同
千圓もする畵の下を二度通り　同
あるだけをひつくり返して店を出る　操
肩と肩と手と手と見切品　同
裸体畵もあつて展覽會の入り　同

## 大西八歩氏を圍んで（松江）

商用で來松中の本社々友八歩氏を圍み松江支部同人で句座を開きました。日時十一月廿四日午後八時、會場岩城旅館樓上。

席題　霜　五選

霜枯れの朽葉が散つた池の畫　硯滴
バーバーをぬらし霜夜の宿に着き　柳人
工場の汽笛は霜をふるわせる　巻二
哀戀の霜に凍てたる魂ぞ　まさを
霜の夜の戀のむくろは淋しいぞ　同
大根が肥えて來ました畑の霜　天痴人

席題　八　まさを・祥月共選

八幡社額の古さへ暮れかゝり　八歩
爪彈をうつとりとして八百屋きゝ　まさを
八百長の聲が聞える投票場　硯滴
八年の春は成功する手相　柳人
日の丸は翻飜八千萬の意氣　同
午後八時開會を待つ煙草抜く　天痴人
霜焼を八百屋にかこつ臺所　同

席題　歩　柳人・巻二共選

街の灯を避けて二人の歩む所　巻二
朗かな空だ歩調に口笛に　硯滴
二ア人の歩みにかへす濱の涙　柳人
空想が歩む郊外柿多し　天痴人
歩いても矢ッ張一人ぼつちだな　まさを

席題　リツトン卿　天痴人・硯滴共選

リツトン卿支那に有利な事ばかり　祥月
リツトンよ胸の悸動がはげしいから　まさを
日本を逃げていきまくリツトン卿　柳人
滿洲が意外に盛しリツトン卿　天痴人
怒らせる筈でなかりしリツトン卿　同

席題　丹前　八歩選

眞心の癩痺した夜にごてら着て　硯滴
あじきなきまゝ丹前に泌む鄉愁　まさを
丹前が貧かされてゐる辻將棋　柳人
丹前の群れは畫間の團體旗　巻二
丹前はごことて當てのない歩み　同
(軸)丹前で來て引き返す橋の巾　八歩

## 川柳雜誌社　加古川句會　（兵庫）

小使

同窓會小使だけが知つた顏　泰山
ハイ〳〵と小使圓ふ勤めてる　同
賑やかに小使を呼ぶ阿彌陀佛　光哉
小使のかたくるしさをさからへず　督二

雪

雪の朝道行く人の丈が高い　春聽

小雪散らして雀チュン〳〵　督二
雪達磨弟の方が先に溶け　泰山
急行車雪の小驛をうつかりし　光哉

咳
演説へ咳々の野次が飛び　春聽
咳をして香具師ステッキで丸を引き　同
病上り尋ねられると咳になり　督二
文學にころ令嬢にかるい咳　同

## キング喫茶店偶會

十一月末日　麻生葭乃報

下駄
かへられた下駄に風呂屋を寒う出る　銀波
たしなみは揃へてぬいだ上りぐち　同
案内の下駄へ靴下突かけるかへられた下駄履いて見る氣になれず　禿山
宙を浮く思ひフエルトで逢ひに行き氣が急いでゐた下駄屋は念を入れ　葭乃
（秀）今日も駄目だ何處かで饅焼いて　夢人
（同）女の膚の匂ひを盗む晝の雨　羅門

席題　人間　羅門選

人間は哀し一にも二にも金　比佐緒
人間なればこそ若き日の惱み　田鶴緒
俺も人間か溜息の中にゐる　夢人
ぽつり〳〵と話す男よ握手せむ　綠之助
人間としての自覺が躊躇させ　綠之助
人間はたつた一人で呑むがいい　田鶴緒
さみしき人間としての俺の影

席題　情熱　夢人・美登利草共選

初戀はただ情熱のありつたけ　綠之助
情熱の磨滅德利がさみし　綠之助
情然に堪えれば熱くなる眸　同
情熱のクライマックスにある無口　田鶴緒
黑き瞳に烈しく迫る情熱よ　羅門
情熱の頰の生毛にふれる息　同

席題　煙突　比佐緒選

小さな煙突五人が食つてゐる　綠之助
煙突に心が尖る油の凍る日　田鶴緒
儲けてる煙突は横柄な　綠之助
解雇の仰ぐ瞳へ煙突の默す　綠之助
煙突が並びお前は使用人　綠之助
冬の陽煙突の下の女工等　羅門

席題　晝　田鶴緒選

病床へ太陽のない眞晝　夢人
十二時待つてた樣にペンを措き　比佐緒
（佳）カフエーの眞晝冬の陽がぽつり　綠之助
（同）抜毛に默りゐるまひるの孤獨　羅門
（秀）洗ひ髮秋の蠅と親しむ眞晝　同
（同）鷄の戀眞晝の陽がぬくい　綠之助

席題　冬空　綠之助選

泣け泣け絶望的な冬の空　羅門
冬空へなつかしい故郷となつてる　夢人
時雨降る空へ百姓等のなげき　比佐緒
洋館の屋根に尖つてゐるポプラ　田鶴緒
（佳）若き魂の躍動を歷して冬空　美登利草
（秀）冬空に飢へと正午の笛がなる　羅門
（同）闘ひに行く冬空の朝を切る　同

## 飯島傳重君に集ふ（島根）

席題、袋廻しを終へて傳重君の新家庭を祝する盃を含んだ。大阪でうなつたと云ふ綠之助君が安來節をうなつてくれたがまこと節が躍つてた。紫光君のユーモアな祝辭、羅門君の鐵骨の樣な青柳とか、華村君がうなるシーンは臍をくれらしてくれた。

心からなる傳重君の結婚をよろこびて。○時過ぎて失禮した。十二月一日、河谷田鶴緒

席題　光澤　與詩雄選

人絹の色澤につかれたレビューの娘　田鶴緒
昇給のあてなきズボンの膝の光澤　綠之助

席題　爆音　傳重選

爆音の刹那呆然として警官　與詩雄
爆音が擴がりひろがり筑川平野なる　田鶴緒
冬空をゆがめて爆音が徘ずる　羅門
眠たき欠伸爆音を遠くきゝ　綠之助
爆音に神經の尖り切る國民ぞ　田鶴緒
爆音のたゞ中に女工の手が躍る　華村

席題　鋪道　華村選

人間の影をゆがめてアスファルト　綠之助
高らかな校歌夜更けのアスファルト　與詩雄
（入）フエルトに鋪道の疲れ知る日の長き　田鶴緒

(地)自動車が滑る鋪道に秋が澄み　與詩雄
(天)雨絶望的に疲れたアスファルト　羅門
席題　神經　羅門　選
ただ神經が尖つて尖つて夜の更け　華村
ふるるものみな神經尖る若き日よ　田鶴緒
あゝ僕の戀は尖りゆく先の　神經　綠之助
席題　晩秋の川　紫光　選
月光ほのかに悲しく秋の川　傳重
逆風に漣の列みる秋の川　羅門
もの洗ふ手にひや〳〵と知る晩秋　與詩雄
晩秋の川へいつそ淋しい灯の流れ　華村
(人)芒枯れ切り水鳥の立つ寒さ　綠之助
(地)暮る秋龜の横切る陽のぬくみ　同
(天)枯れ水にせかれて塵へ陽の弱き　田鶴緒
席題　尼　選
尼僧も惱み落葉に立つてゐる　與詩雄
靜寂を掌にのせて尼寺の晝　羅門
(人)秋風に尼僧の肩が辷るらし　同
(地)まるき頭はかなしとり切れぬ尼　綠之助
(天)泪を覺ゆる尼につづく青い空　羅門
席題　清　算　綠之助　選
清算書送つて父へ又無心　紫光
清算の果てを空想に追はれがち　華村
妖婦の純情が毒藥を呑む　與詩雄
(秀)戀の清算斷末魔に終り　紫光
(同)清算をごもる戀なりこゝもりよ　羅門
(同)青春を清算したのかシユウリンか　傳重

前月を以つて甦生一週年を迎へた松江支部も更に一層の奮闘を續けるため十二月例會を開催。多數の出席を得て意氣潑溂の裡に散會。

兼題　ミシン　巻　二選
ポマードの匂ひミシンも公休日　峰月
ミシン踏む音から唄の聲が出る　月兎
(佳)ミシン臺一抔ちてワンピースカーテンの中からミシンの音がする　春朗
(佳)内職のミシンの窓へ輕氣球　玲人
暖かき陽ざしにミシンの輕い音　砂詩朗
(佳)二人の生活へミシン埃する　柳人
ミシン踏む秋の乳房が痛みます　三雷波
溜息に艶がくもるよミシン臺　法泉子
ちれつたく踏んでるらしいミシン臺　天痴人

兼題　人　生　玲人　選
人生に疲れ失職寢ころがり　三雷波
人生の一歩踏み出す日の歡喜　鐵花人
人生の春だとみんな飲んでゐる　春朗
(佳)人生の春を謳つて靴が鳴る　同
頬杖の吾が人生に夢多き　まさを
人生に疲れた眼に續く塀　法泉寺
人生をみつめて春を瘠せてゐる　同
牢屋から人生觀が生き出され　歌ル面
救はれた生命に朝の歡喜なる　柳人
人生はたゞセコンドの連續よ　巻二
(佳)終局は死の人生に働いて　紫吻

席題　牛　肉　五　選
牛肉を土産に呑める叔父が來る　紘二
牛肉へ一家たのしき冬の夜　祥月
牛肉のだるそうにして冷藏庫　春朗
牛肉をつゝき同志にある決意　砂詩朗
牛鍋に箸がかち合ふ久し振り　巻二
切りかけたまゝ笑はせる牛肉屋　歌ル面
牛鍋を圍み下宿の安來拳　柳人
牛鍋へ氣勢が上る同窓會　三雷波
滿ち足りた心牛肉酒の味　同
すき燒の湯氣の向ふもよく笑ひ　まさを
わり込んで來て牛鍋をよくつゝき　同

席題　電　工　天痴人、鐵花人共選
電工へ二階の消えたのも知らせず　祥月
電工のレコードかけて交替日　峰月
電工へまた一時雨來そうなり　紘二
電工のあんな所で唄になり　歌ル面
電工に目下の町も冬の色　三雷波
電工のぬれるにまかす俄雨　同
電工夫或る日カメラを向けられる　砂詩朗
電工が無事故を愉快に飲んでゐる　玲人
電工の欠伸眞白き晝の月　巻二
電工の眼に美しき夜の部屋　柳人
てつぺんで電工今夜も飲む話　天痴人
電工へ寺の本堂高かすぎる　法泉子
電工はおいと呼んで何か投げ　まさを

席題　資本家　まさを、紘二共選
資本家があつさり出した義捐金　鐵花人
もう仕方なく資本家へ借りに行き　祥月
資本家の野心となつたいゝ女　柳人
資本家の苦勞防彈チヨッキ着る　紘二
資本家の家庭强迫狀に馴れ　同
資本家の肩に毛皮が巾を取り　巻二
資本家を太らす豫算出來上り　法泉子
滿蒙へ資本家別な氣が動き　同



川柳雜誌社
松江例會（松江）
十二月一日夜　於龍昌寺精舍
奈良井柳人報

資本家に記者はなんだか摑まされ　春　朗
資本家の暴言哀れ秋の雨　砂詩朗
人を買ふ金を資本家惜しからず　三雷波
資本家のベテンを知らず死んで行く　歌ル面
資本家へガッチリ組んだ腕と腕　同
資本家の味方は金庫ばかりなる　天痴人

席題　婦人會　砂詩朗、法泉子共選

婦人會今日は選擧のある日なり　祥　月
婦人會資産の順に座つてゐる　蜂　月
丸髷の動議に進む婦人會　砂詩朗
若き日の話がはづむ婦人會　鐵花人
婦人會市長夫人の趣味を聞く　法泉子
婦人會思ひ〳〵に子は眠り　春　朗
婦人會五本の指にある詩り　三雷波
婦人會女としては出來すぎる　同
婦人會亭主の話に座は白け　玲　人
謙譲の美徳溢れて婦人會　柳　人
料理法が育兒法がと婦人會　巻　二
婦人會爛漫としてよく香り　まさを
婦人會可憐な唇と思ひしに　同
婦人會講師みじめな男振り　天痴人

## 比古氏邸句會（大阪）

十一月九日夜　於比古氏邸　藤田紫石報

席題　雑　吟　琴　人選

難吟に茶菓子の方へ手を伸し　晶　水
病む妻の深きれむりに消すラヂオ　比　古
衝突の後自動車が恐くなり　紫　石

比古氏邸にて

金色の引戸へ百合の影も沿ひ　同
聖駕奉迎に比古君の全快を　祝す　あや美
聖駕迎へて病氣なんかと云つれず　同
秋の夜笑ひ笑ひの中に更け　華　水
霰ちつて年の深さに心づき　即

席題　笑　ひ　琴　人選

何時つかほほ笑そと立つもがが居り　晶　水
その妓よく笑ふて居るか座がもて　比　古
（五客）産の床笑つた顔へ夫を呼び　南　陽
（同）なごやかな座談へ笑ひ爆發し　あや美
（同）あきらめて女淋しく笑つてる　香　峯
（同）プラチナの歯が飛び出る高笑ひ　紫　石
（同）哄笑の心かすめる明日の事　比　古
（人）大笑ひ次いで手を出すみかん籠　芳　夫
（地）甦生のプランへ友と笑ひ合ひ　あや美
（天）秋さらり君の笑顔の健康美　紫　石
（軸）よろこびの襖を漏れる笑ひ聲　琴　人

川柳雑誌社　**神戸部友句會**（神戸）

十月二九八日　西村明珠報

兼題　校　歌　明　珠選

校歌高らかに校門を入る優勝旗　竹　楓
學窓を離れ校歌をなつかしみ　幸　捐
誰からとなく全校の歌になり　春　秋
ベビー服校歌のふしになつてゐる　華　水
敗戦へ力こもつた校歌なり　同

席題　味、格氣　五　選

一錢の蜜柑も冬の味を持ち　春　秋
どうせもうあたしなんかと頭痛膏　同
味の素女同志の話なり　吉左右
格氣ふと夜の靜けさにうなだれる　同
仲裁は格氣分けるに骨が折れ　幸　捐
無産者の今日働いた飯の味　竹　楓
格氣するつもりへ夫は疲れてる　同
親と子と同んなじ味の家庭なり　華　水
格氣からのがれて商用旅に出る　同
味はよし自慢の店を酔ふて出る　明　珠
上かんやお客に味をきく寒さ　同
茶を入れてそして格氣をしてるなり　同

席題　間違ひ、バラバラ、力

支那服へ話かければ日本人　繁　堂
子の使ひ間違つてゐて母が行き　竹　楓
芝居今雨の音かをくなり　同
間違つたまゝで元氣がほめられる　吉左右
間違ひを間違ひにせぬ高い鼻　春　秋
レヴューは今バラバラになつた　幸　捐
バラバラにならない樣に幼稚園　同
間違ひのない目の色を見せてゐる　明　珠
間違ひに電氣を下げてゐる親子　同
間違ひがあつてはならぬ一人つ子　同
間違つた辻で按摩は笛をふき　華　水
間違ひもなく暇人がやつてくる　同
白扇へ力の入つた字がかすれ　同

席題　情婦、温泉　五　選

年をかくして情婦こととなき　吉左右
湯歸りの女給の姿情婦めき　竹　楓
約束をしてから情婦あとをむき　幸　捐
情婦いま眞面目な人がいやになり　同
露路に來てからの情婦の白さなり　華　水
花道に來ると情婦は下駄をぬぎ　同
情婦もやつぱり圓タクを値切り　繁　堂
ピストルを預つておく情婦なり　春　秋
犯人の情婦なかなか美人なり　同

信心を情婦がふつとやめた宵　明珠
簡單に言へば情婦にもの足らず　同
溫泉に來て退屈な顏と會ひ　同

## 阪大川柳會（大阪）

十一月二十四日　利生報

兼題　洋室　路郎選

洋室にダブルベットと廣告し　柳水
代表は絨たんをわざと踏みにじり　山彦
洋室の窓町からのお客らし　湧三
洋室の客は出入りの悉皆や　同
カーテンを下した外は月夜です　正甫
しず〳〵とドアーを開けた高島田　同
ヴエランダにしやぼてんの花菊の花　竹涯
洋室の言葉遣ひが品をさげ　同
洋室のある子へ先生親しめず　利生
診察場だけ洋室でありにけり　同
洋室に日本美術が群を拔き　芳一
八階のベットで地震思ひ出し　同
タイピスト輕い疲れを窓に倚り　柳秀
洋室は素足で這入る所でなし　同
陳情は床へ坐つてお辭儀をし　橙舍
小間使鍵の孔から先づ覗き　同
限りなく子孫へ殘す洋室か　路生
洋室のあるへ嫁がう仕附方　同

兼題　洋室へ靴を脫げとは侮辱なり　同
（人）洋室で味氣なく飮む日本酒　橙舍
（地）土の手を洗ひ洋間に案內し　湧三
（天）不渡りを書く洋室の明る過ぎ　路生
（軸）洋室へ松竹梅を持ちこまれ　路郎
（同）洋室は待たせるとこに出來ぬ　同

兼題　毛布　路郎選

一枚の毛布に船は搖れてゐる　方正
寢相をば毛布に殘し起きてくる　橙舍
綿入りの毛布も子供だけに着せ　柳水
東京に着いて毛布が邪魔になり　利生
ひつぱなす樣に毛布は起されるる　路生
むく〳〵と毛布の頭起きて來る　同
新世帶毛布弘げて輪に座り　竹涯
綿毛布買つて滿足それでよし　同
過ぐる夜の秘密を毛布知つて居る　柳秀
眠る子に毛布の欲しい夜店出し　同
（人）成績の不首尾も知らず毛布着き　芳一
（地）積み上げた毛布崩れて滊は暮れ　同
（天）毛布ごと吾子を抱いて醫者へ行き　橙舍

雜　吟　路郎選

白日の狸の顏はとぼけてゐる　路生
一介の吏喜びの首を垂れ　利生
約束を待つベンチには雪が降り　正甫
とぼけても胸に痞へることのあり　方正
悲しさは小女の刺繍の襟の垢　橙舍
試驗にはいぢめられたと謝恩會　柳秀
（人）責任の一語は強く稼がせる　竹涯
（地）ライオンは何を小癪な顏でゐる　路生
（天）冷笑のその唇は薄かりき　路郎

席題　本　路郎選

尋ぬれば本にあるよと師は敎へ　方正
折鞄に安本つめて賢がり　一笑
土產にと貰つた繪本間に合はず　同
本本と爲替せびつた頃もあり　筑川
徒然に本を貸したが緣になり　同
飾られて全集物は役が濟み　利生
本代をネオンサインで飮んぢまい　同
二人してよむ讀本はひつばられ　路生
せり賣の本屋は日繪だけを見せ　同
鄕からの金待ちあぐみ本を賣り　きよし
本返す友はカフエーに誘き出し　同
掘り出した本に思はず手をたゝき　正甫
ダンサーは讀めぬ本まで伊達に持ち　同
圓本が主の趣味を並べられ　湧三
黃檗は萬卷讀むにくれてゆく　同
思ひ出の蚊のこびり着く頁繰る　橙舍
生字引なゝ云はれて廿年　同
（客）本讀んだ人とは見えぬ無理もない　芳一
（同）古本で揃へてあゝ呑むと言ひ　正甫
（同）女學生本に隱れてよく笑ひ　同
（同）紙魚とでもなんとでも云へ下地つ子　山彦
（同）歌本に朱をうつてゐる下地つ子　同
（人）本讀んで事實に遠い事を言ひ　芳一
（同）本棚を狹きに置いて子に殘し　方正
（同）繙けば歷史が亂を敎ゆなり　同
（地）萬卷に通じて戀はうぶなりき　同
（地）のぞかれる本を女は胸にあて　路生
（天）大臣の書いた書物は二十錢　利生
（軸）その書棚醉に乘じて買うた本　路郎
（同）嚴父慈母子に見せられぬ本もあり　同

## ひかり集 —その十一—（大阪）

水谷鮎美報

火華

紫の火華となりし君ならむ　卜居
熱なき火華となりしこぬか星　同
銃口の火華に溶けてしまはむと　鮎美
火華散れ〳〵心は温しふところ手　同
さかれちをくはす火華へ顔のいろ　同

## 川柳雑誌社 神戸部友會（神戸）

十一月二十八日　於華水居　明珠報

頑張　吉左右選

頑張つてくれる同士へ感謝する　明珠
頑張りが利かぬ年では無いのなり　華水
頑張れと應援悲し敵強し　春秋

平氣　明珠選

知つた顔女案外平氣なり　華水
仕送りを平氣で使ふ次男坊　繁堂
試驗前平氣にゐると叱られる　幸捐
片戀のされど平氣はよそほへど　吉左右
泣くよりも悲しい平氣だつた戀　春秋
（秀）神樣に戀を平氣で打あける　竹楓
（軸）たゞれたる女平氣で夜を歩く　明珠

女の目　春秋選

波着きを失ひかけた女の目　竹楓
女の目自分の柄に落つかず　明珠
（人）女の目肩かけからの女の目　華水
（地）飾窓の女へ電車動きかけ　繁堂
（天）煙突の高さを當てる女の目　幸捐
（軸）女の目今晩戀にかゞやきぬ　春秋

トンド　竹楓選

えらいことやりよるなアとトンドに　春秋
號外が欲しくトンドをちと離れ　幸捐
嘘が出そうでトンドへ背を向け　華水
京染屋トンドへ禮を言ふて行き　明珠
（佳）燃え上るトンドへくらし忘れそ　同

硯　繁堂選

すり減つた硯實直な大番頭　吉左右
大硯「朝海」と書かんとす　春秋
團服は硯へ何か賴まれる　幸捐
云ひまけた硯無暗にすつてゐる　華水
（佳）退屈をまぎらす硯水がなし　明珠
（同）尼寺の書は硯に筆に冴え　竹楓

手拭　互選

手拭へ油のにじむ鐵工所　幸捐
蒸しタオル賞與の愚痴もやめてやる　明珠
手拭で水涕を拭き汗も拭き　春秋
生甲斐を知つた田舍の野天風呂　竹楓
健康を目指しタオルをしぼりきり　明珠
繪手拭名所風景親しまれ　繁堂

## 矢車莊川柳會句會

十一月廿六日夜　於矢車莊

神田研一路報

堕　ごん底　祥月選、黒　研一路選
初冬　法泉子選、水車番の愛人
天痴人選、葱　巷二選、此頃の
私　墓秋選、弱　互選、聲互選
つぼ　互選、
弱そうな顔でよくやるコップ酒　研一路
弱身へ人參風呂がわいて居る　同
つひ語り續けて行けば葱畑　祥月
病弱な父正月もこせぬらし　同
母のぐち我が子の弱い事ばかり　同
弱點がいつそ目立つて親しまれ　慕秋
産聲の大きく此所も男子なり　同
葱ふせて小雨一筋快し　同
ごす黒い夜の不氣味へ光る靴　同
言ひ切つた我が唇は乾いてゐ　法泉子
切札は弱點をついてふつと立ち　同
彼が黒幕だと云ふ五分刈頭　同
自炊のいつちしまひは葱を買ひ　同
遺品のつぼといふが賣れ殘り　同
つぼの花又散りました白い床　同
お互に弱點のある酒を飲み　同
ごん底の暮しがさせた厚化粧　巷二
火消つぼ冷めたき朝の臺所　同
水の音と月とあなたの口笛と　同
冷たさは君のひとみの黒さなり　同
何事も運にまかせて靴のひも　同
同志愛は燃え上る壓壓の朝だ　天痴人
初霜へ庭の山茶花をちぶれる　同
盛花へ壺の丸みをなでゝみる　同
黒足袋へ悲哀がこもる未亡人　同
感冒へ恐怖がつのる聲樂家　同

## 明珠居小集（神戸）

十一月二十日　西村明珠報

小說

小說を讀める晦日をうらやまれ　晶彦
小說を閉ぢれば雨の音がする　同
退屈な叔父に小說讀まされる　同
病室は講談倶樂部讀むと見え　明珠

看護婦に肩の凝らない本をかり　同
夕刊の小説を讀むとこへ人　同
小説家放浪癖を知られてゐ春秋
鎌倉に先生がある小説家　同
處女作の自分の戀が世に當り寄舟
小説家暗い二階に髪が延び　同

川柳雜誌社　松江小集

十一月二十一日夜　於矢車莊　研一路報

題　卑怯者　墓秋選　裏まさを選
紅　硯滴選　動く　苍二選
セーラズボン　研一路選

次男、落葉、雁　互選
雁が行くあれ父様よ母様よ　觀月
汽車の窓動く景色も冬めきて　研一路
裏町で知つた女給と出合ふ朝　同
戀すれば影にも動く我が心　墓秋
露しばし薄紅色の陽を孕み　同
裏道を行けば小さくたれる蚊帳　同
雁よ飛べ秋の詩情のまどろかに　同
あてどなく落葉は風にふかれたり　同
次男坊異端視されて笑ふだけ　同
セーラパンツ憂うつなんか知りもせ　まさを
鈍重な空機重機がだまつて上る　同
胸やんで朽葉に似たる宿命よ　硯滴
秒針に支配されてる平社員　同
青空に答へる様に發動機　同
口紅を嘲る朝の鏡なり　翠句樓
黒えりの女と話す裏通り　同
頬杖をついて卑怯な男居る　同
片戀のはつきり雁の聞を聞き　同
待つ身になれば落葉パラ〳〵　同

川柳雜誌社　天王寺句會（大阪）

十二月十二日　於内藤製作所

須崎豆秋　報

題　鶏　琴　人選
（佳）鶏聲に温泉宿下から雲が湧き　南面子
（同）鶏をしめたへ叔母の冷たき目　紫石
（同）出勤へヒヨコが少しつゝ來る　豆秋
（同）養鶏の本なぞを見て四五羽飼ひ　同
（同）鶏を呼んで詩人の氣がまぎれ　鮎美
（同）親鶏子鶏影がうごいておもしろし　同
（軸）鶏の影旭へ延びるだけのびる　琴人

題　脫線　綠雨選
脫線の復舊する頃灯がともり　詩郎
山一つ越へて脫線歩るかされ　水車
脫線の電車の影が歪んでゐ　鮎美
脫線へ寒さの人がつゝくなり　變人
（佳）脫線をして短册忘れて來　豆秋
（同）脫線へ師走と別な人だかり　葉光

題　焚火　鮎美選
焚火する横で大工は磨いでゐる　豆秋
消まめいた噺焚火でほてり過ぎ　南面子
焚火して語り明かした君なりき　變人
藥灰が火鉢一つに餘るなり　綠雨
わら灰は惜しい所で水をかけ　水車
（佳）大股の農夫焚火へうつろなり　紫石
（同）爛られて焚火離れた十五六　琴人
（同）焚火から物言ふ父の苦勞性　鮎美
（軸）焚火から物言ふ父の苦勞性　變人

題　ギヤンギ　紫石選
ギヤンギの一人三等で逃げるなり　三郎
ギヤンギまた又あつて大都會　三郎
札束へギロリと光るギヤンギの目　豆秋
ピストルの夜へギヤンギの勢揃ひ　八歩
ピストルを擊つてギヤンギの闇の顔　鮎美
ギヤンギは先づピストルを見るなり　綠雨
ギヤンギの記事へ塀を高める　水車

題　紙芝居　八歩選
紙芝居拍子木輕く呼びかける　詩郎
紙芝居面白相に泣いて居り　柳民
藏末と別に呑氣な紙芝居　水車
畫さかり泣く子へひとり紙芝居　鮎美
湯上りの妾が見てる紙芝居　同
紙芝居昨日のつゞきから初め　豆秋
夕暮れの中にいつもの紙芝居　同

題　未練　互選
今日限りのモデルに未練あることし　南面子
未練男に銚子がならび　變人
鉛色心に在つて未練なし　紫石

## 大地吟社臨時句會

十一月二十五日　於綠之助居

河谷田鶴緒報

尼綠之助　選
灯のついた港へ汽笛流れてる　水煙
饒舌に疲れ人絹に灯がなめる　羅門
森影に里の灯寒くまたゝけり　汀雨
野邊送り寒々と灯が續いてる　鴉水
灯を消してまた念佛を口ずさみ　鴉天
淋しさを一層深めて灯を見つめ　華村
逝く秋の灯に老ひ給ふ母の影　田鶴緒
思ひ出の町の灯がかすむ汽車の窓　同

灯で見たと違つた顏の朝となり　夢人
佛壇の亡祖父の寫眞にまたゝく灯　鴎天
(人)夕の嵐と走る銀バスに灯かゞり　羅門
(地)ツヤズミ灯今宵も情痴な繊り疲れ　美登利草
(天)灯に醉ふた樣に暖簾をくゞり出る　夢人

兼題　尖

秒針の響尖つて嵐の夜　鴎天
避雷針秋空高く尖つてる　汀雨
尖り來る心盃を向けられる　綠之助
世界の壓迫八千萬の神經が尖る　美登利草
事毎に氣が尖る夫病み續け　田鶴緒
貧しさに尖つた聲で子を叱る　與詩雄
反抗をかみころしてる目の尖り　汀雨
鉛筆の芯のみ尖り落ちつかず　綠之助
(人)言葉尖つて寒い白壁　鴎水
(地)セコンド痛し尖つた感情　同
(天)冬空の神經を突き木が尖り　河谷田鶴緒選

席題　髷

(佳)丸髷の埃を見つけて仲がよし　綠之助
(同)花活けて見てもさびしい忌中髷　同
(同)うれしき日の近き髷に秋光る　羅門
(同)初島田純情を見せて水々し　美登利草
(同)丸髷が重たく夫は不在がち　與詩雄

席題　骨

骨が鳴るうれしい事のありそうな　綠之助
憂鬱は指の骨唯太り行く　美登利草
冬だ——頬骨へ星光が降りそゝぐ　田鶴緒
肩もめば骨がさびしい母となり　綠之助
牢獄で寂しく骨をつまんでる　華村
(人)骨ころがれり何か言ひたげに　綠之助
(地)火葬場に殘りて白き幾月や　同
(天)鼻に陽をのせて關節が痛む晝　羅門

席題　ギヤンゲ

達宴は今故郷の唄となり　綠之助
眞晝ギヤンゲに電話が鈍する　羅門
悠々ギヤンゲ圍去るアスファルト　與詩雄
ギヤンゲの戀に酒場はものもよし　綠之助
(人)ギヤンゲさて恐ろしき世が移り　田鶴緒
(地)キヤンゲと警官と白き晝の月　羅門
(天)ギヤンゲは哀れ世相の反映ぞ　美登利草

席題　松岡洋右　清記互選

戰爭も辭せずと松岡熱したり　綠之助
堂々と吐く日本の松岡だ　與詩雄
聯盟へ强烈な答へとなつて出る　羅門
全權へ猪突を期せよ正義なれ　美登利草
放送へあれが松岡全權よ　夢人
新日本を小脇に抱えて松岡男なる　田鶴緒

## 川柳雜誌社　塗青例會

於青年團事務所　熊谷紅報

題　頭痛　互選

鉢卷をした頭痛の責任　岩石
頭痛する部屋のラヂオは切れたまゝ　夕鐘
頭痛してから不氣嫌の長廊下　瓢水
頭痛位と男相手にして吳れず　變人
寢むたさもすこし手傳頭痛膏　紅
洗濯の母に頭痛のする日向　鮎美
窓を開けたり閉めたり頭痛する　雅幽
頭痛する妓に元結がしまるなり　鮎美

題　泣き言　瓢水選

泣き言へ彼はたばこを吹かすだけ　元山
泣き言を背に聞くのも男なり　夕鐘
日向ぼこして泣き言の姑なり　鮎美
泣き事に來てるに酒を勸められ　白峯
泣き事に成つてしまつた子の說諭　雅幽
泣き事のあまりに丸き膝頭　青踏
泣き事の大きく映る影法師　鮎美

題　先輩　白峯選

先輩の目つきに腹が立つて來る　小柳子
先輩へ逢へば言へない事があり　變人
先輩の辛さ五圓の寄附であり　元山
飯時をはかり後輩訪れて來　岩石
先輩へ膝を崩さず居る若さ　鮎美
折れて出る事も先輩知つて居り　雅幽
輕もしく見える先輩懷手　青踏
先輩の顏が邪魔してまともうず　雅幽
赤心の努力先輩涙ぐみ　瓢水
空模樣先輩違約平氣で居　紅
(佳)昂奮をして先輩と喰になり　鮎美

題　脫帽　紅選

脫帽は涙ぐましい氣持なり　青踏
脫帽の中にハッキリ咳一つ　鮎美
背の子が脫帽してる除隊の日　岩石
脫帽をさして先生落ちつかず　夕鐘
脫帽の皆散髮をして居たり　雅幽
脫帽の父は淋しく禿げてゐる　岩石
脫帽の我に歸れば砂埃り　變人
脫帽のうや〳〵しくも御紋章　白峯
(秀)一せいに脫帽させたサイドカー　青踏
(軸)うつかりとバーへ帽子を脫ぎ忘れ　紅

題　星　夕鐘選

二番星まだ刈入れの鎌を砥ぎ　紅
フト星へ星を數へた頃思ひ　小柳子

約束の夜は奇麗な星が出て　變人
星きら〳〵と僕を嗤へり　鮎美
隊商へ星は地平の果にあり　青踏
心外を默せば星は亂れて居　岩石
窓ありて星の光の顏となり　鮎美
朝の星矢づ張り俺馬鹿でした　雅幽
寢ころべば草の匂ひの星となり　鮎美
（軸）逢たさのひとりぼっちへ流れ星　夕鐘

題　封　筒　變人選

繪封筒〳〵をしてからほゝ笑みぬ　雅幽
封筒のたゞ眞ん中に頭文字　白峯
初對面封筒をして吹まり　鮎美
男の手借りて封筒投げ込まれ　夕鐘
無心狀封筒の色替へて見る　紅
封筒へ妻に樣など書くも旅　鮎美
封筒のその筆蹟のお人柄　青踏
妹に一枚貰ふ繪封筒　雅幽
（佳）幸運が來て封筒が足らぬなり　青踏
（同）封筒の重たさすかして見たなり　小柳子
（同）封筒へ獨りほゝゑむ夜の壁　岩石
（同）悲報とも知らず封筒開かれる　瓢水
（同）言譯のたゝぬ封筒に皺がより　雅幽
（同）封筒の金で拂ふてよい氣嫌　變人
（軸）國からの封筒がある夜の膳　鮎美

兼題　心　配　小柳子選

落ちかゝつた壁へ心配續くなり　紅
心配へ老眼鏡を拭き直し　變人
心配も忘れ白百合頻ずりぬ　青踏
心配の額の先へ猪口が來る　青踏
心配へ肩をたゝいた掌が溫くし　雅幽
（秀）心配な事實淋しく笑ふのみ　岩石
（同）心配の窓のポプラへ落つる雨　瓢水
（軸）心配の水屋に一合買ふてあり　鮎美

兼題　裏　口　雅幽選

裏口をすうつと這入つたお裾分け　夕鐘
泣き事を聞いて裏口から戻り　元山
裏口へ廻る口笛二十一　青踏
風の夜る猫裏口を拔けて來る　小柳子
裏口で涙を拭いて考へる　變人
文化住宅裏口うまく利用され　滋芳
裏口の竊除けに届く日向草　瓢水
轉寢の夢裏口を開けて見る　紅
こつそりと兄裏口から戻り　岩石
裏口も流石デパート込んでゐる　滋芳
（佳）うれしさは其裏口に陽が當り　鮎美
（同）裏口へ蛙を釣つて歸つて來　青踏
（同）裏口のお世辭に秋の暮れかゝり　夕鐘
（同）大學を出て裏口を見てるなり　鮎美
（軸）裏口に富士を眺めて病む若さ　雅幽

川柳雜誌社　**御旅句會**

十一月十三日夜　於堤特許事務所

席題　身邊近況　葉平選

加茂川の水澄みてすみて京の秋　みつる
ふと出れば夜霧に冬の來るを知る　翠夢
鉦日に映えり軍國の秋　紫石
おッさんと呼ばれマッチもわたし　路郎

貧傷後

鏡が笑ふむくれた吾が顏　比古
夕燒に馬はだまつて歩くなり　同
忙がしく暮れて儲けぬ面白さ　琴人
ちりきつたポプラ何氣なく仰ぎ　同
（軸）行手はるけかり入陽よろめく　葉平

席題　茶　碗　翠夢選

茶碗の數一つ減つて雨をきゝ　即死生
父親の茶碗子供が特ちたがり　文蝶
缺け茶碗なでて母親愚痴となり　紫石
茶碗のかけた朝の淋しき　あや美
茶碗破れる音聞いて寢る　多郎
子の繪にも劣る素燒を大事がり　圓角
失業へ茶碗みつめる日の續き　みつる
ふと見れば茶碗に丸い影のあり　葉平
（軸）或日ふと茶碗のかけが淋しまれ　翠夢

席題　行　進　琴人選

逢ふた宵行進曲に送られる　多郎
强行軍昨日の疲れ又疲れ　あや美
行進の何れを見ても同じ顏　圓角
興奮が劍へ銃へついてゆく　紫石
行進の列に級長小さすぎ　翠夢

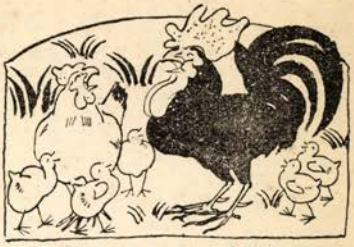
大演習の映畵見て

陸軍マーチへ觀衆の感激　みつる

兼題　幕　琴人選

活潑に幕使つて叱られる　翔奎
幕とは女中のものと思つてゐる　圓角
幕を特てばたゝ十月の病葉がちる　葉平
お光りに生きて幕の有難し　同
大掃に追はれる樣な幕うり　比古
親しさは友が來て幕持つて居る　みつる
（佳）三味線の代りになつて幕醉ひ　多郎
（同）病床で朝を掃く音きいてゐる　比古
（同）お早やうに幕隣の前へのび　文蝶
幕もつ間借り男の朝の歌　比古
（同）二階借りチビッた幕もつて行き　紫

(軸)泥棒へ番頭幕を持つて立ち　琴人
兼題　思案　路郎選
盃に向へば思案輕くとけ　圓角
その思案たゝ憂鬱にさせるのみ　みつる
火の氣ない室に思案が暗くゐる　葉平
暗い灯に思案こんよく默りきり　琴人
陳情も考慮の二字で引きさがり　比古
行く思案ついて幹事をまごつかせ　文蝶
(人)思案ではどうにもならぬ五百圓　正夫
(地)膝一つたゝいて思案つけ出る　多郎
(天)思案の火箸コツリと石にゆたかる　圓角
(軸)思案する膳に目刺が置かれたり　路郎
兼題　全快　路郎選
全快で親父の保險のびちまい　翔奎
全快をまつてた樣に用が湧き　あや美
傾いた家へ全快歸つて來　圓角
もうよいに供者をつけず母の愚痴　比古
全快はしたが失業してるなり　みつる
全快の眼に珍らしい疊の目　琴人
(人)全快もまてず南地へ逢ひにゆく　夢
(市)全快と云ふたばかりに連れ出され　芳夫
(天)ひよろなごうなつて病院後にすず　文蝶
(軸)全快に會社の庶務がよばれてる　路郎
回覽互選句集
松　茸　路郎選
夫婦氣取りも茸狩の面白さ　銀波
茸好きの夫へ市場往き戻り　禿山
松茸は買ふてあるかと上り口　キヤメラ
寒村へ毒茸に似た赤い屋根　圓角
(佳)親しさは松茸飯へまたされる　夢
音　路郎選
故郷の晨告げる雀の胸の毛よ　圓角
蟬れらふ子に息の合ふ母　同
錢の音あゝ我れ何んと無力なる　翠夢
錢の音道行く人も振り返へり　いさむ
(佳)放送のすんだしゝまり時計の音　洋々
川柳雜誌社　高知例會
十一月二十一日夜　於ブラジル中澤濁水報
席題　洗面所　翠葉選
洗面所主人の個性知つた音　柳風
洗面所お湯を出すのにかう捻り　紫白
寢不足の顏へ洗面所の白さ　春水
(客)驛までの時間へ荒い洗面所　青果
(同)洗面所練齒磨が切れてゐる　紫白
(同)洗面所櫛を裏まる船の朝　濁水
(同)朗かな朝洗面器に水は滿ち　六絃
(同)洗面所女に喋ることがあり　映珠
(人)洗面所違はぬ順へ一家無事　六絃
(地)洗面所都へ近いが賑かさ　柳風
(天)洗面所音を殘してゆづられる　濁水
(軸)朗かに都會の朝の洗面所　翠葉
日　記　青果選
就職の日から日誌をまた始め　紫白
戀はまだ知らないらしい日記帳　映珠
戀知つたことを日記は知つてゐる　春水
婚約のそれから日記忙しい　柳風
氣まぐれな戀を拾つた日の日記　映珠
自敍傳は日記と異ふことも書き　柳風
偽らず日記へ書いた朗かさ　六絃
日記帳もう隱されぬ男の名　芳水
これからは少し攝酒の氣の日記　濁水
(人)平凡な生活日記につゝくなり　翠葉
(地)喜へ日記のせまい一頁　六絃
(天)日記にもすさんだ心荒い文字　翠葉
(軸)ペン振つて〳〵儲けぬ日の日記　紫白
選　柳風
キヤンピング竹の柱でよく支え　柳風
名ばかりの柱を輕む假事務所　六絃
釘打つてならぬ柱も我家なり　青果
新築は柱の位置を考へる　芳水
疲れてる背に柱はたよられる　翠葉
接戰へ柱が邪魔な甲子園　映珠
皮むいただけの柱を風流がり　柳風
(人)入口の柱汚れた紹介所　六絃
(地)短册を持つた柱は王座に居　柳風
(天)床柱主賓の背にあたゝまり　青果
(軸)白蟻の技師に柱は叩かれる　柳風選
ピアノ　柳風選
ピアノ鳴る敎會堂の朝を鳴る　芳水
修道院晝をかすかにピアノの音　紫白
寄附をしたピアノ子供の片身なり　春水
許婚今日もピアノを彈かされる　映珠
許婚ピアノの後へそつと立ち　紫白
ごのキーも淋しい秋の音がこもり　六絃
叱られた憂さをピアノへ叩くなり　翠葉
客へ腰向けてピアノを彈く女給　青果
(人)ふと止つてピアノにふぐ未亡人　濁水
(地)戀してる弱身ピアノを賞め聞き　芳水
(天)女先生今日をピアノへあたまり　紫白
(軸)行末はテナか定めてピアニスト　柳風
（以下次號）



# 編輯の窓

山雨樓

▼明けましてお芽出度う。本誌は茲に創刊十週年を迎え、記念事業のさきがけとして新春の柳壇へ記念特輯號を贈ることの出來たのは同慶に堪えない。意義深き本年度の本誌へ一層の御後援と御鞭韃を希ふ次第である。

▼別項發表の通り來る十五日には祝賀川柳大會を開催する。著名大家を始め各地から出席の內報も數多ある。柳友諸君の壓倒的御參加を祈る。

▼本號は豫期以上原稿が山積した。お急がしい中を川村花菱氏寺川信氏から特に興趣深き御寄稿を賜つた。外に社關係の諸君から募つた「私の十年前」恒例の「日本柳壇百人撰」等好讀物滿載で、遺憾乍ら割愛の止むを得なかつた寄稿が尠くない。その點不悪御諒恕を乞ふ次第である。

▼寺川信氏はキネマ畫報界に多年活躍せられてゐる方、路郎主幹とは三十年の交友あり、今回特に本社の爲執筆せられたものである、愛讀を祈る。

▼路郎先生は御多用の中、寸暇を捉へられて味はひ深き回顧の熱筆を揮つて頂いた。何と云つても第一に愛讀を煩はさなくてはならぬものだ。

▼前月號で豫告した梅本塵山翁の「藤枕草紙」は本號から掲載する。これは蛭子省二氏の病苦を慰める爲め秋農屋翁が特に同氏に贈られたものを蛭子氏の御好意に依り誌上を飾ることゝなつたものである。

▼絲雨、かほる、柳路、雅幽、四君は創刊當時の同人でしかも今日迄わが社の爲不斷の活躍を續けられてゐる功勞者、特に近影と回顧の記事、詠草を飾ることゝした。

▼月評開催の機會を得なかつたので閑生、町二兩氏を煩はし自分と三人で前月の柳誌から「句を味ふ」の筆を執つた。

▼從來近作柳樽欄には同人社友の句を一般投句家の句と共に發表したが本號からは前者を川柳塔に合併して發表することになつた。近作柳樽欄の卷頭を爭はるゝ樣切望する。

▼本號の編輯については年末殊に多忙の折柄、路郎主幹の熱烈なる指導のもとに、編輯局同人全力を傾注して之に當つた。誌面に新味が溢れてゐるだらうことは確かによろこんで頂けると思ふ。

▼十二月號は非常に好評であつた。殊に路郎先生の「さぼは笑ふ」は詩人として將又思想人としての風貌躍如たるものがある

▼恒例の京阪神支部聯合句會は超滿員の盛會であつた。路郎主幹は兼題「大晦日」を詠んだ古川柳に付いて作句上極めて有益なる講話をされた。新水、里十九兩君をはじめ支部幹事の活躍は目覺しかつた。當夜は多數の賞品が寄贈されたが新進作家の入賞の多かつたことは愉快であつた。

▼文藝春秋新年特別號に古今川柳百名吟が出てゐる。和歌短歌百首選、俳句百句選と共に揭げられたことは愉快だ。その中で現代句は路郎先生の「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の外に日車、信子、盈光氏の句が三句あるのみ、これは餘りに少な過ぎる。先生の句の上五が「俺に似て」と誤植され、下五「子を思ひ」が「子を育て」と誤植されてゐるのは遺憾に堪えない。こゝまで誤植することは作者に對する冒瀆である。

▼絲雨君が鄕里に農民文庫を新設してその命名と共に多數の書籍を寄贈されたさうです。

▼本社別府支部幹事、木村晃卓君は豫て宿痾の爲め療養中の處御家族の手厚き看護の甲斐なく遂に去る十八日永眠された。謹んで哀悼の意を表する。

▼暮の二十三日西宮へ黑木鷲足氏を訪れる。本誌卷頭の寫眞に付尋ねたい用件を抱いて藤本印刷所から宙を飛んだのはよいがうつかり阪急に乘つたので、西宮北口から阪神の西宮東口迄滯暮の道をてくてくつた。同氏が風邪で臥てゐられる中を快く會つて下すつたのは嬉しかつた。

▼絲雨君が又僕の勤務所の向ひへ轉勤して來た。絲雨と僕は之から四つの耳をもつことになる

▼本號の校正は路郎主幹、葭乃奥樣、絲雨町二、杏三、豆秋、水車、鶴峰の諸君及自分が之に當つた。

## 投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。

▼光耀抄は女性作家に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

## 募集

### 第十卷第三號課題

一月五日締切
（各題十句以內）

▼責任　橋本綠雨選
▼街頭　松丘町二選
▼玩具　伊藤愚陀
　　上野錦水共選

### 第十卷第四號課題

二月五日締切
（各題十句以內）

▼及物　松盛琴人選
▼蛙　安西杏三選
▼花見　中島鐵洲選

### 每號募集

▼近作柳樽（雜十句）　廐生路郎選
▼光耀抄（雜吟廿句）　廐生霞乃選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

### 社告

事務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

## 定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢
（半ケ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

## 廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によって御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも屆ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事


昭和七年十二月廿五日印刷　　第十卷第一號
昭和八年一月一日發行　　（每月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　廐生幸一郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區平野西之町八三番地　**川柳雜誌社**
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店
（大阪）大寶堂　二盛社書店。（明文堂　其他　市內　各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戶）米田、寶文館（廣島）石塚
（京都）三宅　（松山）弘文舍　（石川縣）小松はかりや

# 川柳雜誌社關係の人々（いろは順）

**賛助員**

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　笠原純生　片岡直方　嘉納長次郎　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　枝國史郎　藤本卯之助　藤村作　赤井清一　淺田末弘嚴太郎

**客員**

伊藤彦造

鳥山一步　大島濤明　大谷五花村　岡田三面子　亀井花童子　川上三太郎　川村花菱　米村あん馬　吉田清　尚島平　田村孝之助　谷脇素文　窪田銀波樓　長野吉高　前田雀郎　前田五健　柴谷柴舟　篠原春雨　安川久流美

**社友**

岩垣日本村　尾生翠夢　石曾根民郎　石森靜太　市塲沒食子　春元紀太　西村山月　西村明珠　友淵貴山　大西八歩　立井登美坊　谷村稔　辻左馬　中西おさむ　中川めかく子　中野柳陽　北山悟郎　坂井拓水　櫻井圓角　太田朝陽　高橋かほる　中島鐵洲　永田里十九主幹　楊井二南麻生路郎　福田鶴峰　福田久一　形山杉水　阿部閑生　越水谷鮎美　廣江天痴人　桑原京郎　平井蒼太　日野華水　姫田夕鐘庄　萬よし　松下小柳子　三輪夏曉　三好計加　水木村晃卓　水田光穂　山本雨迷　山口變人　妹尾變人　伊藤愚陀　橋本綠雨　安井ひろし　山本丹路　松丘町二　松琴人　松盛　西田帥樂　西脇乃霞　平岩司郎　平井蒼太　日野華水　姫田夕鐘庄　萬よし　廣江天痴人　阿部閑生　越水谷鮎美　上野錦水　上村松夢　白井梅里　朝田新水　酒井駒人　須崎豆秋

**編輯局（同人）**

道頓堀支部（大阪市）幹事庄　万よし
天滿支部（大阪市）幹事北山　悟郎
神戸支部（神戸市）幹事日野　華水
函館支部（函館市）幹事龜井　花童子
高知支部（高知市）幹事中澤　濁水
梅田支部（大阪市）幹事永田　里十九
螢ヶ池支部（大阪府）幹事石森　靜太
金澤支部（金澤市）幹事中川　めかく子
田邊支部（和歌山）幹事辻　左馬
籔川支部（島根縣）幹事尼　綠之助
豊橋支部（愛知縣）幹事白井　梅里
平塚支部（神奈川）幹事酒井　駒人
加古川支部（兵庫縣）幹事水田　光穂
京都支部（京都市）幹事桑原　京郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島　鐵洲
別府支部（別府市）幹事木村　晃卓
堺　支部（堺　市）幹事八木　夜置路
松山支部（松山市）幹事坂井　拓水
守口支部（大阪府）幹事朝田　新水
御旅支部（大阪市）幹事生田　翠夢
高岡支部（富山縣）幹事越田　久水
天王寺支部（大阪市）幹事須崎　豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事妹尾　變人
小松支部（石川縣）幹事上野　錦水
御池橋支部（大阪市）幹事村松　夢裡
松江支部（松江市）幹事廣江　天痴人
塗青支部（大　阪）幹事熊谷　紅
西條支部（愛媛縣）幹事荒井　英賀夫
光　繩　舍（大　阪）幹事竹内　機見女
萩ノ茶屋支部（大阪）幹事奥野　禿山
北濱支部（大　阪）幹事谷村　稔
今里支部（大　阪）幹事吉田　水車

# 祝創刊十周年記念號

謹賀新春

## 川柳此花句會

正賀

石花渡川賴堤松前馬古藤佐岸岸水中

村谷本本次田澤淵田盛　廣西邊房田

久

野芳木香紫更晶千琴比弘龍碧即石（イロハ順）

大

樓洲夫兎峯石生水里人古法美　人

# 祝創刊十周年記念號


北海道に一つの川柳雜誌

「かもめ」一部金拾五錢

一月元旦

函館市青柳町五〇　龜井方

函館川柳社

電二〇四三番

一歩、汀柳、雨迷

川柳たまむし吟社

六浦、葉平

大阪市東淀川區中津濱通一丁目百二番地


謹賀新春

鶴町支部

大正區鶴町一ノ一七　石村正路

大正區鶴町三ノ一一〇　岩橋岩石

大正區泉尾中通り一ノ六五　加藤一笑

大正區三軒家西二ノ六　松下小柳子

大正區鶴町市電寄宿舍　照屋寬柳

大正區鶴町三丁目八八　宮岡白峯

同　宮岡公子

大正區鶴町四ノ一六四　妹尾變人

大正區鶴町三ノ一一〇　關本雅幽

大正區三軒家市場通り二ノ四六　林　しげる

大正區鶴町一ノ二四　角田のぶを

# 祝創刊十周年記念號

大谷五花村主宰

## 東北川柳會

福島縣白河町番士小路

振替口座東京一四〇一五番

大島濤明

大連市西公園町一四九

新春より再び柳界に復活する運びに至りました、何卒諸氏の御指導を切望致します。

川柳雜誌北濱支部

谷村稔

大阪市東區北濱一丁目武鹿方

# 祝創刊十周年記念號

謹賀新春

## 川柳雜誌社

## 梅田支部同人

姫水樋吉横天辻小藤永

田夕鐘
大阪市港區東田中町八ノ四四

谷鮎美
大阪市西淀川區大和田町六三六

口坊茄子
大阪市西淀川區福町二二五

田晩春
尼崎市外杭瀬字高田六

田方眠
大阪市西淀川區姫島町五二二

野卜居
大阪市住吉區喜連町二一九六

遊歩
兵庫縣武庫郡大庄村字西一二七

寺鳴玉
兵庫縣武庫郡大庄村字西榮地四盃

澤白菊
兵庫縣武庫郡今津町字洲鳥三三

田里十九
大阪市南區疊屋町六

川柳雜誌社高岡支部
越田久水
高岡市大佛前

山根木公
京都市清水五條新道八

田中欵乃
京都市松ヶ崎六ノ坪

眞方波樓
京都市相國寺西門前町（岡田方）

伊藤愚陀
大阪市東區仁右衛門町五〇八上

# 祝創刊十周年記念號

## 川柳雜誌社神戸支部

西村明珠　神戸市兵庫區三川口町三丁目一九〇

豊田繁堂　神戸市神戸區中山手通一丁目六三六

小原吉左右　神戸市湊區馬場町一二三

眞田幸捐　神戸市神戸區再度筋三九ノ八二

喜多春秋　神戸市兵庫區三川口町三丁目一〇八

首藤竹楓　神戸市須磨區村雨町六丁目二ノ一四

日野華水　神戸市神戸區中山手通七丁目一七七

## 川柳雜誌社

## 御旅吟社（電東六七三七）

大阪市東區粉川町一六、生田方

東區粉川町一六　生田翠夢
東區十二軒町二六　春元紀太
濱速區關谷町一ノ七　長谷川碧天
西成區西池皿町二九　土井文蝶
東區十二軒町六　神戸正夫
東區東賑町一九　村上翔奎
東區內久寶寺町三ノ一五　山本千壽
東區和泉町二丁目一八　增田半醉
東區十二軒町　春元方　松田多郎
同　近藤いさむ
東區農人橋二丁目二六　江戸みつる
東區內久寶寺町三、五十次特許方　櫻井圓角
西成區西皿池町二七　北川あや美
濱速區貝柄町六　道田葉平
白井羅仙

# 祝創刊十周年記念録

吉川啞人
山口縣久賀町
電話一四番

富士野鞍馬
東京市王子區堀船町
一丁目一三四

大阪帝國大學醫學部
長崎柳秀

名越不然
神戸市灘區大石一五ノ九

中澤濁水
高知市本與力町

竹田芦穂
大阪市港區八條通二丁目

萩之茶屋支部
奥野禿山
大阪市西成區旭北通一ノ四
木村銀波
大阪市西成區東萩町七

大鶴喜由
大阪市東成區大今里町
四百三十二番地
市塲沒食子
大阪市東成區大今里町
三百九十五番地

川柳雜誌社小松支部
寺田白山坊
石川縣小松町八幡町
上野錦水
石川縣小松町本折町
電話五八番

# 祝創刊十周年記念號

阿部閑生
大阪市外豐中
千歲通二丁目

福田山雨樓
大阪市浪速區湊町保線事務所
電話戎一〇〇三番

打ち續くマスト朝の海の靄
渡邊虹衣
大阪天王寺區上ノ宮町六一

佐々木三福
大連市櫻花臺一四一番地

藤里好古
大阪市北區河內町二ノ一

高島玉兎朗
東京市日本橋區松島町四四

住田亂耽
兵庫縣魚崎町五九二八ノ二
電話魚崎二八五七

福田鶴峰
大阪市天王寺區北河堀町六二

松丘町二
大阪市東成區別所町五〇二

安西杏三
大阪市東成區北清水町八九一

# 祝創刊十周年記念號



川柳雜誌社西條支部

越智虹一　愛媛縣新居濱町磯浦

菅白虹　愛媛縣西條町下島山

田村西英子　愛媛縣新居郡角野村

黑川孤鶴　愛媛縣西條町八千代港

荒井英賀夫　愛媛縣西條町新町

白川矢舟　愛媛縣西條町新町

今村吉朗　尼崎市中大物町六〇

阪崎串二　尼崎市中大物町五一

清水虛白　尼崎市西大物町五一

大阪市東區今橋二丁目
關西土地句會

大橋素月

竹原一久

八田鐘生

小西無鬼

放浪へ附箋の附いた賀狀も來

岩崎柳路

岩崎松代　滿洲國奉天加志町六
大同ビル三〇號

## 大阪卓球會館

大阪市天王寺區上汐町一丁目

增位汀柳

平井靑踏　大阪市西區南堀江上通五ノ六

# 祝創刊十周年記念號

番傘川柳社

横濱市神奈川區反町二七番地
川柳みなと吟社

信州湯田中
柳風會

川柳雜誌鳥取支部
川端柳社
中島鐵洲
鳥取市川端町一丁目

川柳雜誌社天王寺支部
泉三郎
住吉區天王寺町三〇四九堀内方
吉田水車
東成區片江町四五三
岡詩郎
住吉區天王寺町三〇四六
崎豆秋
住吉區旭町三ノ一四

川柳雜誌社
塗青支部

橋本綠雨
大阪市住吉區平野西ノ町八三
電話天王寺一一六七番

川柳街新年號 菊版 八〇頁 一部金拾五錢
敢て廣言す・川柳街を知らずして昭和八年の川柳を語るべからず・火線一望新春の生氣おどるいま・「川柳街」は堂々その前衛に先驅せんとす・一讀絶讃を賜へ
京都市寺屋町通上長者町南
發賣所 川柳街事務所

# 祝創刊十周年記念號

賀正

川柳街社

賀正

正月無休

柳談小集

を歡迎いたします

霞乃

玉出本通十五間道路一の辻四入

キング喫茶店

# 祝創刊十周年記念號

西村山月
大阪市東成區深江町九八九

高見柳骨
神戸市外山田村鈴蘭臺住宅地二四五

前田五健
松山市眞砂町二一

川柳雜誌社簸川支部
尼綠之助
島根縣今市町

金泉萬樂
尼崎市西本町北通二丁目五八

大西八步
大阪市東區博勞町一ノ一八（竹中方）

西田艸樂
大阪市東區岡山町三七四 電話東二二八二番

竹內機見女
大阪市天王寺區寺田町三

高橋かほる
大阪市南區北炭町二〇一 電話南五九六番

後藤靑兒
大阪市東成區南生野町二丁目三八

西いろを
大阪市住吉區濱口町二九二

村松夢裡
堺市出島町三五八

岩垣日本村
大阪市天神橋筋七ノ十三 三代化學研究所

幸松四五磨
大阪市西區阿波座通二丁目一九

奈良井柳人
松江市雜賀町

蟷螂川柳社
河野夜王
大阪市東成區鴫野町三〇〇ノ五〇三

楊井二南
大阪市東區北濱五丁目三五 ナショナル銀行內（電本局三六〇三）

光穗改メ
水田光哉
兵庫縣加古川町榮町

# 祝創刊十周年記念號

明石柳次
大阪市東區北久太郎町四丁目藤井方

三好計加
愛媛縣道後湯之町

川柳大佛の會
神戸市兵庫區三川口町一丁目一八四

杉谷湖山
鳥取市職人町

はりこ吟社
京都東大路三條北

川柳雜誌社松江支部
廣江天痴人
松江市外乃木村上乃木

松野えいを
大阪市住吉區平野流町八一四

横山勝二
大阪府豊中町新免九二二

川柳雜誌社
窪田銀波樓
金澤市裏古寺町一八

川柳雜誌社
螢ケ池支部

川柳雜誌社
御池橋支部
西區四ツ橋南日本樂器會社大阪支店內

平岩司郎
京都市嵐山天龍寺前

「川柳隊」
青森川柳社同人一同
青森市片岡一七七田澤有右方

橋本牙羊
石川縣石川郡安原村

俣田華峰
石川縣金石町港町

大阪媛柳川柳會
森鷄牛子
大阪市此花區西九條上通二丁目

北山悟郎
大阪市東淀川區本庄川崎町三ノ二三

川柳週刊大豐橋
白井梅里
豊橋市牟呂町二二一

## 道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衞生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過きてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

（路郎生）

# 古本は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲**日本橋**を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

賀正

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話南五六二番

---

**加茂川句會**

日時　一月廿一日(日)午後六時半
會場　神源寺(京都四條繩手東入)
兼題「商人」三句　新水選
兼題「校門」三句　司郎選
會費金參拾錢
京都市七條大宮東入桑原方
京都支部

**日日柳壇募集**

「兄弟」一月七日〆切
「福引」一月十四日〆切
用紙　葉書
(投句先)　大阪市此花區上福島南三ノ六六　松盛琴人宛

**綠雨居偶會**

(日時)　一月七日夜
(所)　大阪市住吉區平野西之町八三　橋本綠雨

**檸檬ケ池支部句會**

(日時)　一月八日午後一時
(所)　大阪阪急沿線刀根山病院内
幹事　龜井愚龍

**天王寺支部句會**

(日時)　一月十一日夜
(所)　大阪市天王寺區寺田町東入釜本柳村方
幹事　須崎豆秋

---

**短册頒布**

筆者　**麻生路郎先生**

上短册一葉金參圓　送費不要
作品は入金順に發送、振替は「大阪七五〇五〇」を利用されたし(句の希望の方はお知らせ下さい)
大阪市住吉區平野西之町八三番地
川柳雜誌社事務所内、短册頒布係

**申込所**

**懸賞川柳募集**

題　「處女」　路郎選
一月十日締切
▼用紙　官製ハガキ(化粧柳瞳と明記の事)
▼賞品　その他雜吟を募る
▼▼投吟　秀逸數句謝を呈す
大阪市玉出本通三の三六
麻生路郎氏宛

**化粧新聞社**

▽**川柳雜誌投句用箋**

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴一冊　(價金拾二錢　送料共)
▼御申込は本社事務所宛。
(一錢切手代用不苦)

**川柳社告**

**川柳手拭**の染筆　一枚　路郎主幹
金拾五錢(送料共)




# トラ印軟クリーム

謹賀新年

積年の研究により純眞なる品質は
完全に結成致しました本年は一層
本品の御愛用を懇請致します

賀正

## カルメン喫茶店

經營　永田里十九

謹賀新年

# 關西製本所

所主 片山一郎

大阪市東區南農人町一ノ三三

電話東三八五五番

# 祝創刊十周年記念號

謹賀新年



社主　藤本卯之助

## 弊社の特種設備

高速度式嶄新輪轉機の設備と活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にして新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

## 營業種目

新聞雜誌印刷、圖書出版引受、紙型鉛版活字製造販賣、各種製版印刷、其他附隨事業一切

川柳雜誌創刊以來の印刷所


**藤本兄弟社印刷所**

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番・七七〇番

振替大阪八二八四番

# 清酒

賀正

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴陣う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る




攝津灘 嘉納合名會社醸

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髄腦

# 伊豆椿ポマード

國產唯一　大島椿の精




伊豆椿香油本舗

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

# 南海電車

大阪・難波

【沿線名所案内呈上】

## 惠方は南です

年始も遊覽も先づ

## 住吉まいり

をお濟しになつてから

## ▽高野山スキー場

設備充實、電車賃大割引中

## ▽白濱・湯崎溫泉

田邊まで汽車開通

難波驛より連絡至便



# にきびとり 美顔水




## 面白い様に効く！

**年来の信用！的確の効果！**

▲**ニキビ吹出物に**——頑固なニキビ吹出物にも本當に的かに、而も何等の副作用をも伴はず、日に見えてよく効くので非常な評判です！年来の信用！効果は彌々向上してゐます！

▲**眞正の美の成長**——尚ほ少量づゝ常用すればニキビ吹出物を防ぎ、適度に脂肪を去り、キメを細かに艶をよくし、磨き込んだやうに美しくなりますので大へん喜ばれてゐます！

▼素顔の美を貴ぶ
御家庭人の親友▲

発賣元 株式会社 桃谷順天館



大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和七年十二月廿五日印刷納本昭和八年一月一日発行

川柳雑誌（第一〇八號）

本號ニ限リ定價金四拾錢